

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要27



—仙ノ山地区・金森家地点・佐毘売山神社地点—

2020年3月

島根県大田市教育委員会

序

大田市教育委員会では、石見銀山遺跡の保存活用を進めるため、ユネスコ世界遺産に登録されて以降も、島根県教育委員会と合同で調査研究を継続して実施してまいりました。

ご存じのとおり、石見銀山遺跡は、16世紀から20世紀にかけての、採掘から精錬までが行われた鉱山跡、銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道と周辺の山城跡、銀鉱石や銀の積み出しや諸物資を搬入した港湾などからなる複合的な遺跡です。こうした特質のある遺跡価値の顕在化には、発掘調査・文献調査・石造物調査などの総合的な調査が必要となります。

このうち発掘調査については大田市教育委員会が主体となって実施しております。本書は、平成30年度と令和元年度に実施した仙ノ山と金森家地点、佐毘売山神社の発掘調査の概要報告でございます。

この学術的な調査結果を得ることができたのは、石見銀山遺跡調査整備活用委員会及び石見銀山遺跡調査専門委員会の諸先生方をはじめ、文化庁、島根県教育委員会など、関係各機関のお力添えがあればこそと、衷心より厚く御礼申し上げます。

あわせて調査実施を快諾いただきました土地所有者の方々には、あらためて深く感謝申し上げる次第でございます。

得られました調査結果を、将来に向けての保存・活用の資料とするとともに、長期間蓄積してまいりました調査研究成果と比較・検討によるフィードバックを行うことで、遺跡への関心や愛着の意識高揚はもとより、「わが里を誇りに思い、ふるさとを愛す」広い視野のある人材育成の手立てとしていくよう、今後も取組んでまいる所存でございます。

令和2年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 船木 三紀夫

例 言

1. 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 本書は、平成30年度・令和元年度に仙ノ山地区、金森家地点、佐毘売山神社地点、伝統的建造物群保存地区で実施した調査の概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

太田洋子(合同会社家の女たち代表社員)

高安克己(島根大学名誉教授)

田中哲雄(元東北芸術工科大学教授)

内藤ユミイザベル(日本イコモス国内委員会理事)

仲野義文(石見銀山資料館館長)

村田信夫(歴史的建造物修復建築家)

黒田乃生(筑波大学大学院教授)

田邊征夫((公財)大阪府文化財センター理事長)

玉串和代(元島根県立古代出雲歴史博物館館長)

中塩 弘(DOWAホールディングス(株)取締役)

中村俊郎(中村ブレイス(株)代表取締役会長)

和上豊子(元石見銀山ガイドの会会長)

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁(島根県立三瓶自然館学芸課課長)

岡美穂子(東京大学史料編纂所准教授)

高妻洋成(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長)

田邊征夫((公財)大阪府文化財センター理事長)

中西哲也(九州大学総合研究博物館准教授)

原田洋一郎(東京都立産業技術高等専門学校教授)

山村亜希(京都大学大学院准教授)

大橋泰夫(島根大学法文学部教授)

黒田乃生(筑波大学大学院教授)

佐々木愛(島根大学法文学部教授)

津村眞輝子(古代オリエント博物館研究部長)

仲野義文(石見銀山資料館館長)

松村恵司(奈良文化財研究所所長)

〔事務局〕 大田市教育委員会教育部石見銀山課

〔調査員〕 山手貴生・新川 隆・尾村 勝(大田市教育委員会教育部石見銀山課)

〔遺物整理〕 高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5. 挿図の縮尺は、図中に示した。
6. 挿図中の座標は、仙ノ山地区と金森家地点では旧日本測地系の座標を、佐毘売山神社地点では世界測地系を使用した。また、レベル高は標高を示す。
7. Fig. 1 は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。
8. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。
SB—住居跡 SD—溝跡 SK—土坑 SX—炉跡、特殊遺構
9. 挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。
10. トレンチの記載については、挿図中や表中では、○Tと略して表記している。
11. 発掘調査にあたっては、大橋泰夫氏、中井均氏(滋賀県立大学教授)より、ご指導・ご教授を賜った。
12. 本書の執筆は、第2章第4節第1・3項を新川が、第2章第5節第1項を原田将典(島根大学文学部学部生)が、第6節第3項を高田遼和(島根大学文学部学部生)が、それ以外を山手が行った。本文中の挿図は、遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。
13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 図版の表現

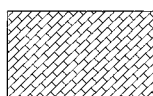
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

〔遺 構〕



被熱土壌



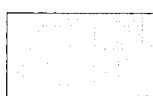
岩盤



炉壁



黄色粘土



灰白色粘土



灰色土

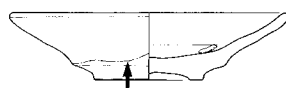
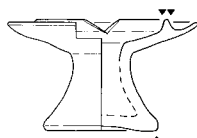


カラミ (精錬滓)



黒色土 (炭層)

〔遺 物〕



煤



膜状付着物



炭化物



被熱部分

図中の▼印あるいは一点鎖線(図中↑箇所)は施釉範囲の境界を示す。

2. 本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ リ・・・選鉱過程にて除去される化学的变化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カ ラ ミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

本文目次

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と概要	1
第2節 平成30(2018)・令和元(2019)年度の調査	2

第2章 仙ノ山地区の調査

第1節 調査地の周辺環境	5
第2節 調査にかかる経緯	5
第3節 調査の概要	5
第4節 A区の調査成果	5
第5節 B区の調査成果	15
第6節 C区の調査成果	17
第7節 D区の調査成果	18

第3章 金森家地点の調査

第1節 調査の概要	23
第2節 調査の成果	23

第4章 佐毘売山神社地点の調査

第1節 佐毘売山神社の位置と概要	45
第2節 調査の成果	45

第5章 本年度の試掘・立会調査

第1節 平成30年度・令和元年度の調査地点	53
第2節 吉岡家地点の調査	53
第3節 荒田家地点の調査	53

第6章 総括

第1節 仙ノ山地区	57
第2節 金森家地点	57
第3節 佐毘売山神社地点	58
第4節 まとめ	59

挿図目次

Fig. 1	石見銀山遺跡位置図(S = 1 / 100,000)	1
Fig. 2	石見銀山遺跡調査地点位置図(S = 1 / 20,000)	4
Fig. 3	仙ノ山地区調査地点位置図(S = 1 / 1,500)	6
Fig. 4	仙ノ山地区頂上部地形測量図(S = 1 / 250)	7
Fig. 5	仙ノ山地区第1トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 100)	8
Fig. 6	仙ノ山地区第4トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 80)	9
Fig. 7	仙ノ山地区第5トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 80)	10
Fig. 8	仙ノ山地区第5トレンチS K01・S D03土層断面(S = 1 / 40)	11
Fig. 9	仙ノ山地区第2・3トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 80)	12
Fig.10	仙ノ山地区第6・7・8・9トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 80)	14
Fig.11	仙ノ山地区第10・11・12トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 80)	16
Fig.12	仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅰ(S = 1 / 3)	17
Fig.13	仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅱ(S = 1 / 2、1 / 3)	18
Fig.14	仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅲ(S = 1 / 3)	19
Fig.15	大森銀山伝建地区内発掘調査・試掘・立会地点位置図(S = 1 / 10,000)	22
Fig.16	金森家地点調査区配置図(S = 1 / 500)	24
Fig.17	金森家地点主屋遺構平面図(S = 1 / 100)	26
Fig.18	金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅰ(S = 1 / 3)	27
Fig.19	金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅱ(S = 1 / 3、1 / 4)	28
Fig.20	金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅲ(S = 1 / 2、1 / 3)	29
Fig.21	金森家地点S X01平面図・立面図(S = 1 / 40)	32
Fig.22	金森家地点S X01土層断面図(S = 1 / 40)	33
Fig.23	金森家地点S X01出土遺物実測図Ⅰ(S = 1 / 3)	35
Fig.24	金森家地点S X01出土遺物実測図Ⅱ(S = 1 / 2、1 / 8、1 / 13)	36
Fig.25	金森家地点S X01出土遺物実測図Ⅲ(S = 1 / 6)	37
Fig.26	金森家地点S X01出土遺物実測図Ⅳ(S = 1 / 8、1 / 40)	38
Fig.27	金森家地点S X02出土遺物実測図(S = 1 / 3)	39
Fig.28	金森家地点庭トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 50)	40
Fig.29	金森家地点裏門立会トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 40)	41
Fig.30	金森家地点S X03平面図・断面図(S = 1 / 20)	42
Fig.31	金森家地点S X03内部平面図・立面図(S = 1 / 40)	43
Fig.32	金森家地点出土遺物実測図(S = 1 / 2、1 / 3)	44
Fig.33	金森家地点S X03出土遺物実測図(S = 1 / 3)	44
Fig.34	佐毘売山神社地点調査区配置図(S = 1 / 500)	46
Fig.35	佐毘売山神社地点A区平面図・断面図(S = 1 / 120)	47
Fig.36	佐毘売山神社地点A区第1・2・3トレンチ土層断面図(S = 1 / 20)	48
Fig.37	佐毘売山神社地点B区第1トレンチ平面図・断面図・立面図(S = 1 / 60)	50
Fig.38	佐毘売山神社地点B区第2トレンチ平面図・断面図(S = 1 / 40)	51
Fig.39	佐毘売山神社地点出土遺物実測図(S = 1 / 2、1 / 3)	52
Fig.40	吉岡家地点遺構平面図・断面図(S = 1 / 40)	53
Fig.41	荒田家地点トレンチ平面図・土層断面図(S = 1 / 40)	54
Fig.42	荒田家地点出土遺物実測図(S = 1 / 2、1 / 3)	55

表目次

Tab. 1	石見銀山遺跡調査一覧	3
Tab. 2	仙ノ山地区出土遺物一覧表Ⅰ	20
Tab. 3	仙ノ山地区出土遺物一覧表Ⅱ	21
Tab. 4	金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅰ	27
Tab. 5	金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅱ	30
Tab. 6	金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅲ	31
Tab. 7	金森家地点S X01出土遺物一覧表	39
Tab. 8	金森家地点S X02出土遺物一覧表	39
Tab. 9	金森家地点出土遺物一覧表	44
Tab.10	金森家地点S X03出土遺物一覧表	44
Tab.11	佐毘売山神社地点出土遺物一覧表	52
Tab.12	荒田家地点出土遺物一覧表	56

図版目次

PL.01 仙ノ山地区	第1トレンチ S X02検出状況(西より)	同	S X01土層断面(北より)
同	溝状遺構(西より)	同	S X01土層断面(西より)
同	北壁土層断面(南東より)	PL.07 金森家地点	S X02検出状況(南西より)
同	北壁西端土層断面(南より)	同	庭トレンチ調査区全景(南西より)
同	完掘状況(東より)	同	庭トレンチ完掘状況(西より)
同	完掘状況(西より)	同	裏門立会トレンチ完掘状況(南より)
PL.02 仙ノ山地区	第2トレンチ完掘状況(南西より)	同	石列前面検出状況(南西より)
同	完掘状況(南東より)	PL.08 金森家地点	S X03完掘状況(東より)
同	第3トレンチ完掘状況(南東より)	同	S X03内部完掘状況(北東より)
同	完掘状況(南西より)	同	S X03扉軸受け部(北東より)
同	第4トレンチ完掘状況(南西より)	同	S X03北壁(南より)
同	完掘状況(西より)	同	S X03東壁(西より)
同	完掘状況(北より)	PL.09 佐毘売山神社地点	A区完掘状況(北より)
同	西壁土層断面(北東より)	同	完掘状況(南より)
PL.03 仙ノ山地区	第5トレンチ調査区設定状況(南東より)	同	完掘状況(東より)
同	S D01完掘状況(南東より)	同	玉砂利敷検出状況(南より)
同	S D01完掘状況(北西より)	同	側溝検出状況(北西より)
同	S D02完掘状況(西より)	同	土層断面(南より)
同	S D03完掘状況(北東より)	PL.10 佐毘売山神社地点	B区第1トレンチ
同	S K01半截状況(南より)	同	完掘状況(南西より)
同	北壁土層断面(南西より)	同	完掘状況(北東より)
同	西側完掘状況(南東より)	同	遺物出土・焼土検出状況(南西より)
PL.04 仙ノ山地区	第7トレンチ完掘状況(南東より)	同	本殿西側石垣(北西より)
同	北壁土層断面(南西より)	同	本殿下岩盤検出状況(西より)
同	第8トレンチ調査区設定状況(南西より)	同	B区第2トレンチ全景(北東より)
同	完掘状況(西より)	吉岡家地点	石敷検出状況(北東より)
同	第9トレンチ完掘状況(西より)	荒田家地点	石列検出状況(北より)
同	調査区設定状況(北東より)	PL.11 金森家地点	S X01完掘状況(西より)
同	第10トレンチ完掘状況(南西より)	同	S X01完掘状況(東より)
PL.05 仙ノ山地区	第10~12トレンチ調査区設定状況(南西より)	PL.12 仙ノ山地区	第1・第3トレンチ出土遺物
同	完掘状況(西より)	同	第4トレンチ出土遺物
同	第11トレンチ完掘状況(北西より)	PL.13 仙ノ山地区	第5・第9・第11トレンチ出土遺物
同	完掘状況(南より)	金森家地点	出土遺物Ⅰ
同	第12トレンチ櫓柱穴完掘状況(南西より)	PL.14 金森家地点	出土遺物Ⅱ
同	完掘状況(南東より)	同	出土遺物Ⅲ
同	第10~12トレンチ完掘状況(北東より)	PL.15 金森家地点	出土金属製品
同	完掘状況(北西より)	金森家地点・荒田家地点	出土金属製品
PL.06 金森家地点	S X01脇釜完掘状況(東より)	PL.16 金森家地点	出土遺物Ⅳ
同	S X01大釜完掘状況(東より)	PL.17 金森家地点	出土遺物Ⅴ
同	S X01作業場完掘状況(北西より)	PL.18 佐毘売山神社地点	出土遺物
同	S X01作業場階段(南西より)	荒田家地点	出土遺物

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と概要

第1項 石見銀山遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は、島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約6kmの内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や、要害山などの海拔400～500mの山々が連なり、山間には深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間の水系の間を縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は16世紀から20世紀にかけて鉱業活動が行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道、銀・鉛・銅の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した

港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれらの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成19(2007)年にユネスコ世界遺産に登録された。

第2項 調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、大田市教育委員会が昭和58(1983)年度から開始した。昭和60(1985)年度には島根県教育委員会によって『石見銀山遺跡関連遺跡分布調査報告書』が刊行され、石見銀山遺跡とその周辺の銀山関連遺跡の分布が明らかとなった。昭和61(1986)年度には県教委によって『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』が刊行され、拠点箇所での発掘調査を継続するこ

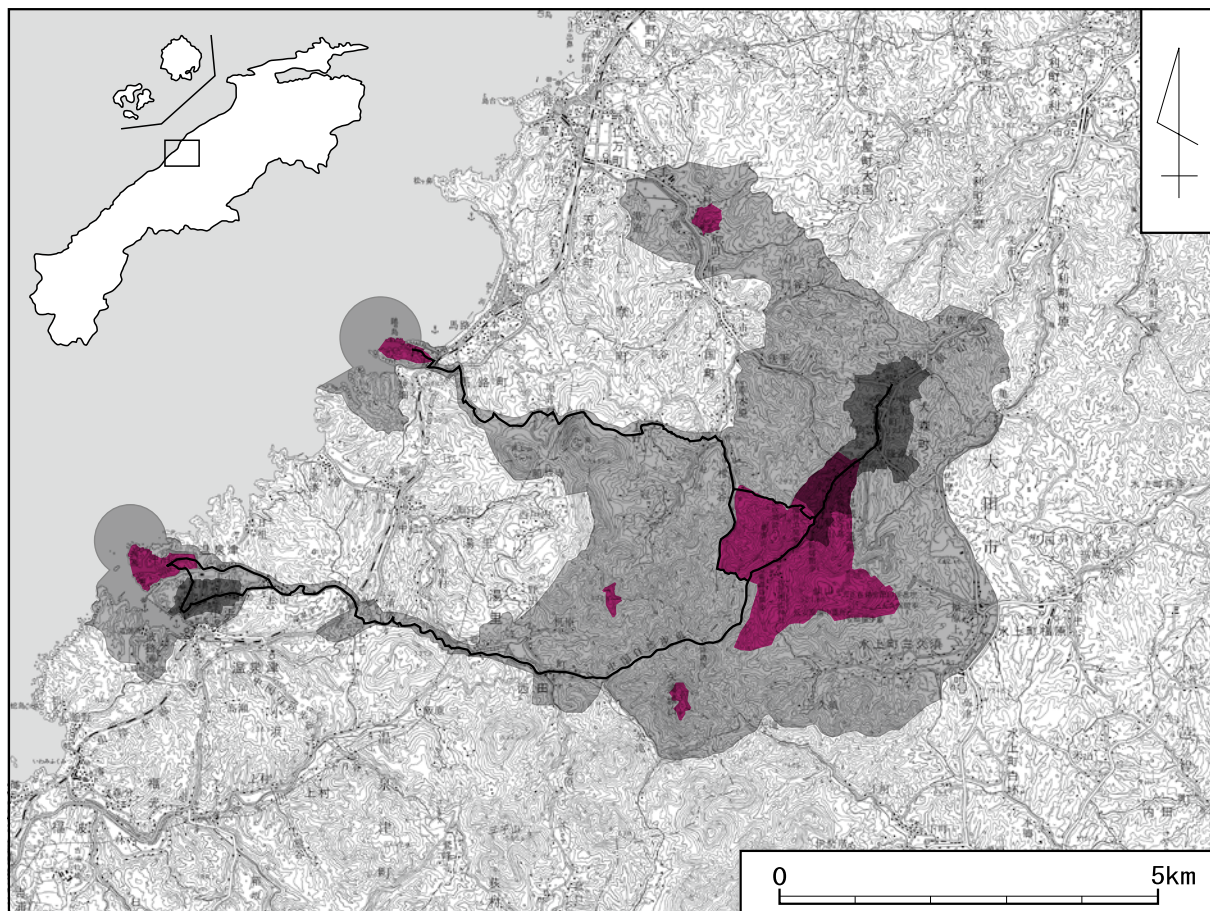


Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000)

とが、石見銀山の歴史を明らかとしていく上で重要であるという指針が示された。その指針に基づいて、昭和 63(1988) 年からは県教委と市教委が共同で、平成 18(2006) 年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8 (1996) 年度からは、石見銀山遺跡総合調査が開始され、平成 14(2002) 年度にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行われた。その後、調査の進展と共に、さらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20(2008) 年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1 のとおりである。

第2節 平成 30(2018)・令和元(2019)年度の調査

第1項 調査の概要

平成 30 年度は、仙ノ山地区と大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区(以下、大森銀山伝建地区)内の金森家地点、佐毘売山神社地点の発掘調査を実施した。令和元年度は、仙ノ山地区と金森家地点の調査を実施した。両年度とも、史跡地内および伝建地区内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施した。

仙ノ山地区の発掘調査は、中長期の発掘調査計画に基づき、平成 30 年度・令和元年度の2か年にわたって実施した。石見銀山遺跡においては、発掘調査課題として、生産・生活・支配・信仰・流通の5項目を挙げている。これまでの調査では、これらの5項目の内、「生産・生活」に関連する成果が中心に蓄積されてきている。その一方で、支配・信仰・流通の3項目の解明を目的とした本格的な発掘調査は未着手であった。そのため、過去の分布調査によって、山城の所在が指摘されてきた仙ノ山を対象として発掘調査を実施した。

金森家地点においては、平成 27 年度より建物の修理整備事業が始まり、平成 30 年度に主屋の修理が完了した。この修理整備事業に伴い、地下遺構の有無の確認や、土地履歴の確認を目的とする発掘調査を併せて実施した。発掘調査対象地点は、

平成 28 年度から平成 30 年度までの3年間は主屋、令和元年度は東土蔵である。平成 30 年度には主屋東部の調査を実施し、近代の酒造業に関連する一連の施設跡が検出された。金森家地点においては近世に居住していた川北家から、近代の高橋家の時期には酒造業を営んでいたことが、文献史料などによって知られていた。今回の遺構検出により、それらの中でも近代における酒造の様相が明らかとなった。また、近代の酒造業に関連する遺構は、国内でも検出例が少なく、貴重な事例といえる。令和元年度は、東土蔵の床組み解体に伴って存在が明らかとなった地下蔵の記録調査を実施した。加えて、両年度とも敷地内において小規模な掘削を伴う際には立会調査を行い、遺構の有無を確認した。

佐毘売山神社地点においては、拝殿東側の遊歩道整備事業に先立ち、参道に関連する遺構の有無を確認することを目的として発掘調査を実施した。また、本殿と拝殿の境に所在する石垣について、構築状況の確認のために調査を実施した。発掘調査によって、石段や側溝などの参道に関連する遺構が検出されたほか、一部の断割によって路盤面の構築状況が明らかとなった。本殿と拝殿の間に設定したトレンチでは、一部に焼土面が検出された。また、石垣の一部には被熱と積直しの痕跡も認められた。いずれも、文化 15(1818)年に発生した火災の痕跡の可能性がある。

第2項 指導関係及び公開事業

平成 30 年度には、6月29日と11月15日に大橋泰夫氏(島根大学教授)、9月6日に中井均氏(滋賀県立大学教授)から、仙ノ山地区の発掘調査方針や調査成果の検証に関して指導を頂いた。令和元年度は、仙ノ山地区の発掘調査方針及び成果の検証に加えて、令和2年度以降の発掘調査計画について、5月21日と11月5日に大橋泰夫氏から指導を受けた。

公開事業としては、令和元年8月30日から石見銀山遺跡世界遺産センター情報コーナーにて調査成果に関する展示を随時おこなっている。また、平成 30 年 6 月 9 日と、令和元年 8 月 25 日に金森家地点において遺跡説明会を開催した。

Tab. 1 石見銀山遺跡調査一覧

年 度	西 暦	調 査	調 査 地 点	備 考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑨龍源寺間歩	
平成元年	1989	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場	
2 年	1990	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家)	
14 年	2002	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家)	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	発掘調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区(岡家)	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区(宗岡家)	
19 年	2007	発掘調査	⑱安原谷、下河原、町並み保存地区(渡辺家)	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区(柳原家、渡辺家)、⑲清水谷製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区(杉谷家、渡辺家)、清水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、⑳昆布山谷、港湾集落	
23 年	2011	発掘調査	昆布山谷、石銀、町並み保存地区(旧大住家)、港湾集落	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷、港湾集落	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家)	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家)、㉑豊栄神社	
28 年	2016	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家、金森家)	
29 年	2017	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(金森家)、豊栄神社	
30 年	2018	発掘調査	㉒仙ノ山、町並み保存地区(金森家)、佐毘売山神社	
令和元年	2019	発掘調査	仙ノ山、町並み保存地区(金森家)	

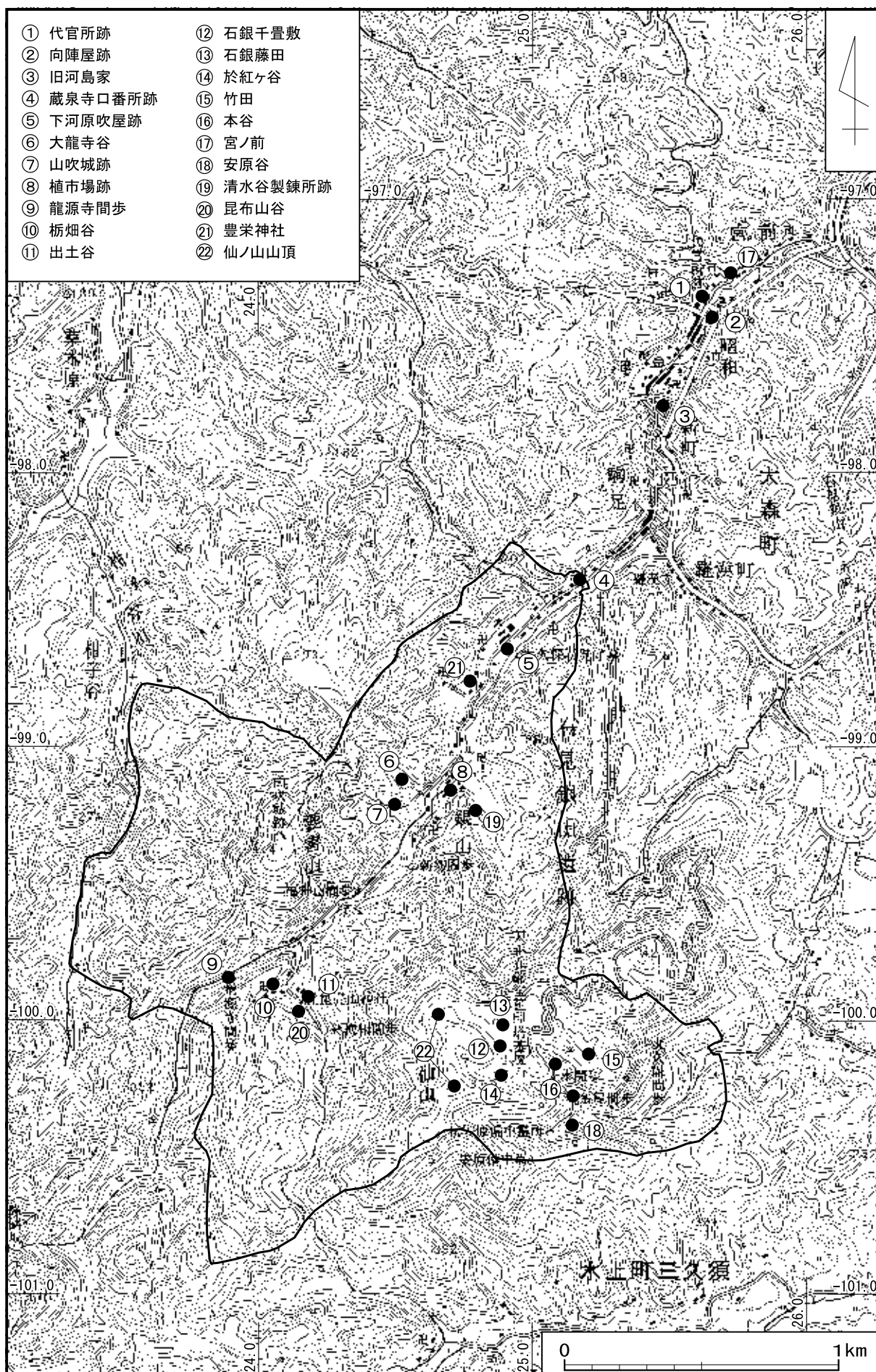


Fig. 2 石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 20,000)

第2章 仙ノ山地区の調査

第1節 調査地の周辺環境

仙ノ山は、石見銀山の中核であり、大永7(1527)年の発見伝承の舞台となった場所である。本地点の東側に所在する石銀地区においては、発掘調査によって戦国時代末から江戸時代初期の集落が見つかっているほか、墓所や路頭掘り跡などの、鉱山集落に関連する遺構が多く残されている。また、仙ノ山東側斜面及び尾根には多くの平坦面が点在しており、墓所なども多く所在している。

第2節 調査にかかる経緯

仙ノ山は上記のとおり、石見銀山再発見の舞台であり、採掘が始まった当初の中心地であった。昭和60年度に島根県が刊行した『石見銀山関連遺跡分布調査』でも、仙ノ山は山城として報告されている。ただし、この時点では十分な調査は実施されておらず、今後の課題として分布調査と地形実測が指摘されている。昭和62年に刊行された『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』では、仙ノ山から石銀山にかけて広い範囲に郭が分布していることが報告され、「仙ノ山城郭群」とされている。

平成26年度に実施した仙ノ山山頂～北麓の分布調査では、かつての分布調査の成果と同じく、仙ノ山の尾根上から東側斜面にかけて人為的に形成された平坦面が多く残っている様子が確認できた。また、仙ノ山北側の平坦面では、中国産の青花・白磁などの貿易陶磁器類や、唐津焼など16世紀第4四半期から17世紀初頭に比定できる資料が多く採集された。加えて、江戸時代半ば以降の資料がほとんど採集されなかった。そのため、仙ノ山の東側に所在する石銀地区と同様に、石見銀山の中でも早い段階に利用が始まり、短期間で放棄された可能性を想定した。これらの成果をもとに、石見銀山でも調査課題となっている16世紀における活動痕跡を明らかにすること、石見銀山遺跡地内において、当地の「支配」に関連する遺構の

確認を目的として、平成30年度より発掘調査に着手した。

第3節 調査の概要 (Fig. 3・4)

仙ノ山山頂上から約280 m北側の平坦面をA区、仙ノ山山頂から約100 m北の平坦面をB区、仙ノ山山頂から約60 m北側にある段状の部分をC区、山頂部をD区として、発掘調査を実施した。平成30年度には、A区の平坦面における遺構の広がりを確認することを目的として、第1トレンチと第4トレンチを設定した。また、B区には仙ノ山山頂北側における遺構の有無の確認と、地形改変の様相確認を目的として、平坦面の東西に第2・3トレンチを設定した。

令和元年度は、A区では西端部に所在する、2段の平坦面での遺構検出および地形の構築状況の確認を目的として第5トレンチを設定した。B区には、地形の構築状況の確認を目的として第6～9トレンチを設定した。D区には、遺構の有無を確認することを目的として、頂上を示す三等三角点を中心に、第10～12トレンチを設定した。

第4節 A区の調査成果

第1項 第1トレンチ (Fig. 5)

第1トレンチは、仙ノ山山頂から約280 m北に位置し、石銀藤田から続く平坦地群の西端付近にあたる。調査対象地の東西には、岩盤が露出した小丘陵があり、トレンチはその小丘陵に一部掛かるよう東西方向に幅約1.5 m、長さ約22 mの規模で設定した。当初、トレンチの幅は2 mの計画であったが、樹木の繁茂により、計画どおりの幅が確保できなかったため、幅を1.5 mに縮小して調査を行った。調査の前段階で、東側の小丘陵には、少なくとも2段の平坦面が確認されていたので、設定に当たっては、平坦面の下段にもトレンチが及ぶよう配慮して設定を行った。基本層位は、表土である第1層以下、第3層の褐色土まで

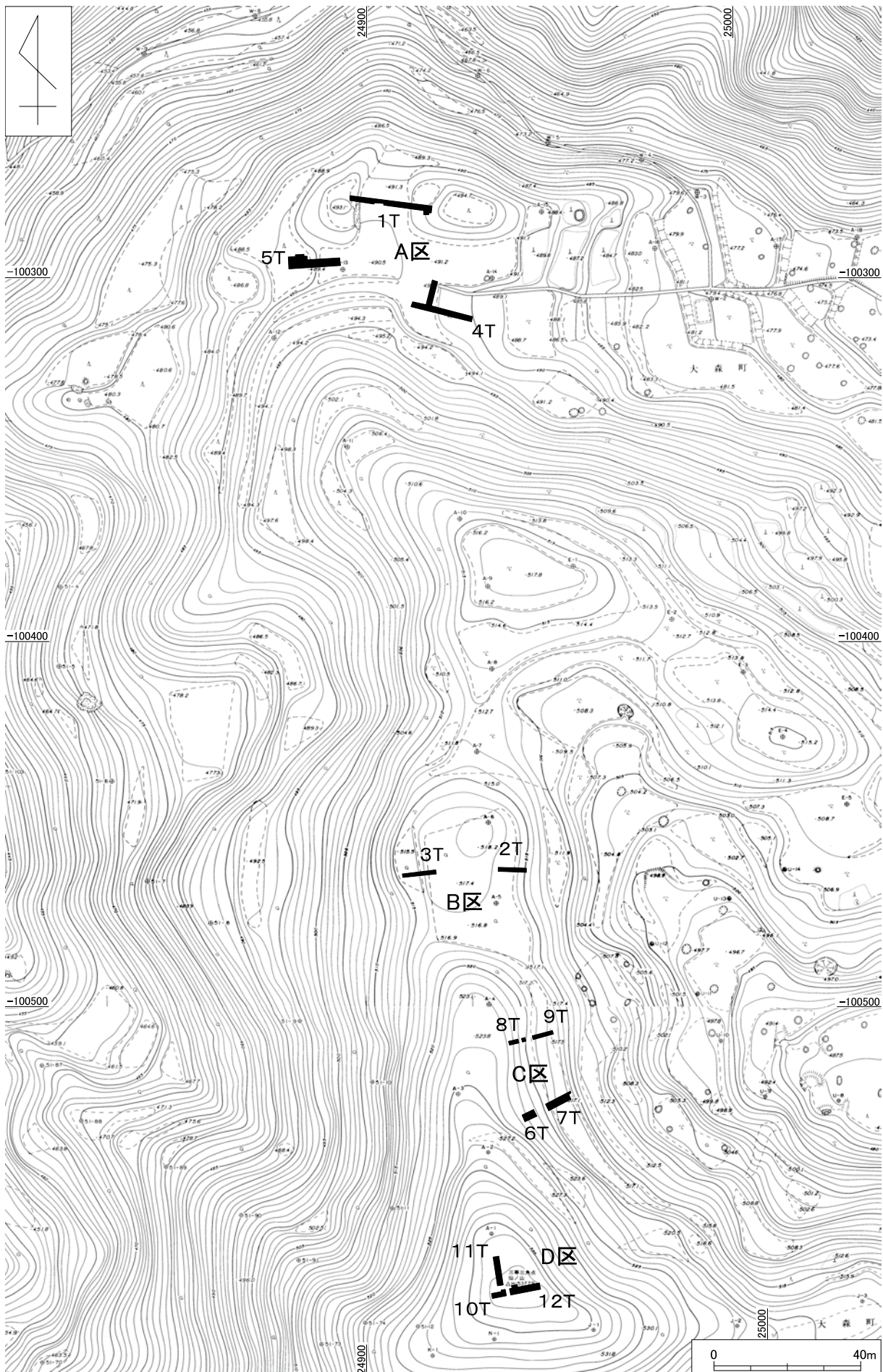


Fig. 3 仙ノ山地区調査地点位置図 (S = 1 / 1,500)

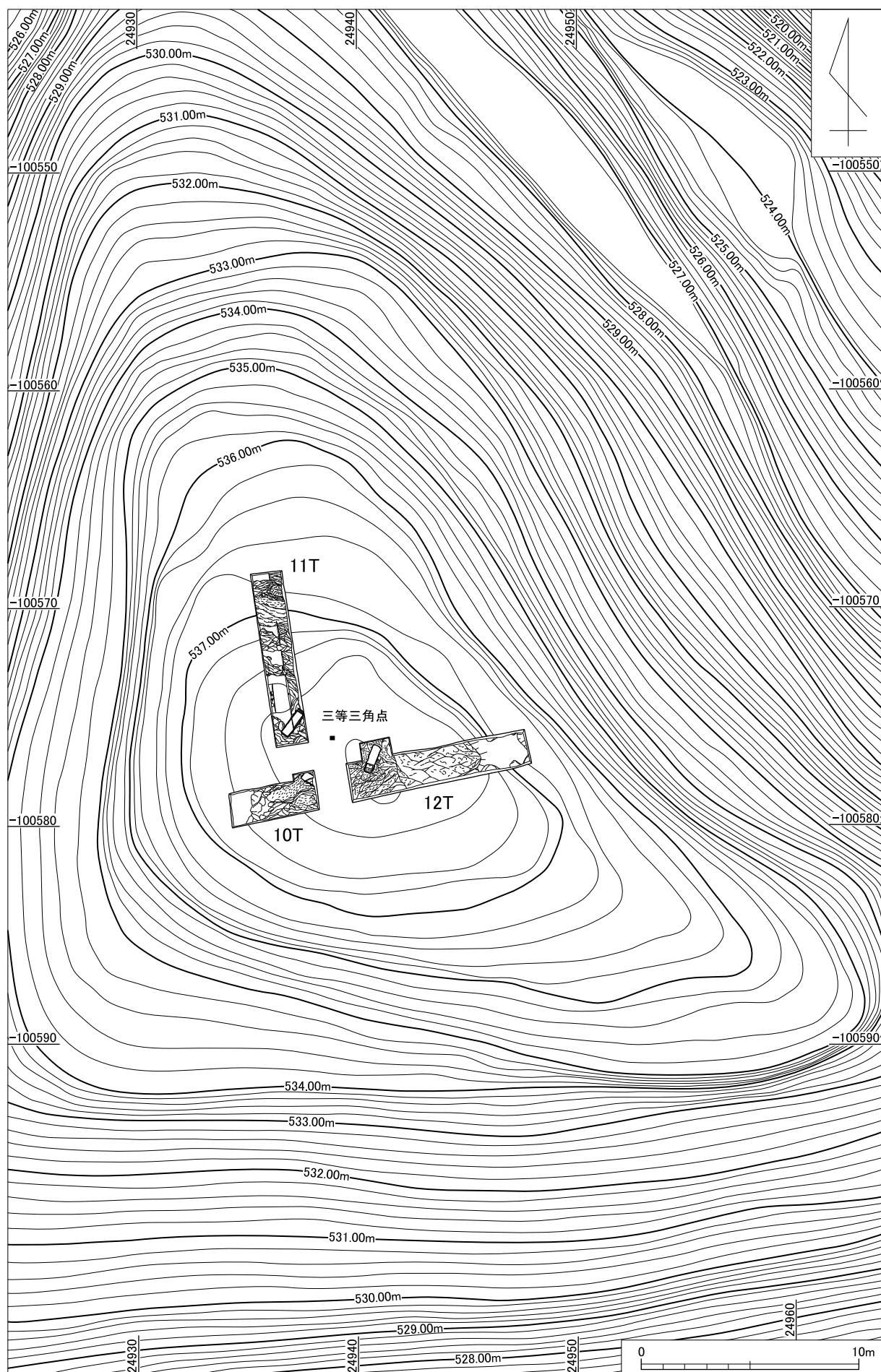


Fig. 4 仙ノ山地区頂上部地形測量図 (S = 1 / 250)

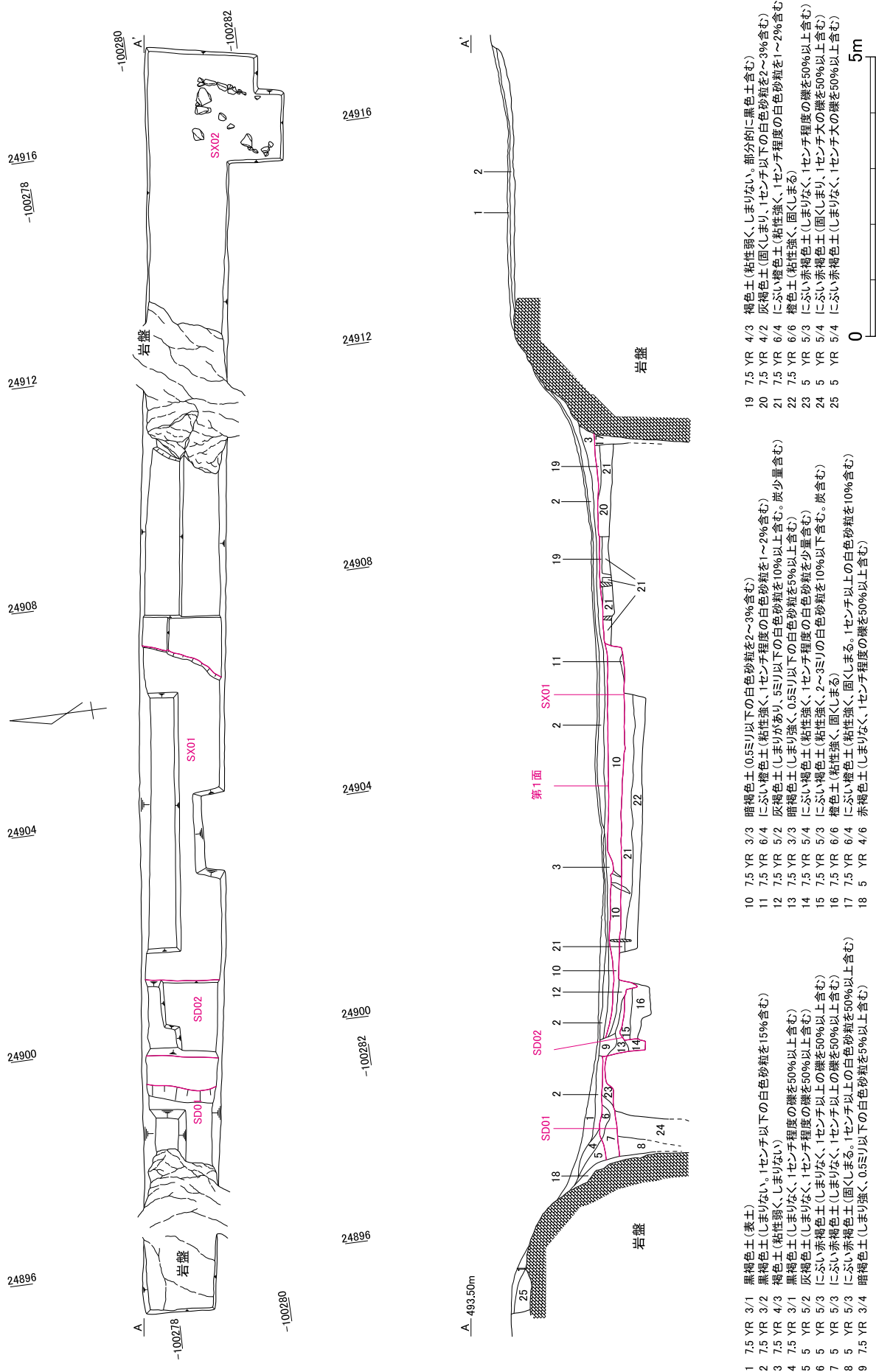


Fig. 5 仙ノ山地区第1トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 100)

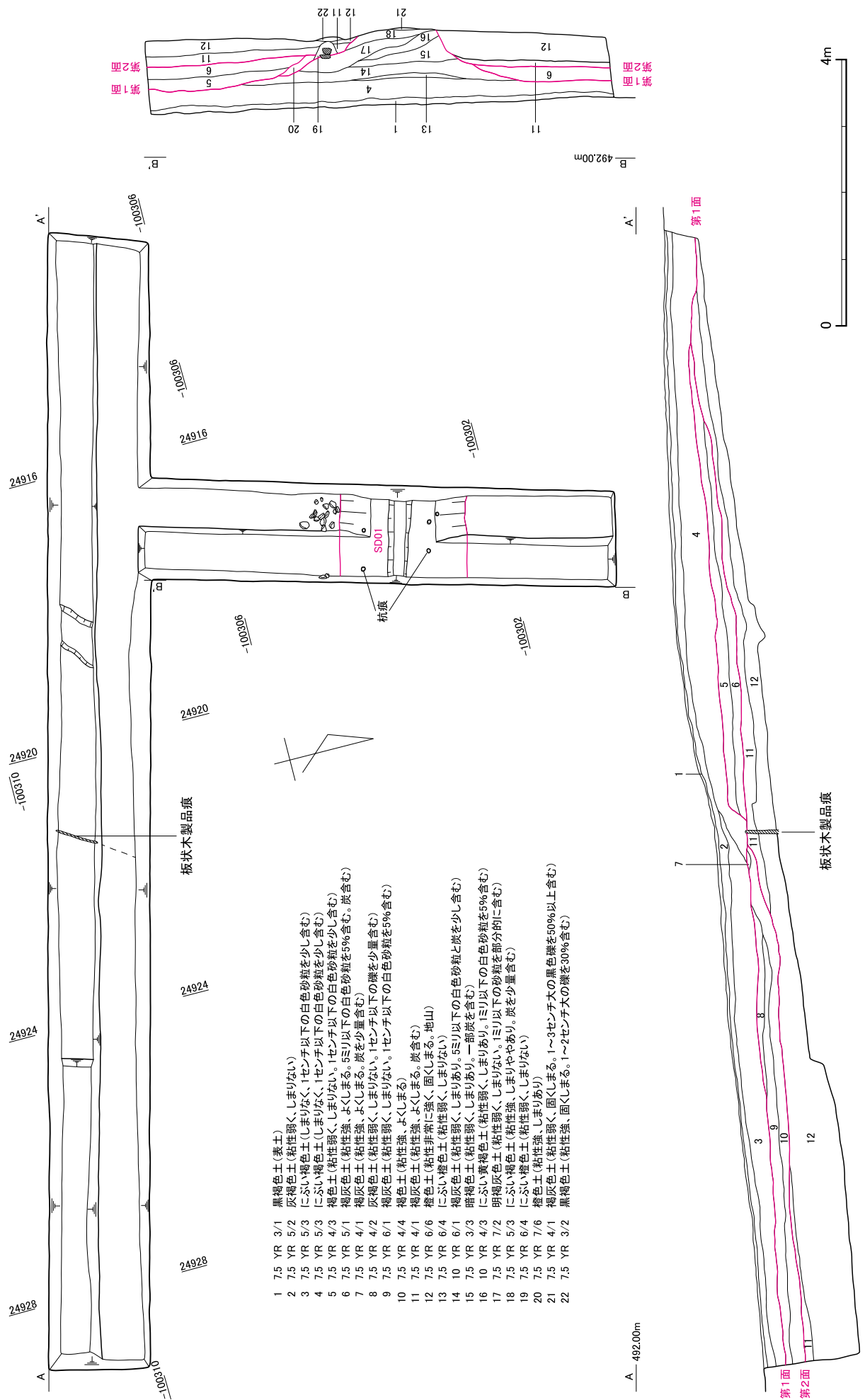


Fig. 6 仙ノ山地区第4トレンチ平面図・土層断面図 (S=1 / 80)

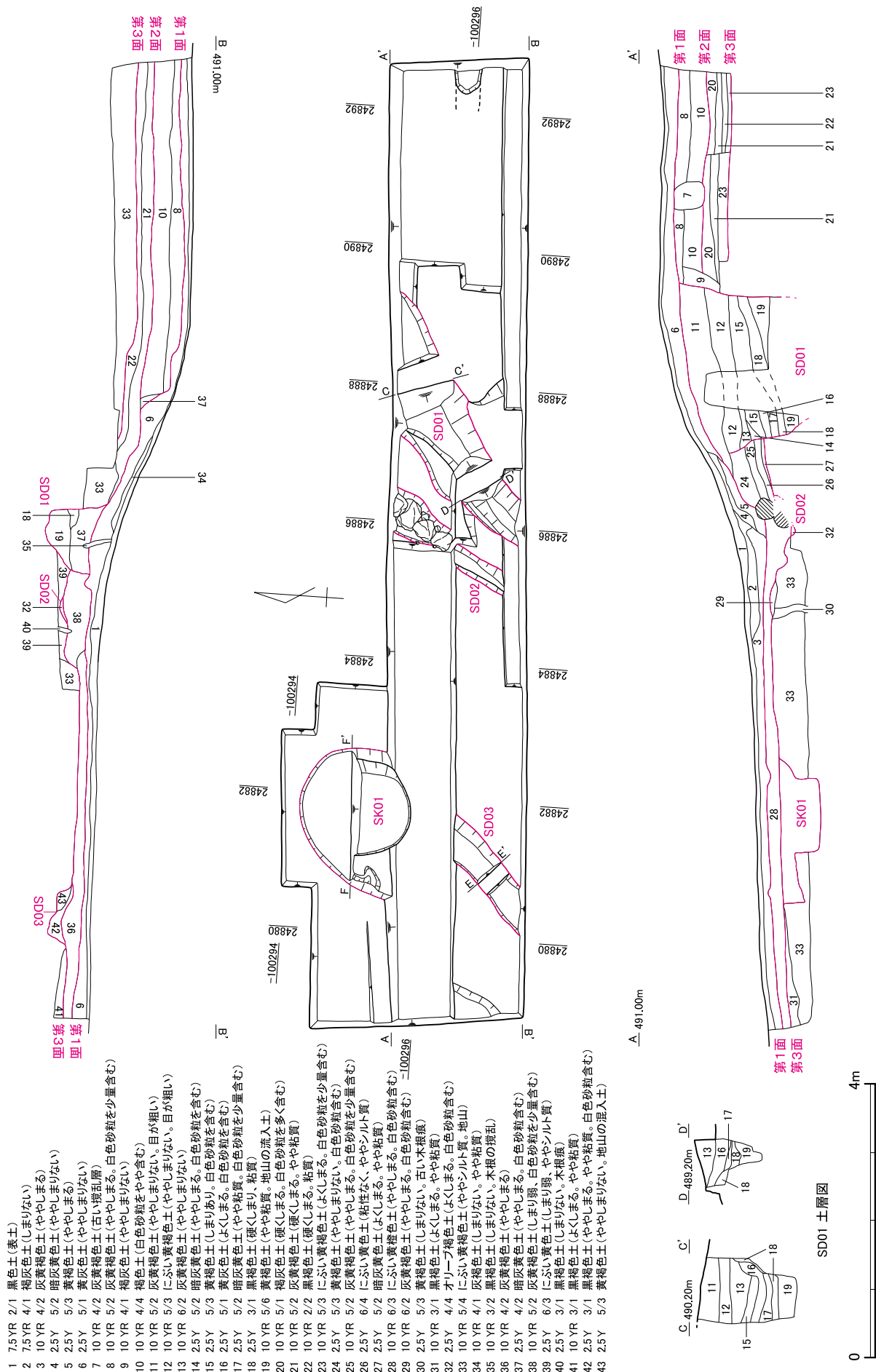


Fig. 7 仙ノ山地区第5トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)

が堆積土で、第3層下で検出したにぶい橙褐色土(第21層)が地山である。第3層までの深さは約20cmで、地山の面上が遺構面となる。調査の結果、大型遺構(SX 01)、溝状遺構(SD 01・SD 02)、基壇状遺構(SX 02)、岩盤加工遺構を検出した。

【SX 01】

トレンチ西側で検出した遺構で、大型の遺構である。規模は、トレンチ北端で東西約8m、南端で約7.5mあり、深さも約40cmと大型の遺構であるため、全体の平面形は不明である。埋土は暗褐色土(第10層)のほぼ単一層であるが、東側の底面では、薄くにぶい橙色土(第11層)が堆積する部分もある。東側の壁面はほぼ南北方向に延びるのに対し、東側の壁面は北東方向から南西方向に延びており、両者に規則性は見られない。また、SX 01の西端には、西壁に平行する浅い溝状遺構(SD 02)が掘り込まれており、SX 01に関連する遺構と考えられる。遺構の全容が把握できず、遺構の性格については不明である。出土遺物は、底面付近から出土した青花皿(20)など、少量が出土している。

遺構の時期については、出土遺物は少ないものの、いずれも17世紀初頭段階のものであることから、17世紀初頭の遺構と考えられる。

【SD 01】

トレンチ西側の岩盤に沿うように検出した溝状遺構で、南北方向に延びる。規模は、幅約1.5m、深さ約60cmで、底面からさらに岩盤に沿って深い掘り込みが確認された。岩盤に沿って構築されていることから岩盤に伴う遺構の可能性が考えられるが、検出面積が少なく性格については、明確にはできない。遺構内から遺物は出土していない。

【SD 02】

SX 01の西端でSX 01の西壁に沿って検出した溝状遺構である。幅は約1.3m、深さは約15cmと浅い遺構であるが、西壁に沿って底面から深さ約40cm、幅20cm程掘り込んでいる。SX 01に伴う可能性が高いが、性格等は不明である。遺物は出土していない。

【SX 02】

トレンチの東端で検出した「L」字型に屈曲した石列である。石列は、北面と東面に面を有しており、本来は、西側と南側にも石列を配した基壇状の遺構であった可能性が高い。規模は、東側の石列が南北0.9m、北側の石列が東西1.1mで、岩盤の方向とほぼ平行に構築されている。また、やや小型ではあるが、北側の石列とほぼ平行の石が1.5m程南側に2石並んで検出されており、これが南側の石列の一部と考えれば、一辺1.5m程度の方形基壇であったと推定することも可能である。

また、内部と考えられる位置からは土坑などは検出されなかった。出土遺物は、石列直近から肥前陶器(17～19)が出土している。

墓壇と考えられる土坑が検出されていないことから、埋葬墓に伴う基壇ではなく、所謂「参り墓」と呼ばれる供養墓に伴う基壇の可能性が高い。

遺構の時期は出土した肥前陶器などから17世紀初頭と考えられる。

【岩盤加工遺構】

トレンチの東西には岩盤の露出した小丘陵が存在する。露出した岩盤には、加工した痕跡が見て取れるが、風化のため工具痕は明瞭ではない。岩盤に接した地山には、幅は狭いが深掘りがなされており、岩盤を垂直方向に削り取っている状況が

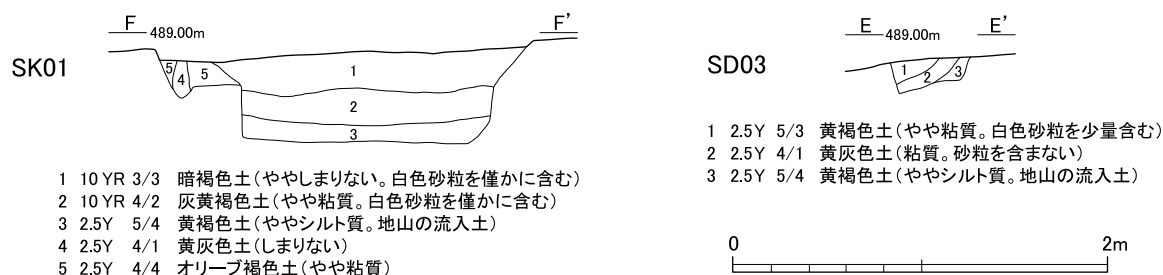
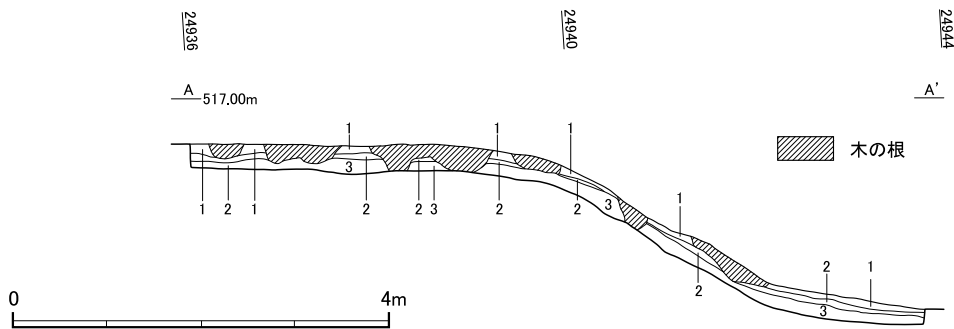
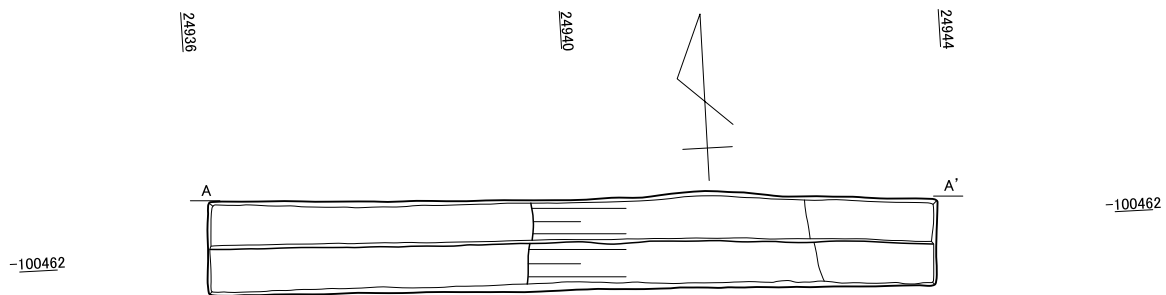
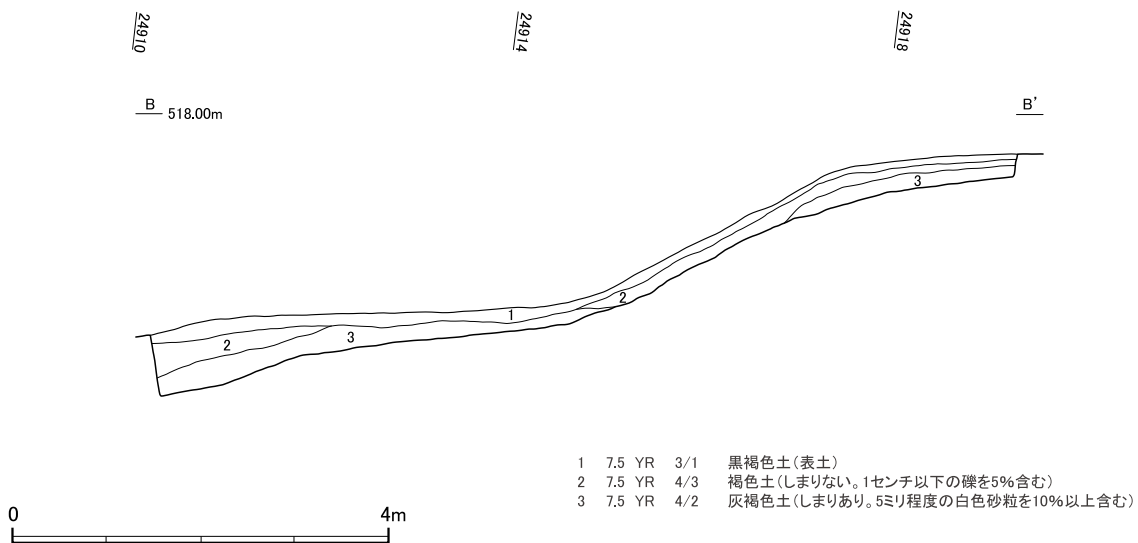
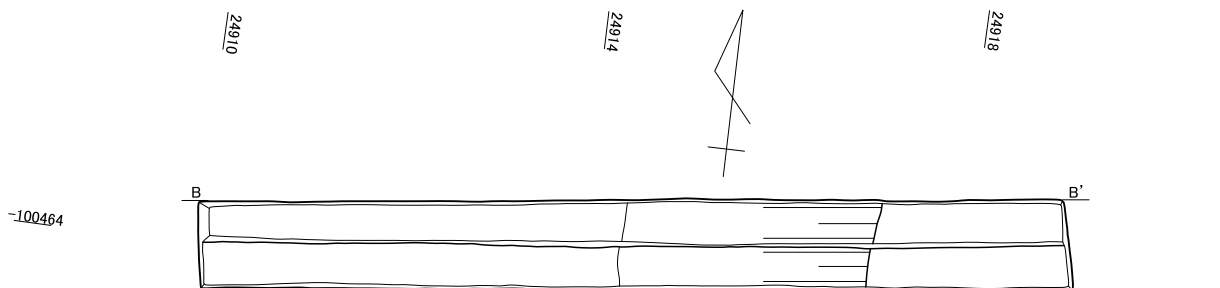


Fig. 8 仙ノ山地区第5トレンチSK 01・SD 03土層断面(S = 1 / 40)



第2トレンチ 平面・断面実測図 (S=1:80)



第3トレンチ 平面・断面実測図 (S=1:80)

Fig. 9 仙ノ山地区第2・3トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)

うかがえる。岩盤を加工した目的や、性格については、検出した部分が限定的であり、明確にすることは難しい。岩盤に伴う遺物は出土していない。

トレンチ内で出土した遺物は多くは無いが、17世紀初頭の時期でまとまっており、遺物の出土しなかった遺構も含めて、17世紀初頭段階の遺構群と考えることができる。また、トレンチ東側で検出したS X 02(基壇状遺構)は、墓石等は確認できなかったものの、供養墓と考えられる。周囲の平坦面上には、同様の基壇が他にも存在する可能性があり、平坦地を墓地として利用していたことが推定される。

第2項 第4トレンチ (Fig. 6)

第4トレンチは、第1トレンチの南東約25mに位置する。設定した当初は、東西方向に幅約1.5m、長さ約17mの規模であったが、第4トレンチの北側における遺構の有無及び土層の堆積状況を確認するため、トレンチ西端部から約4mの位置から北方向へ幅約1.5m、長さ約7m拡張した。基本層序は、表土及び第2層までは約20cmで、第3層及び第4層下面が第1面である。第1面には東西トレンチの中央部において、段状に整地された箇所があるほか、南北トレンチ中央部で溝状遺構S D 01が検出された。また、東西トレンチ中央部には、第1面から板状の木製品が刺さっていた痕跡が確認できており、土留めなどの用途・役割が想定される。第1面の下には5・6層、8～10層がそれぞれ25cm程度堆積しており、その下の11層上面が第2面である。第2面からは明確な遺構が検出されなかった。第2面より下は第12層となり地山である。

出土遺物としては、青花(23～32)、白磁(33)、肥前磁器(34～36、47)、肥前陶器(37～46)、瀬戸・美濃焼(48・49)、備前焼(50)が出土している。貿易陶磁器類に加え、肥前陶器でも胎土目のあるものが含まれているなど、16世紀末から17世紀初めころの資料がよくまとまっている。これらのほとんどは第3層から出土しており、生活面の時期を反映すると判断できる。

【S D 01】

第4トレンチを南北方向に拡張した部分の中央で検出された、東西方向にのびる溝状遺構である。遺構の規模は、幅約2m、深さ72cmである。底部には杭の痕跡が5か所に残っていた。南部には幅約50cm、深さ約50cmの掘り込みがあり、その埋土には礫が含まれていた。平坦面のほぼ中央を東西に流れる大きな溝で、集落の排水などの機能が考えられるが、明確にはできなかった。

第3項 第5トレンチ (Fig. 7・8)

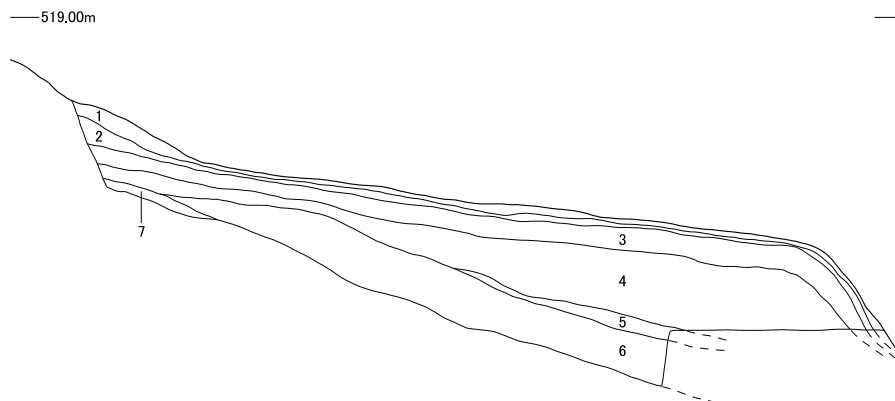
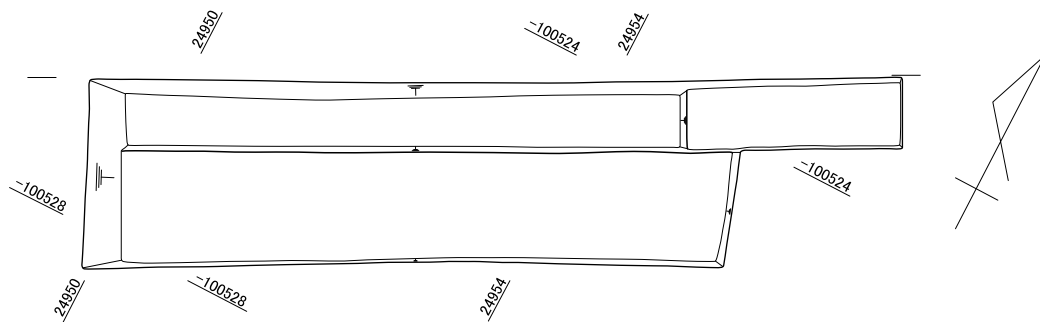
第5トレンチは、第4トレンチの西約30mに位置し、東西方向に設定した。調査地には、標高約490.7mと、標高約489.2mの2段の平坦面があり、両段に渡るようにトレンチ設定した。規模は幅2m、長さ約17mで、調査中北側に一部拡張した。

調査により、表土下20～30cmで、黄褐色～黄橙色土の第1面が検出された。精査の結果、下段では遺構は検出されなかったが、上段から法面にかけて、上面幅約1.2mの溝状遺構(S D 01)を検出した。

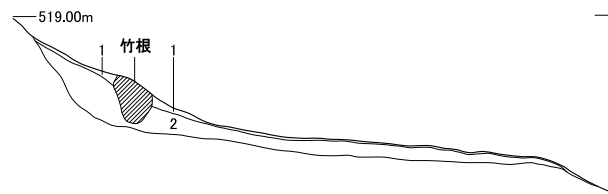
上段では、第1面下約30cmで褐灰色土の第2面を検出したが、下段では対応する面は検出されなかった。この第2面上では遺構は検出されなかった。第2面下約40cmでにぶい黄褐色土の地山面となり、この面上が第3面となる。下段でも、第1面下約15～20cmで第3面となる地山面に達した。上段では明確な遺構は検出されなかったが、下段では、土坑(S K 01)、溝状遺構(S D 02・S D 03)を検出した。

【S D 01】

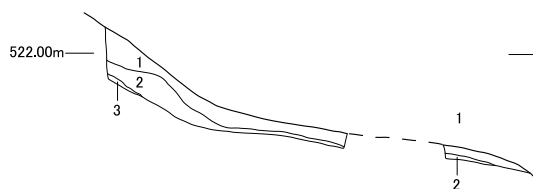
上段から法面にかけて検出した北東から南西方向に延びる溝で、上段の第1面から掘り込まれている。上面幅は最大で1.2m、底面幅は最小で10cm、深さは最深部で1.8m程で、底面は南西側が低くなっている。南北の壁は垂直に近く立ち上がり、南側の一部にテラス状となる緩斜面を有する。出土遺物で図示できるものは無いが、肥前陶器の細片が少量出土している。性格等は明らかにできない。



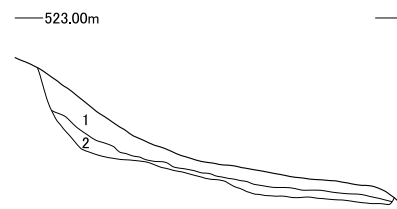
第7トレンチ 平面・土層断面実測図(S=1:80)



第9トレンチ 土層断面実測図(S=1:80)



第8トレンチ 断面実測図(S=1:80)



第6トレンチ 断面実測図(S=1:80)

- | | | | |
|---|-------|-----|------------------------------|
| 1 | 10 YR | 2/1 | 黒色土(表土) |
| 2 | 10 YR | 4/2 | 灰黄褐色土(しまりない。1~2ミリの白色砂粒を少量含む) |
| 3 | 2.5 Y | 4/1 | 黄褐色土(やや粘性) |
| 4 | 10 YR | 4/1 | 褐灰色土(しまり強い。1~2ミリの白色砂粒含む) |
| 5 | 10 YR | 3/1 | 黒褐色土(しまり強い。1~2ミリの白色砂粒を少量含む) |
| 6 | 10 YR | 3/2 | 黒褐色土(硬くしまり、粘性あり) |
| 7 | 10 YR | 5/6 | 黄褐色土(硬くしまり、粘性強い。地山) |

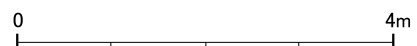


Fig.10 仙ノ山地区第6・7・8・9トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 80)

【S D 02】

下段の東端で検出した溝状遺構で、北東から南西方向に延びるが、S D 01 とは平行ではない。溝の北側には石列が残り、本来は南部にも石列が伸びていた可能性がある。規模は、現状で幅 30～60cm、深さは最大で 30cm である。石列は、トレンチ北面の土層観察から、上段盛土の土留めとして設置された可能性が高い。溝は、石列設置の為に掘られたものと推定される。遺構内から遺物は出土していない。

【S D 03】

下段の南東側で検出した溝状遺構で、北東から南西へと延びる。幅は約 45cm で、深さは 20cm 前後である。壁面は西側が垂直に近く立ち上がるのに対し、東側はなだらかに立ち上がる。遺物は出土していない。

【S K 01】

トレンチの北端で検出した土坑で、全容確認のため、調査区を北側に拡張した。西側では別遺構と重複するため平面形が乱れているが、概ね直径 1.8 m 程度の円形を呈すると考えられる。深さは、現状で 60cm 程度で、断面形は上部がすり鉢状に開き、下部は垂直に立ち上がる。垂直に立ち上がる部分は、直径約 1.4 m の円形を呈する。遺物は、上層から肥前陶器の皿 (52) が出土している。形態から、素掘りの遺構ではなく、本来は桶などが設置されていた可能性が考えられる。

以上の調査成果から、元々 60cm 程度の高低差のあった地形に S D 02 を掘り、石列を設置し、東側を盛土して、1.5 m 程の段差を有する 2 段の平坦地を造成したものと考えられる。調査範囲内では、礎石などの建物の痕跡は検出されておらず、建物に伴うような整地面も検出されていないことから、当地に建物等が建てられていた可能性は低いと考えられ、建物の密集する都市的空間は想定されない。

【表採資料】

1～15 は A 区で表採された資料で、青花や絵唐津など 16 世紀末～17 世紀初頭の資料がある。1 は漳州窯系の青花碗である。2・3 は肥前陶器

の皿で、2 は絵唐津である。4 は江戸時代後半ころに比定できる肥前磁器の碗で、他と比べて新しい。5 は備前のすり鉢である。6 は中国製の白磁皿である。7・8 は景德鎮系の青花の皿である。9 は肥前磁器の碗である。10 は肥前磁器の瓶で、畳付けに砂が付着している。11 は肥前陶器の碗である。12 は肥前磁器の瓶で、取手の痕跡が認められる。13 は瀬戸・美濃焼の輪花皿で、二次被熱を受けている。14 は漳州窯系の青花皿である。15 は肥前磁器の皿である。高台畳付け部のみを釉剥ぎしているが、砂目の痕跡は見られない。

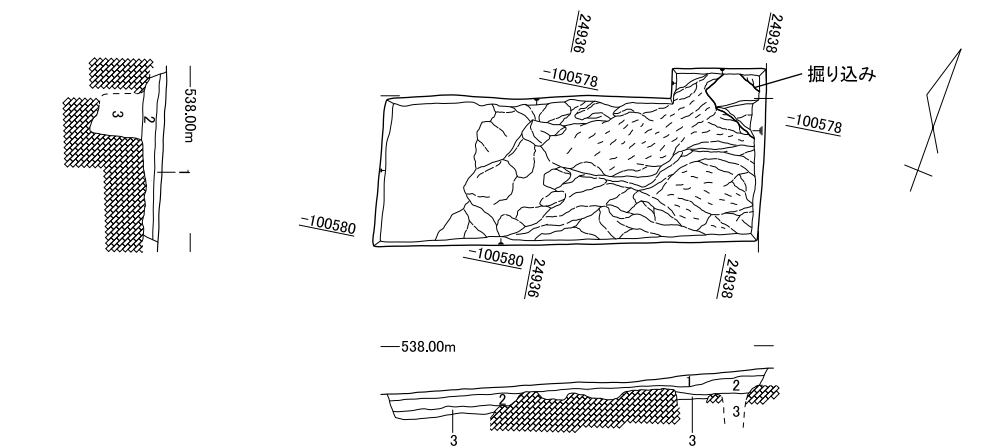
第 5 節 B 区の調査成果 (Fig. 9)

第 1 項 第 2 トレンチ

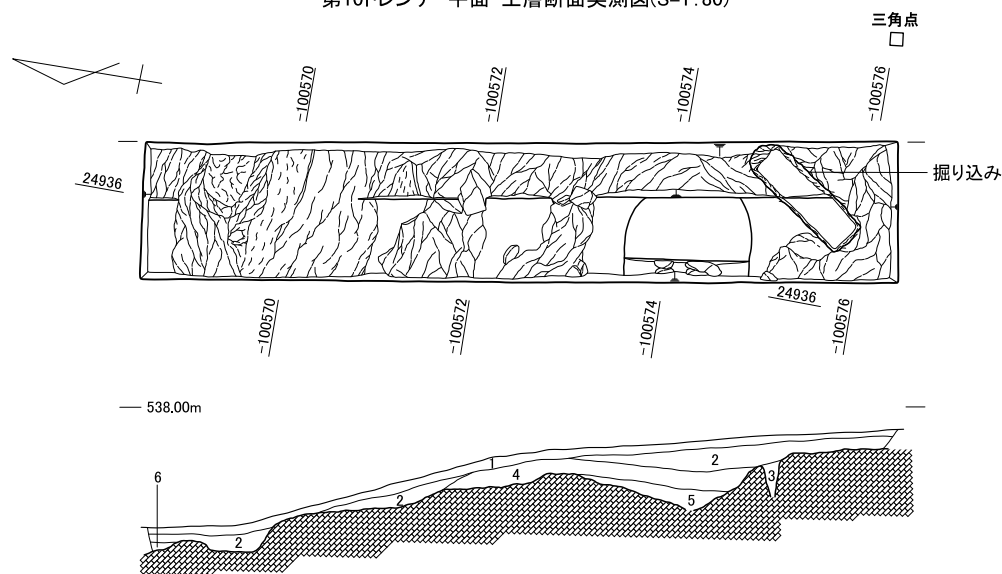
第 2 トレンチは、平坦面の斜面に人工的な加工がなされているかどうかを確認するために、調査対象地点の東側斜面に幅 1 m、長さ約 7.8 m で設定した。トレンチの掘下げにあたっては、層序を確認しながら表土から 1 層ずつ掘下げていった。埋土は竹根や木の根による攪乱が激しく、層序の確認が困難な部分も多かった。第 1 層と第 2 層の下から、灰褐色の第 3 層が検出された。この第 3 層の上面が検出された段階で、トレンチ北側を半截して下層を確認した。第 1 層は黒褐色の腐葉土で、厚さは約 4～10cm である。第 2 層は暗褐色の薄い層で、厚さは約 6 cm である。第 3 層は灰褐色の層である。第 3 層の上面はなだらかに傾斜しており、人為的な加工は認められるものの、強い段差を設けて下位の平坦面と明確に区画しようとする意図は認められない。また、地形改変を行っているのみで、柵などの遺構は検出されなかった。トレンチ内からは遺物が出土せず、周囲で青花 (景德鎮) 碗の破片が 1 点表採されたのみであった。

第 2 項 第 3 トレンチ

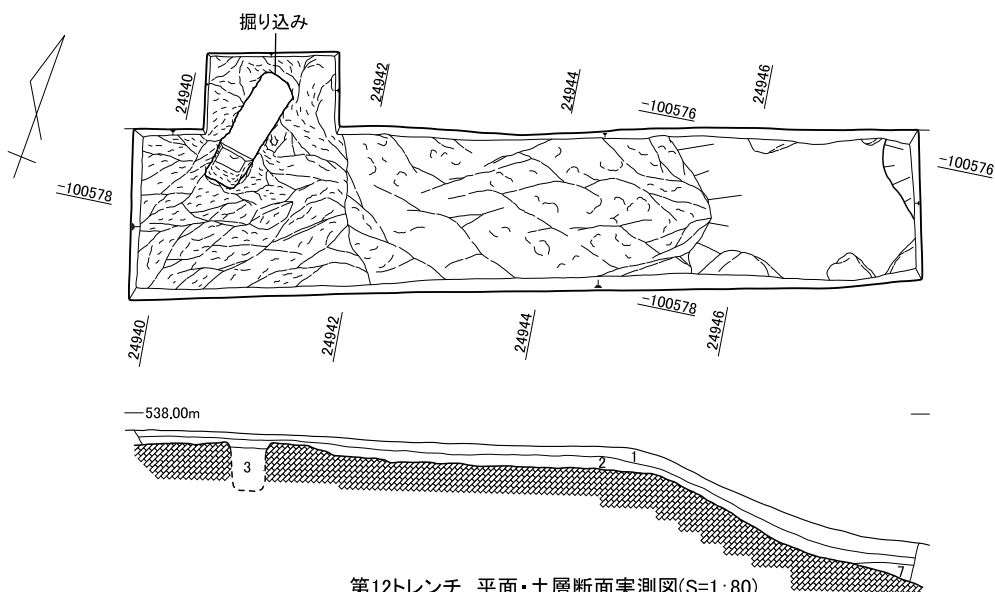
第 3 トレンチは、調査対象地点の西側斜面に幅約 1 m、長さ約 9.2 m で設定した。土層の堆積状態は第 2 トレンチと同様で、表土と第 2 層の下から、灰褐色の第 3 層が検出された。第 2 トレンチと同じく遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。第 3 層の上面はなだらかに傾斜して



第10トレンチ 平面・土層断面実測図(S=1:80)



第11トレンチ 平面・土層断面実測図(S=1:80)



第12トレンチ 平面・土層断面実測図(S=1:80)

- | | | | | |
|---|-----|----|-----|----------------------------------|
| 1 | 10 | YR | 3/1 | 黒褐色土(しまりない。表土) |
| 2 | 10 | YR | 4/1 | 褐灰色土(しまりない。1~2センチの礫を少量含む) |
| 3 | 2.5 | YR | 4/6 | 赤褐色土(しまりない。1~2センチの礫を50%以上含む) |
| 4 | 10 | YR | 5/6 | 黄褐色土(しまりない。1~2センチの礫を50%以上含む) |
| 5 | 7.5 | YR | 6/6 | 橙土(粘性強、硬くしまる。5ミリ以下の白色砂粒を少量含む) |
| 6 | 2.5 | Y | 6/6 | 明黄褐色土(しまりない。5センチ以下の礫50%以上含む) |
| 7 | 2.5 | Y | 5/1 | 黄灰色土(粘性弱、しまりあり。1センチ以下の白色砂粒を少量含む) |

0 4m

Fig.11 仙ノ山地区第10・11・12トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)

いるが、第2トレンチよりも傾斜はやや強い。特に、東端部から2～4.7 mの範囲では、地形を強めに加工している。出土遺物としては、表土から肥前磁器(22)が1点のみ出土している。

第6節 C区の調査成果 (Fig.10)

第1項 第6トレンチ

第6・7トレンチはC区南部に設定した。第6トレンチは上段に、第7トレンチは下段にそれぞれ設定した。第6トレンチは、幅約2 m、長さ約3.8 mで設定した。表土である黒色の腐葉土を除去すると、斜面側からの流土と考えられる灰黄褐色土(第2層)である。特に西側(斜面側)で、第2層がやや厚く堆積している様子が確認された。

第2項 第7トレンチ

第7トレンチは、幅約2 m、長さ約8.5 mである。表土(第1層)と流土(第2層)の下位から、造成土とみられる第3層以下の堆積層と、地山(第7層)が確認された。地山である第7層の上面は、谷に向かってなだらかに下がっており、その上を造成して平坦地としている。造成土の厚さは、山側では約30cm、谷側では1.7 m以上である。仙ノ山の東側に点在する他の平坦面も、同様に形成されている可能性があり、大規模な地形改変が行われていたことが想像される。

第3項 第8・9トレンチ

第8・9トレンチは、C区の北部に設定した。第8トレンチは上段に、第9トレンチは下段に設定した。第8トレンチは、幅約1 m、長さ約4.5

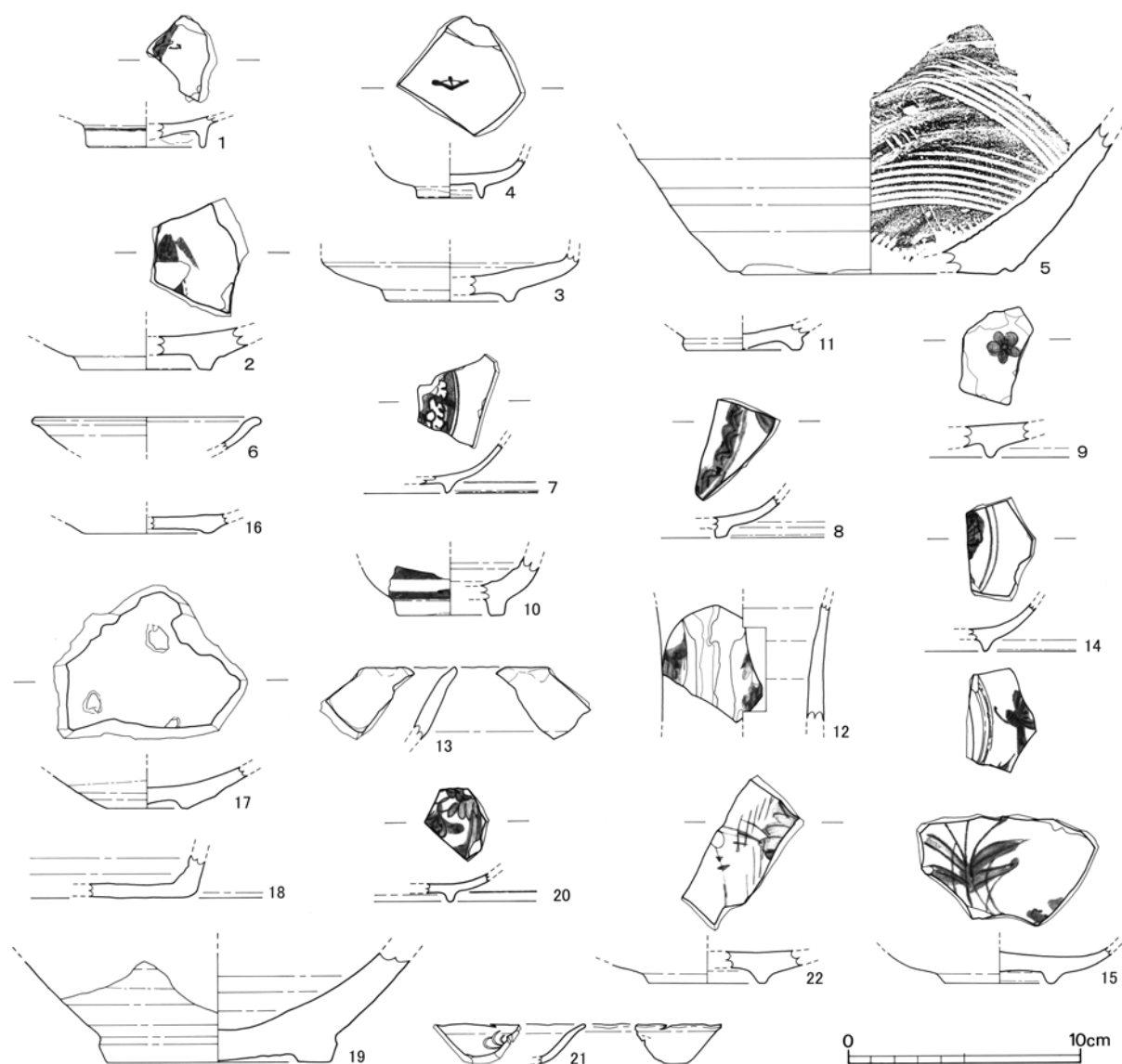


Fig.12 仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅰ (S=1/3)

mである。ただし、竹根によって激しくかく乱されている部分があったため、掘り下げていない箇所がある。表土である黒褐色土(第1層)を10～30cmほど掘り下げると、2～5mmの白色砂粒を10%程度含む灰黄褐色土(第2層)が表れる。また、西側(斜面側)の端から約30cmにわたって、やや粘質の黄褐色土(第3層)が堆積している。

第9トレンチは幅約1m、長さ約5.9mである。第1層を10～30cmほど掘り下げると、2～5

mmの白色砂粒を10%程度含む灰黄褐色土(第2層)が表れる。第2層は全体に10～20cmほど堆積している。

第7節 D区の調査成果 (Fig.11)

第1項 第10トレンチ

第10トレンチは、仙ノ山山頂の中央部から西に向かって南北約4m、東西約1.5mで設定した。調査によってトレンチ南西端部で岩盤への掘

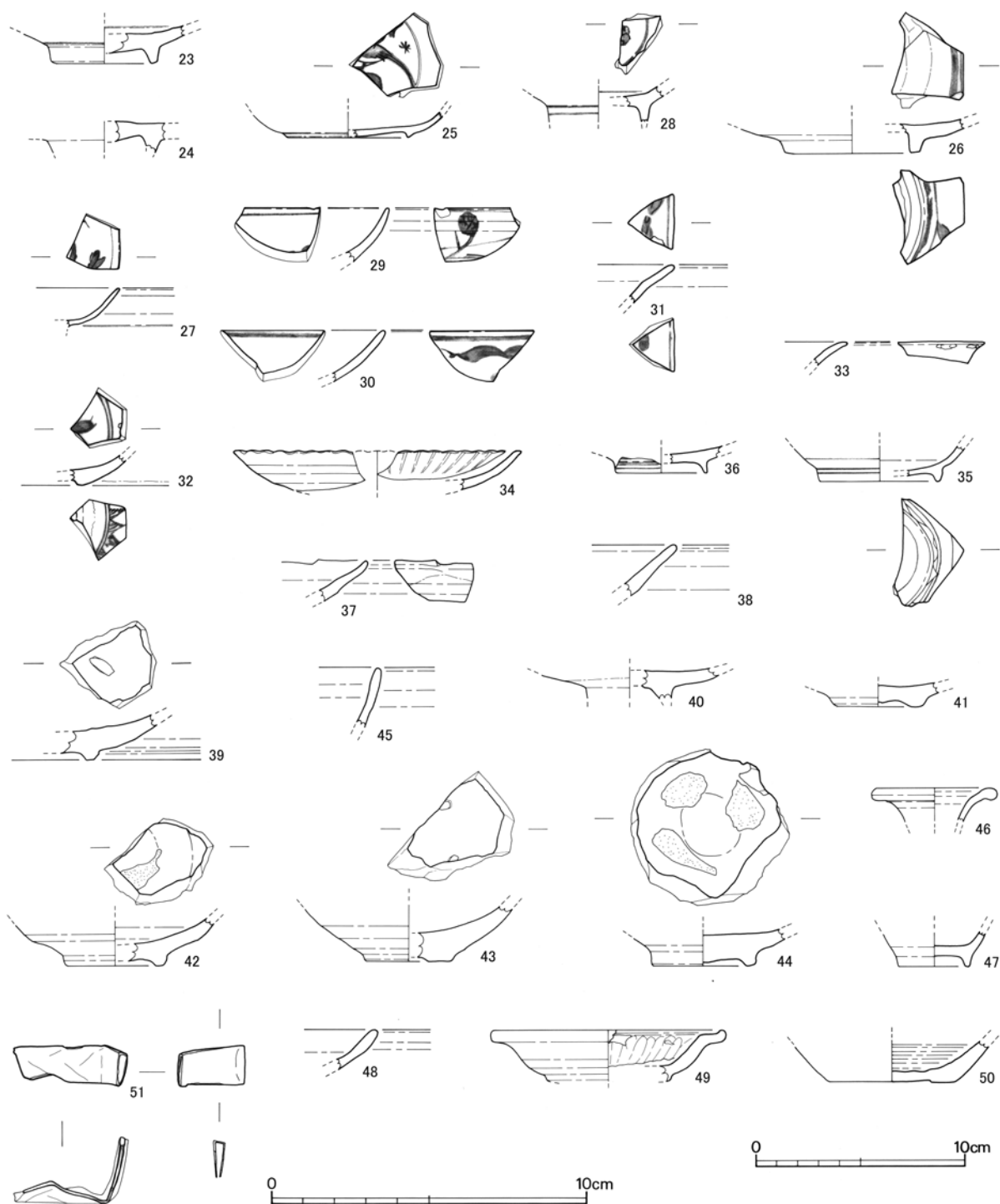


Fig.13 仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/2、1/3)

り込みが検出されたため、南壁から約1 mまでを約30 cm西側に拡張した。トレンチのほぼ全面で、地表面から約25 cmの深さで岩盤が検出された。岩盤には、トレンチ南西隅の掘り込み以外に人為的な加工は認められなかった。トレンチ南西端部で確認された掘り込みは、全体を検出していないが、東西が約40 cm、南北72 cm以上、岩盤の表面からの深さは約75 cmで、後述する11・12 トレンチで検出された同様の掘り込みと同等の規模になると見込まれる。壁面はほんのわずかに内側への傾斜が認められるものの、ほぼ垂直である。同様の掘り込みが、仙ノ山山頂部に置かれた三等三角点の周囲に掘り込まれている。検出された掘り込みは3 か所だが、本来は4 か所にあったと推定される。明治28(1895)年に仙ノ山に三等三角点がおかれた際に、高さ3.213 mの櫓を立てたこ

とが当時の資料から判明しており、その際柱を立てるために掘り込まれた穴の可能性が高い。

第2項 第11 トレンチ

第11 トレンチは、仙ノ山山頂の中央部から北に向かって、東西約8 m、南北約1.5 mで設定した。場所によってやや異なるが、地表面から約20 ~ 40 cm掘り下げた箇所では岩盤にあたっている。南端部付近にも一部がやや深い箇所があったものの、人為的なものかは明確にできなかった。南端部に、長辺約1.4 m、短辺約40 cmの長方形に岩盤を削り抜いている。掘り込みの深さは約40 cmである。本トレンチの西南部には径約1.32 m、深さ23 cmの範囲に炭化物が集積している箇所があるが、周囲に比熱痕はなく、詳細は不明である。

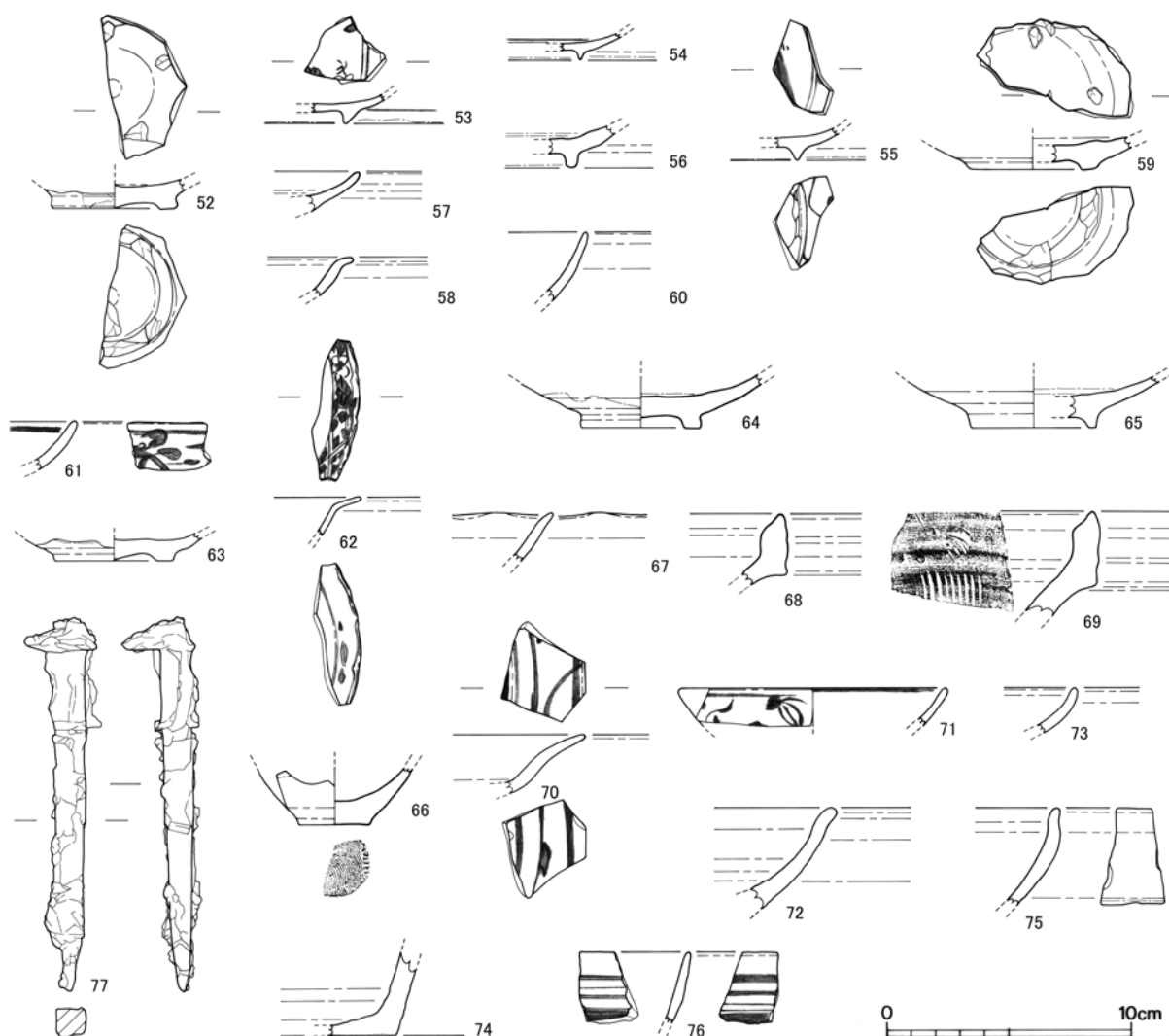


Fig.14 仙ノ山地区出土遺物実測図Ⅲ (S = 1 / 3)

第3項 第12トレンチ

第12トレンチは、仙ノ山山頂の中央部から東に向かって、東西約8.3 m、南北約1.5 mで設定した。第10トレンチと同様に、調査によってトレンチ北西端部で岩盤への掘り込みが検出されたため、北壁から75cmから2.2 mまでの範囲を、約80cm西側に拡張した。トレンチを設定した箇所は、西から東に向かって低くなっている。地表面での標高は、西端部で537.8 m、東端部

で536.6 mである。表土下約16～40cm掘り下げたところで岩盤が検出された。岩盤の表面は、西半分は比較的なだらかだが、西端部から東に約5.6 mのあたりで傾斜が急になっている。ただし、人為的に地形を変えている様相は確認できず、自然地形である。北西隅で検出された掘り込みは、南北約1.3 m、東西約40cmと、10・11トレンチで検出されているものとはほぼ同規模である。この掘り込み以外に遺構は検出されなかった。

Tab. 2 仙ノ山地区出土遺物一覧表 I

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
1	表採	青花	碗		(1.3)	(4.9)	透明釉		
2	表採	肥前陶器	皿		(1.8)	(5.6)	(内) 透明釉	鉄絵	
3	表採	肥前陶器	皿		(2.1)	(5.2)	長石釉		
4	表採	肥前磁器	碗		(1.7)	(2.6)	透明釉		
5	表採	備前	すり鉢		(6.5)	(10.9)	灰黄褐色		
6	表採	白磁	皿	(9.5)	(1.4)		白磁釉		中国
7	表採	青花	皿		(2.2)		透明釉		
8	表採	青花	皿		(1.8)		透明釉		
9	表採	肥前磁器	皿		(1.5)		透明釉		
10	表採	肥前磁器	瓶		(2.6)	(4.6)	(外) 透明釉		
11	表採	肥前陶器	皿		(1.1)	(4.9)	灰釉		
12	表採	肥前磁器	瓶		(5.1)		(外) 透明釉		
13	表採	瀬戸・美濃	輪花皿		(3.1)		灰釉		被熱
14	表採	青花	皿		(2.0)		透明釉		
15	表採	肥前磁器	皿		(1.6)	(4.7)	透明釉		
16	1 T 表土	瀬戸・美濃	皿		(0.9)	(5.3)	灰釉	内禿	
17	1 T S X 02	肥前陶器	皿		(1.8)	3.5	灰釉	胎土目	
18	1 T S X 02	肥前陶器	瓶		(1.9)		褐釉		
19	1 T S X 02	肥前陶器	鉢		(4.7)	(9.6)	灰釉		
20	1 T S X 01 埋土	青花	皿		(1.2)		透明釉	砂高台	
21	1 T 遺構面上	青花	皿		(1.7)		透明釉	暗文 稜花	
22	3 T 表土	肥前磁器	皿		(1.4)	(5.0)	透明釉		
23	4 T 表土	青花	皿		(1.8)	(4.5)	透明釉		
24	4 T 2 層	青花	皿		(1.5)		透明釉	蛇の目釉剥ぎ	
25	4 T 3 層	青花	皿		(1.3)	(5.7)	透明釉		
26	4 T 3 層	青花	皿		(1.6)	(6.4)	透明釉	蛇の目釉剥ぎ	
27	4 T 3 層	青花	皿		(1.8)		透明釉		
28	4 T 3 層	青花	碗		(1.8)		透明釉		
29	4 T 3 層	青花	皿		(2.6)		透明釉		
30	4 T 3 層	青花	皿		(2.4)		透明釉		
31	4 T 5 層上面	青花	皿		(1.7)		透明釉		
32	4 T 3 層	青花	皿		(1.5)		透明釉	碁笥底	
33	4 T 3 層	白磁	皿		(1.1)		白磁釉		中国
34	4 T 3 層	肥前磁器	皿		(13.4)		透明釉	菊花皿	

Tab. 3 仙ノ山地区出土遺物一覧表Ⅱ

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
35	4 T 3 層	肥前磁器	皿		(1.7)	(5.8)	透明釉		
36	4 T 2 層	肥前磁器	碗		(1.3)	(4.4)	透明釉		
37	4 T 3 層	肥前陶器	皿		(2.0)		灰釉		
38	4 T 3 層	肥前陶器	皿		(2.4)		灰釉		
39	4 T 2 層	肥前陶器	皿		(2.2)		灰釉	胎土目	
40	4 T 3 層	肥前陶器	皿		(1.5)		灰釉		
41	4 T 3 層	肥前陶器	皿		(1.1)	(4.0)	透明釉		
42	4 T 3 層	肥前陶器	皿		(2.3)	(4.5)	灰釉	砂目	
43	4 T 表土	肥前陶器	皿		(2.7)	(4.0)	灰釉	胎土目	
44	4 T 5 層褐色土	肥前陶器	皿		(1.8)	5.0	長石釉	砂目	
45	4 T 3 層	肥前陶器	碗		(2.8)		透明釉	呉器手碗	
46	4 T 3 層	肥前陶器	瓶	(5.6)	(1.6)		褐釉		
47	4 T 3 層	肥前磁器	瓶		(1.7)	(3.4)	透明釉		
48	4 T 5 層褐色土	瀬戸・美濃	皿		(1.9)		灰釉		
49	4 T 4 層	瀬戸・美濃	折縁削皿	(10.9)	(2.5)		灰釉		
50	4 T 4 層	備前?	瓶		(2.0)	(6.0)	灰赤色		
51	4 T 3 層	金属製品	小柄	現存長 2.2	現存幅 1.3	現存厚 0.7			4.7g
52	5 T S K 01	肥前陶器	皿		(1.2)	(5.0)	灰釉	胎土目	
53	5 T 3 層	青花	皿		(1.2)		透明釉		
54	5 T 上段 3 層	青花	皿		(1.1)		透明釉		
55	5 T 3 層	青花	皿		(1.3)		透明釉		
56	5 T 3 層	白磁	皿		(1.8)		白磁釉	蛇の目釉剥ぎ	中国
57	5 T 上段 3 層	肥前磁器	皿		(1.6)		長石釉		
58	5 T 上段 3 層	肥前陶器	皿		(1.6)		灰釉		
59	5 T 付近表採 5 T 3 層上面	肥前陶器	皿		(1.4)	(5.0)	灰釉	胎土目	
60	5 T 3 層上面 5 T 3 層	青磁	碗		(2.8)		青磁釉		
61	5 T 上段 4 層	青花	皿		(2.0)		透明釉		
62	5 T 上段 4 層	青花	皿		(1.6)		透明釉	輪花	
63	5 T 上段 4 層	肥前陶器	皿		(1.1)	(4.8)	灰釉		
64	5 T 上段 3 層	肥前陶器	皿		(2.2)	(4.9)	(内) 銅緑釉 (外) 灰釉	蛇の目釉剥ぎ	
65	5 T 下段拡張区上層	肥前陶器	皿		(2.1)	(5.0)	灰釉	蛇の目釉剥ぎ	
66	5 T 上段 4 層	肥前陶器	坏		(2.4)	(2.9)	灰釉		
67	5 T 上段 4 層	瀬戸・美濃	輪花皿		(2.0)		灰釉		
68	5 T 上段 4 層	備前	すり鉢		(2.9)		(内) にぶい橙色 (外) 灰白色		
69	5 T 上段 4 層	備前	すり鉢		(4.3)		橙色		
70	5 T 上段 5 層	青花	皿		(2.4)		透明釉		
71	5 T 上段 5 層	青花	皿	(10.8)	(1.6)		透明釉		
72	5 T 下段下層	肥前陶器か 朝鮮王朝陶器	碗		(4.2)		灰釉		
73	5 T 上段 5 層	肥前陶器	皿		(1.9)		緑釉		
74	5 T 上段 5 層	肥前陶器	瓶		(3.4)		自然釉		
75	5 T 上段下層	瀬戸・美濃	天目碗		(4.0)		天目碗		
76	9 T 2 層	肥前陶器	碗		(2.9)		白濁釉 透明釉	白土化粧 刷毛目	
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
77	11 T 掘り込み埋土	鉄製品	釘状	14.8	2.9	2.9		91.1	

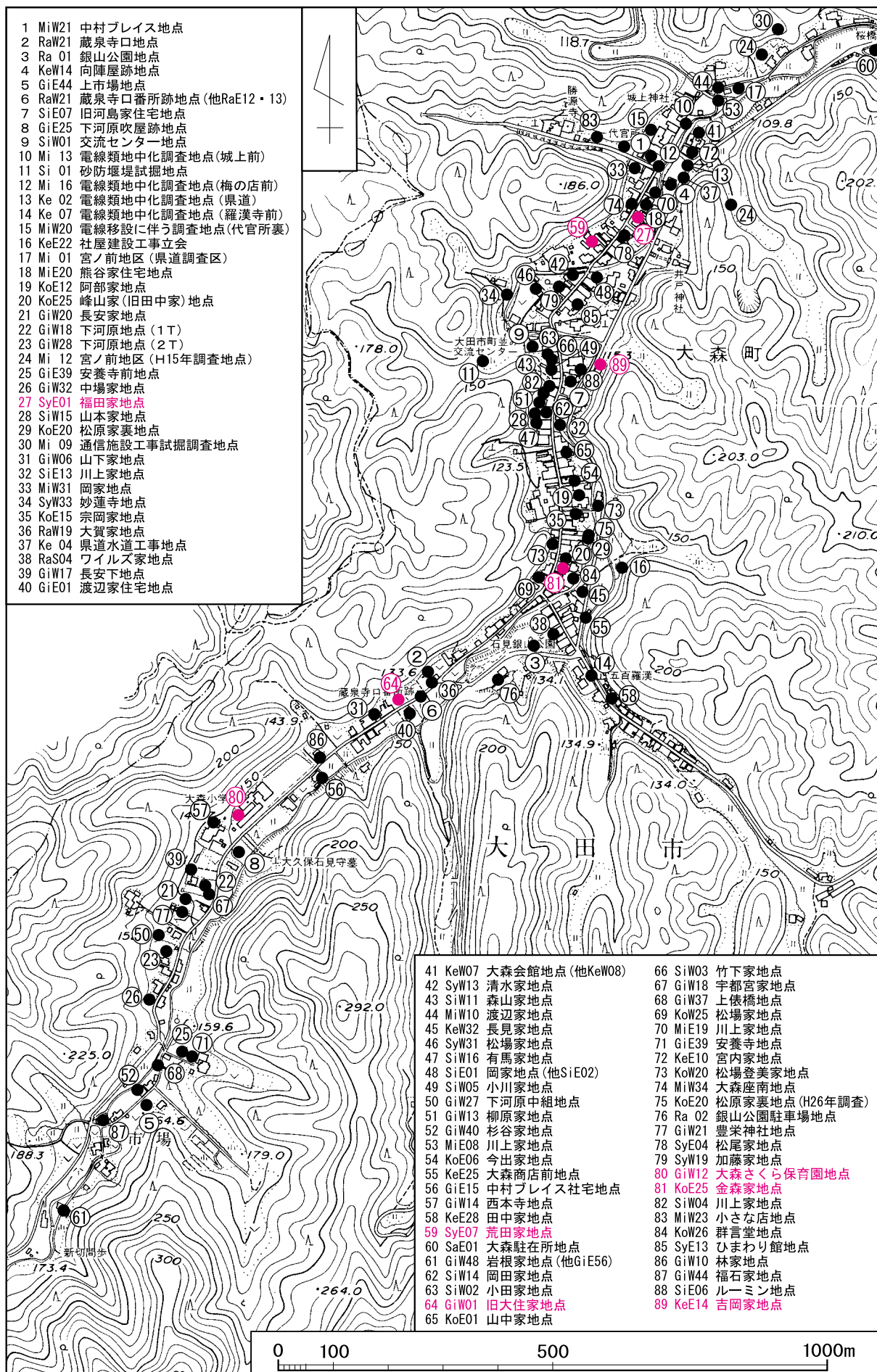


Fig.15 大森銀山伝建地区内発掘調査・試掘・立会地点位置図 (S = 1 / 10,000)

第3章 金森家地点の調査

第1節 調査の概要

第1項 金森家地点の位置と概要 (Fig.16)

金森家地点は駒ノ足地区に所在し、市道大森市街線に西面する。駒ノ足地区は、大森区域でも南側に位置しており、北側は正寿寺参道南で新町と境を接し、南側は羅漢町橋までである。寛政12(1800)年に発生した大森大火は、この駒ノ足地区の中央近くの栄泉寺付近から出火しており、出火地点より北側の大森の町並みがほとんど被災したとされている。出火地点より南側については被災しなかったため、大森の町並みの中でもより古い建物が残っている可能性が高い地域である。

金森家の場所には、江戸時代前期より川北家(泉屋)が居を構えていた。川北家は、宝暦3(1753)年から文化7(1810)年にかけては石見銀山御料内六件六組の郷宿の一つとなり、波積組の郷宿を務めていたことが文献史料から知られている。また、江戸時代の初め頃には大森町で酒造業を営んでいたとされるが、その詳細は明らかではない。

明治37(1904)年に、土地と建物は銀山地区内の高橋家の所有となり、大正15(1926)年に銀山地区の旧宅に転居するまで酒造業を営んでいたとされる。その後、昭和6(1931)年に金森家が医院を開業し、昭和16(1941)年に土地と建物が金森家の所有となっている。

建物の一部には後世の改修や部分的な修理などがなされているものの、概ね旧態を維持しており、江戸時代の建築遺構として貴重であることから、昭和49(1973)年に「石見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森家」として、島根県の指定史跡となっている。

第2項 発掘調査の経過 (Fig.16・17)

金森家地点の発掘調査は平成28年度から開始し、令和元年度で4年目となった。平成28年度の調査では主屋土間の礎石と、主屋内の一部、主屋東側に位置する付属屋跡の調査を実施した。主屋の北東側では、風呂や廊下などの金森家の設備

に関連する遺構が検出されたほか、現在の建物には関係のない礎石など、前身建物に関連する可能性のある遺構が検出された。付属屋跡ではトレンチ調査を実施し、一部で整地面が確認できた。また、付属屋跡と主屋の位置関係から、主屋よりも付属屋が先行して建設されていた可能性が高いと判断された。

平成29年度は工事の進展によって主屋の床下が露出した段階で、トレンチを設定して調査を実施した。調査により、床下では少なくとも2面の整地面が確認でき、それぞれの面で礎石の据え付け痕など、建物に関連する遺構が検出された。現在の建物に関連する第1面では、礎石の据え付け痕がいくつか検出されたほか、工事着工前の地鎮祭で埋められた甕が3点出土した。第2面では、前身建物S B 01に関連する遺構が検出された。S B 01は、北側には犬走りの痕跡が認められるなど、良好な遺存状態であった。

平成30年度は主屋内の東部に位置する土間面の調査を実施した。調査により、土間面の広い範囲で近代の酒造業に関連する遺構が検出された。それぞれ、酒造の工程の中でも洗米に関連する「洗い場」と、蒸米に関連する「釜場」に相当する遺構で、近代における酒造業の様子を示す資料として貴重である。

令和元年度には、主屋東側に位置する土蔵の床組み解体工事によって、切石を積み上げて構築された地下蔵が検出されたため、その記録調査を実施した。また、工事の進捗に伴い実施した試掘調査では、かつての敷地を区画していた石垣が検出されたため、記録作業を実施した。

第2節 調査の成果

第1項 検出遺構 (Fig.17)

【S X 01】 (Fig.21・22)

S X 01は金森家主屋東部の土間より検出された半地下式の釜場跡である。調査開始時には、調

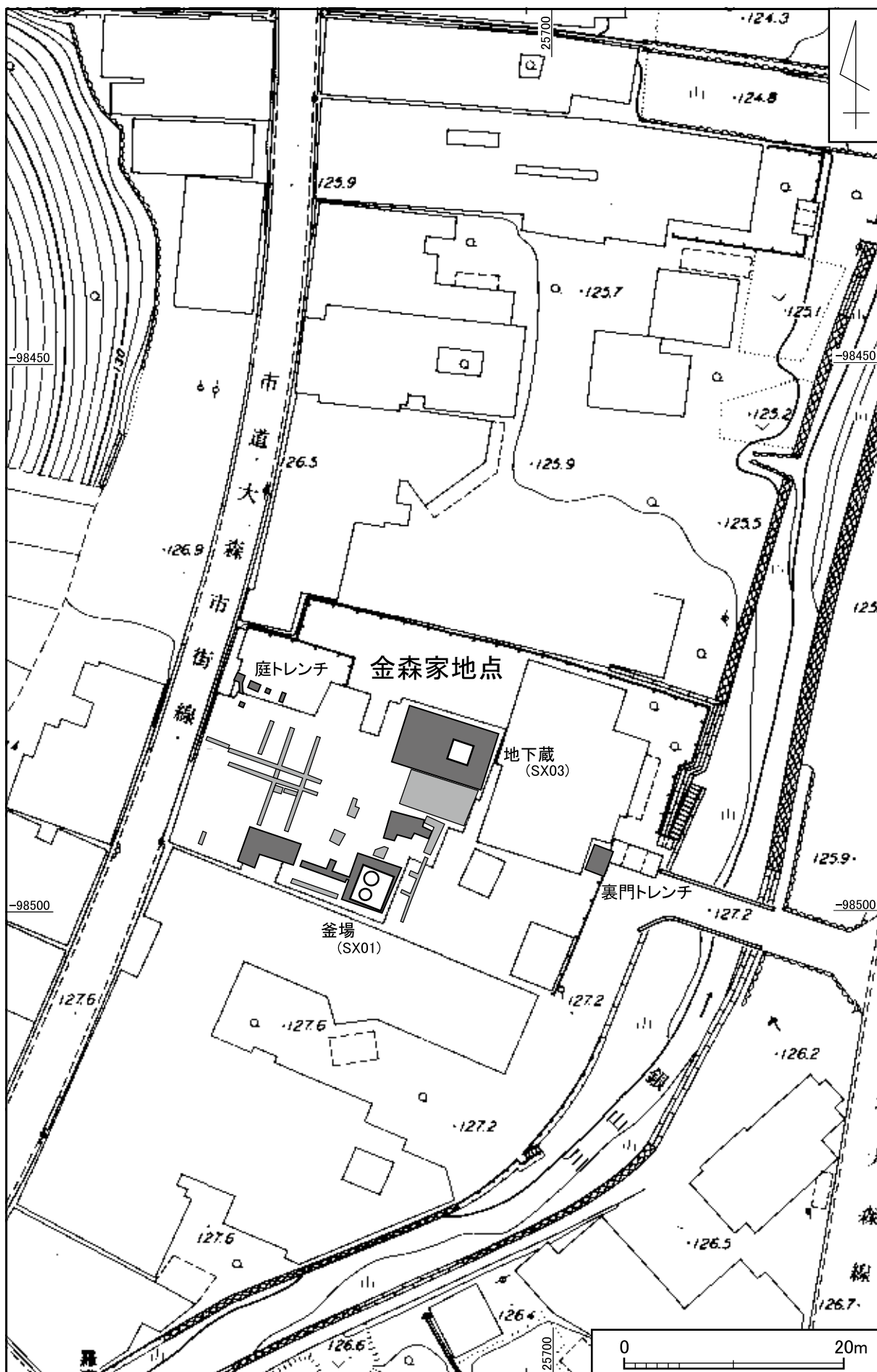


Fig.16 金森家地点調査区配置図 (S = 1 / 500)

査地は土間となっていたが、S X 01の一部は露出していた。S X 01は煉瓦と積石・モルタルなどによって、かまどと床・階段からなる作業場が構成された、近代の酒造業に関連する遺構である。S X 01では東向きに開口する焚口を持つ2基のかまどが連結して据えられている。埋土のほとんどは柔らかく、しまりのない土だが、一部には石灰を含んだ層もある。また、埋土には破壊した煙突の破片が大量に入っており、釜場を埋めた際には併せて煙突も破壊したようである。

床部分も含めた遺構の範囲は東西3.2 m、南北4.0 mと南北にやや広く、広さは12.8㎡である。作業場は半地下状に下がっており、遺構の北部に設けられた階段で焚口の前に降りるようになっている。地下部分の壁面は切り石を積んで造られており、かまどは煉瓦で造られている。床面は土間である。また、S X 01の北端部には長さ100cm、幅20cm、高さ35cmの延石が据えられている。延石の下面には幅9 cm、深さ23cmの抉りがあり、空洞になっていた。延石の用途は確定的ではないが、洗米したコメをこしきに入れる際に、足場として利用していた可能性が想定される。

かまど本体は2基が連結しており、それぞれに火口がある。2基のかまどは、直径の違いや作業の効率などを鑑みると、足場とみられる延石に近いものが米を蒸すための「大釜」、もう一つが湯沸し用の「脇釜」と推定される。これらの内、脇釜には鉄製羽釜の一部が残存していた。かまど全体には耐火煉瓦が用いられ、大釜の焚口上部には、焚口の部分をアーチ状に加工した花崗岩が据えられていた。脇釜の焚口には、花崗岩を据えていた痕跡はないが、焚口前面には周辺の煉瓦と共に鋳物製の鉄枠(148)が落ちていた。そのため、脇釜には本来鋳物製の焚口が設置されていたと推定される。脇釜の南部には、内面にススが付着した石が3点並んでいる。これらは、北側に面を持つようにアーチ状に配されていることから、一段階古い釜跡の可能性がある。金森家地点においては、川北家が居住していたころから酒造業を営んでいたことが知られているが、その際に機能していた

釜跡かもしれない。

各釜の西部には煙出口から、西辺に沿って煙道が伸びており、釜場の南西隅の煙突に至る。煙道の端部には、煉瓦を方形に積み上げた煙突最下部が残存していたほか、S X 01の埋土には陶製煙突の破片が多く含まれていた。大釜には、造られた当初の煙道(旧)を埋めてやや南側に新たな煙道を設けている。いずれの煙道にも、内面にはススが付着しており、一定期間利用されていたとみられるが、煙道(旧)では十分に煙を排出できなかったために新しく付け替えたのだろうか。

焚口の東側には、焚口からやや下がって土間面が広がっている。床面は東西1 m、南北2.6 m、広さ2.6㎡である。この範囲は蔵人が火をたくための作業場とみられる。作業場の北部には、主屋の床面から降りるための4段の石製階段が設けられている。この階段は一段あたり高さ24～34cm、ステップの広さは24～26cm程度である。一番低い段のすぐ側には、鉄製の杭が打ち込まれており、崩落防止などの目的が考えられる。

土間面の釜のある場所以外の三方には、壁面保護の目的とみられる石積が構築されている。この石積には、割石・切石・延石が用いられており、北壁には厚さが異なる切石を5段積み上げている。なお、北壁の東半部は上述の階段である。東壁の北半分では、延石を5段積上げたのち、割石を2段積んでいる。南半は、割石を布積みとしている。積石の表面には鑿痕もあり、整形の意図も認められる。ただし、積石には隙間も多く、精緻な積み方とはなっていない。南壁は、最下部には短い延石が、それよりも上には切石と割石が使用されている。一部には加工されていない自然石も使用されている。石の加工や積み方は東壁と同様で、表面を整えてはいるものの石同士には隙間が多い。

【S X 02】(Fig.17)

S X 02は主屋東側の勝手口付近に所在する石敷遺構である。仕切りなどがいないため、どの範囲までを遺構と捉えるかは難しいが、石敷きとなっている範囲は東西約4 m、南北約3 mで、面積は

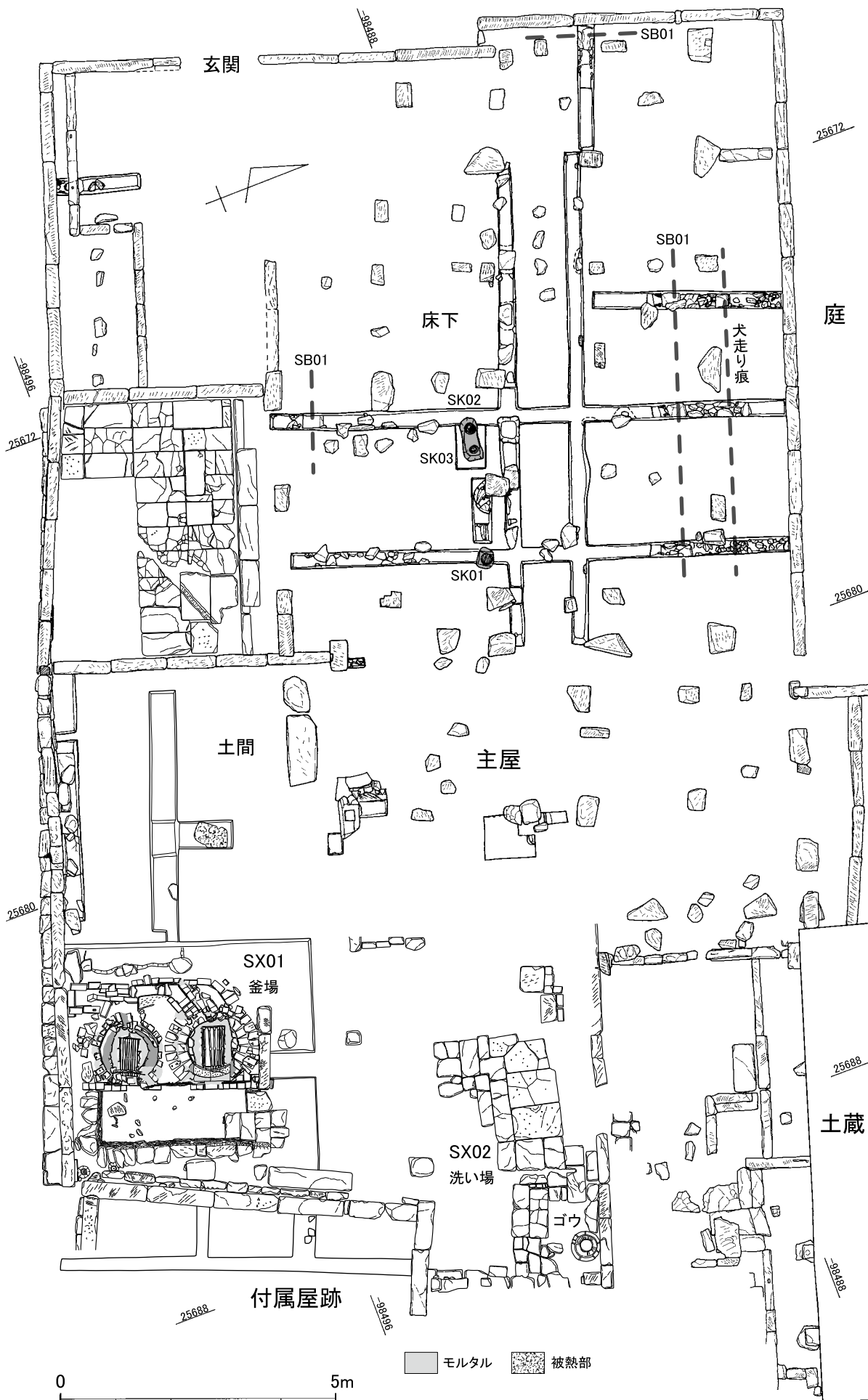


Fig.17 金森家地点主屋遺構平面図 (S = 1 / 100)

約 12㎡である。敷石の大きさにはばらつきがあるものの、長方形に成形し、上面を平らにした石を並べている。S X 02 の北東隅には直径 60cm の排水設備 (ゴウ) がある。石敷は東西方向・南北方向とも、ゴウに向かって東方向へわずかに下がっており、検出された範囲では東端部と西端部での比高が約 15cm、傾斜角度は約 2.5°であった。このように、ここで水が排出された際には敷石の上を流れてゴウへと入り、外へと排出される構造となっている。S X 02 が検出された当初は、遺構の横にかまどが設置されていることなどから、大森区域内でも岡家や渡辺家などで検出されていた、生活に伴う台所の水場遺構と認識していた。しかし、S X 01 が検出されたことによって、金森家主屋の南東土間には近代の酒造業に関連する遺構が残存していることが判明したことや、S X

02 の北東でゴウが検出されたことにより、S X 02 も酒造に関連する遺構の可能性が高いと推定した。本遺構は上記のように、石をわずかに傾斜させて配置し、北西隅の排水溝に水を集める構造となっていることから、酒造の工程の内でも洗米を行うための「洗い場」と考えられる。

【S X 03】(Fig.30・31)

S X 03 は石造りの地下蔵である。金森家東土蔵の床組修理に伴って、床板を外した際に発見された。ただし、大森町内の住民に聞き取りを行ったところ、「戦後くらいの頃にはここに入って遊んでいた。」との情報が得られており、割合近い時期まではその所在が知られていたようである。なお、その際には中に何も入っていなかったとの情報も併せて得られており、戦後にはすでに地下蔵としては機能していなかったと思われる。

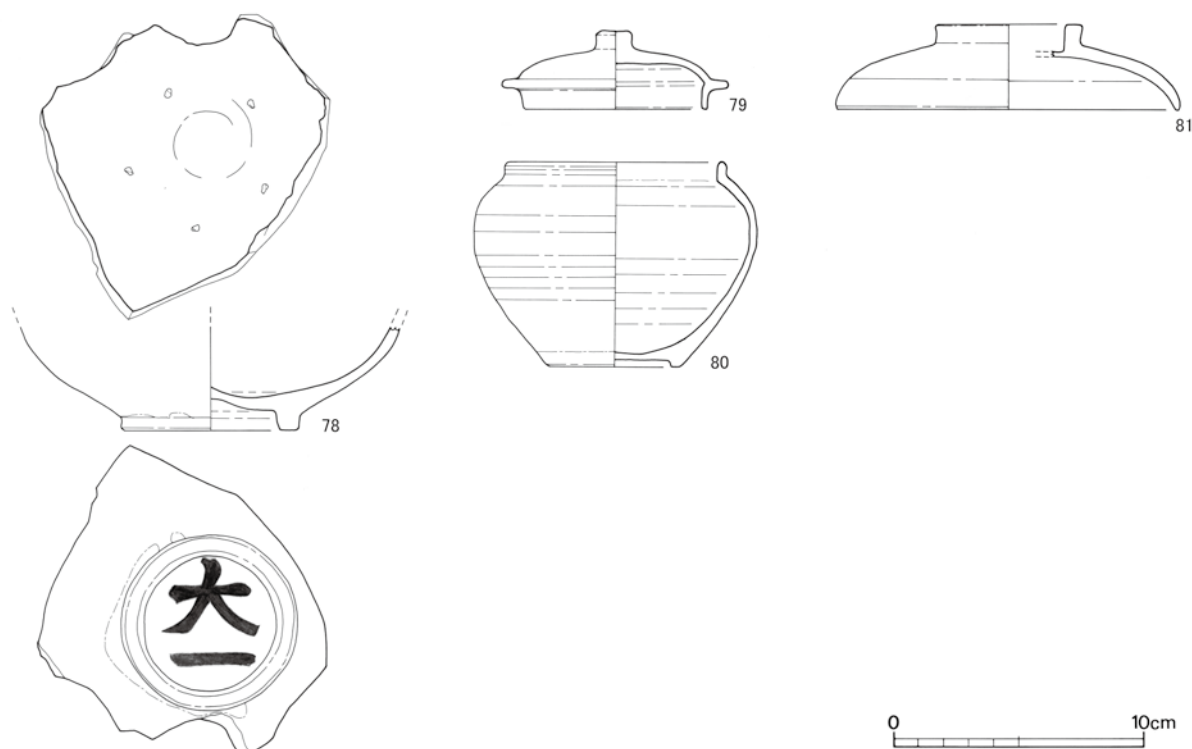


Fig.18 金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅰ (S = 1 / 3)

Tab. 4 金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅰ

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大 き さ (cm)			色 調 ・ 釉 薬	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
78	付属屋 主屋側	石見	鉢		(4.1)	6.7	長石釉	胎土目	墨書
79	主屋 エナツボ上	石見	蓋	(7.0)	3.1	つまみ径 1.6	長石釉		
80	主屋 エナツボ上	石見	胞衣壺	(8.5)	8.2	5.2	長石釉		
81	南通りトレンチ	石見	蓋	(13.4)	3.4	(5.6)	長石釉		

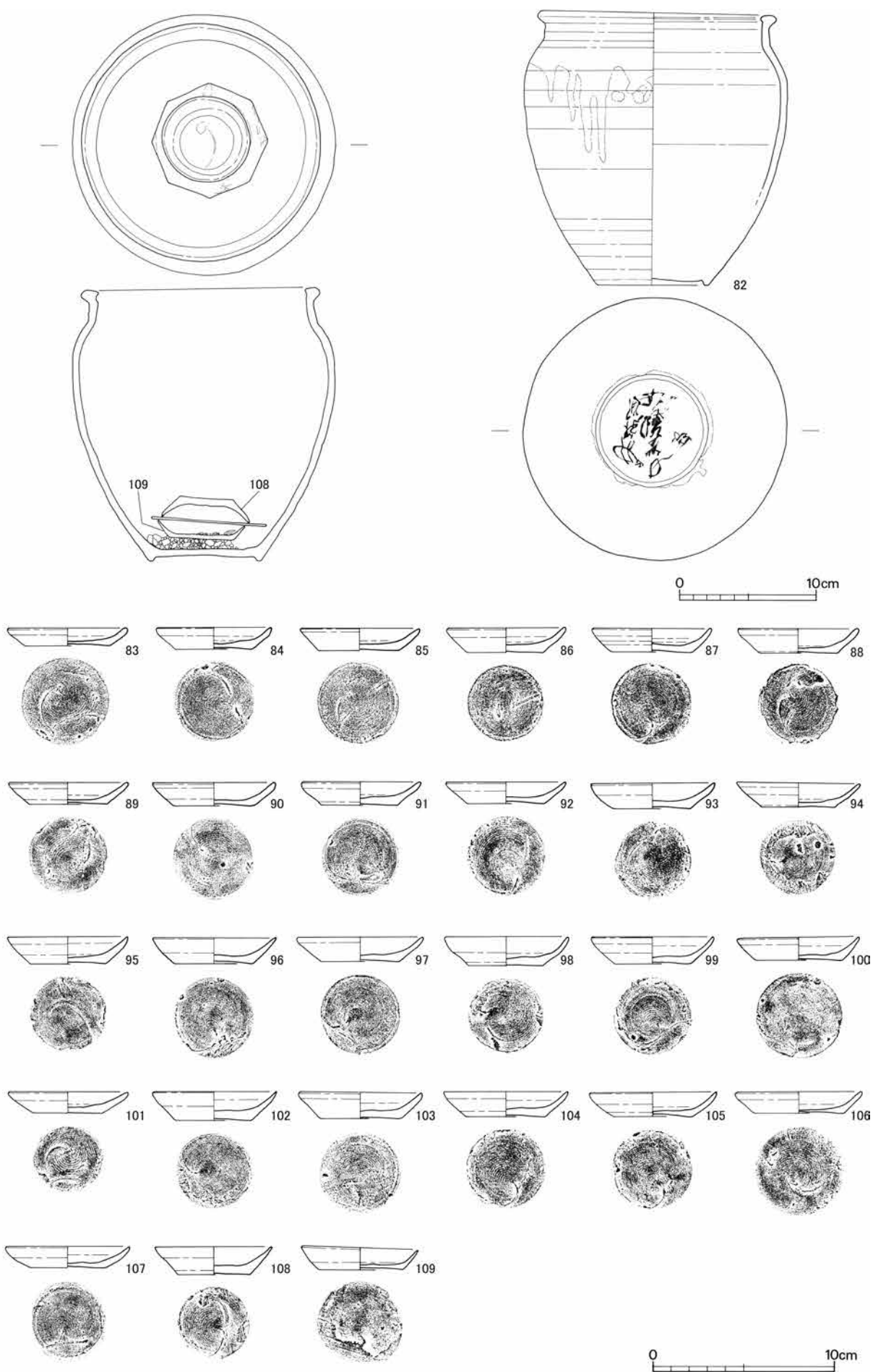


Fig.19 金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅱ (S=1/3、1/4)

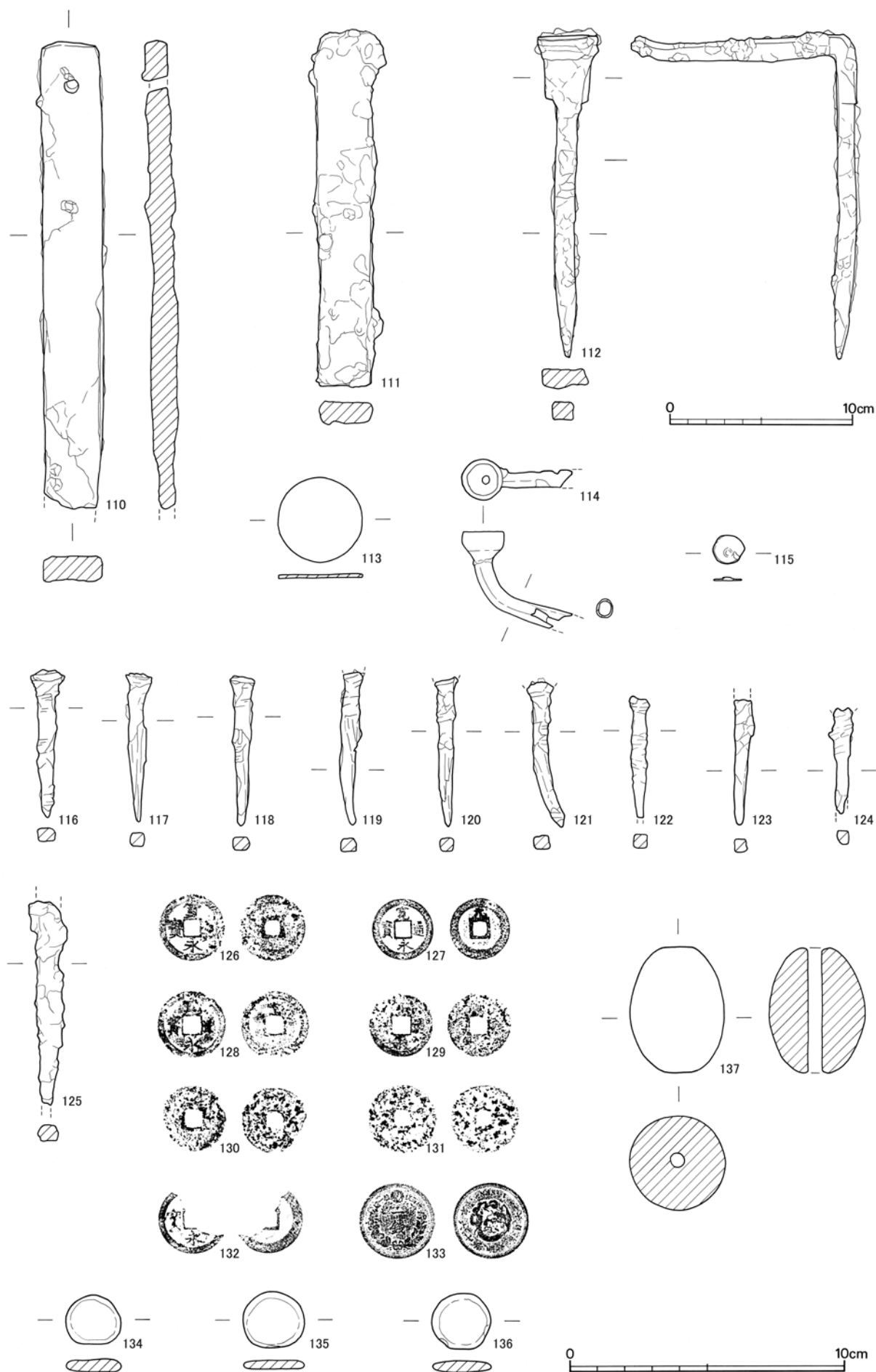


Fig.20 金森家地点主屋出土遺物実測図Ⅲ (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab. 5 金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅱ

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
82	S K 02	石見	甕	17.0	20.0	8.2	来待釉		かわらけ入り
83	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.0	4.6	浅黄橙色		
84	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.4	1.2	4.3	浅黄橙色		
85	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.3	4.4	浅黄橙色		
86	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.5	1.4	4.3	浅黄橙色		
87	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.5	1.4	4.1	浅黄橙色		
88	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.4	4.4	浅黄橙色		
89	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.2	4.3	灰白色		
90	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.7	1.3	4.5	灰白色		
91	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.3	4.2	灰白色		
92	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.2	4.3	淡黄色		
93	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.4	4.2	浅黄橙色		
94	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.4	4.0	浅黄橙色		
95	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.5	4.1	浅黄橙色		
96	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.4	4.4	灰白色		
97	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.9	1.4	4.4	浅黄橙色		
98	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.6	4.1	灰白色		
99	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.6	1.5	4.2	浅黄橙色		
100	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.7	1.3	4.7	浅黄橙色		
101	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.5	1.2	3.8	浅黄橙色		
102	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.6	4.2	灰白色		
103	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.7	1.5	4.4	灰白色		
104	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.4	4.4	灰白色		
105	S K 02 甕内	土師質土器	皿	7.0	1.4	4.2	灰白色		
106	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.9	1.2	5.0	灰白色		
107	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.8	1.2	4.0	灰色色		
108	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.5	1.6	4.0	灰白色		
109	S K 02 甕内	土師質土器	皿	6.5	1.3	4.6	淡黄色		
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
110	蔵前上層	鉄製品	不明	25.6	3.5	1.8		550	
111	付属屋主屋側	鉄製品	不明	19.7	4.3	1.3		320	
112	付属屋主屋側	鉄製品	不明	18.0	2.7	1.0		225	
113	金森家主屋床下	銅製品	不明	3.1	3.1	0.1		7.9	
114	SK 01 と SK 02 の間	銅製品	キセル (雁首)	4.0	1.5	最大高 3.5		4.6	
115	床下 S K 01	銅製品	不明	1.1	1.2	0.2		0.4	
116	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.4	1.3	0.8		3.7	
117	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.4	0.9	0.7		3.5	
118	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.5	0.9	0.8		3.5	
119	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.7	0.8	0.7		3.5	
120	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.5	0.9	0.6		3.3	
121	床下 S K 01	鉄製品	釘	5.5	0.9	0.9		3.2	
122	床下 S K 01	鉄製品	釘	4.6	0.7	0.6		2.8	
123	床下 S K 01	鉄製品	釘	4.6	0.8	0.7		2.5	
124	床下 S K 01	鉄製品	釘	3.4	0.9	0.5		2.4	
125	床下	鉄製品	釘	7.5	1.3	1.0		8.5	
126	床下	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			3.1	
127	床下	銭貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.2	
128	床下	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.1	

Tab. 6 金森家地点主屋出土遺物一覧表Ⅲ

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
129	床下	銭貨	寛永通寶?	2.3	2.3			2.4	
130	床下	銭貨	不明	2.4	2.2			2.3	
131	床下	銭貨	寛永通寶?	2.5	2.5			3.8	
132	主屋内	銭貨	○永○寶	2.3	2.3			1.6	
133	柱周辺	銭貨	一銭	2.8	2.8			7.1	
134	床下	石製品	碁石	1.8	2.0	0.5	オリーブ黒色	3.0	
135	床下トレンチ外採集	石製品	碁石	2.1	2.2	0.3	黒色	2.6	
136	床下	石製品	碁石	2.1	2.2	0.4	灰白色	2.8	
137	床下	石製品	風鎮	4.6	3.4	3.5	灰黄褐色	78.2	

S X 03 は、地面を掘り下げて空間を確保し、四方向に延石を積み上げて壁を構築している。壁の上には梁をT字に配し、その上に板状の切石を8枚載せて天井とし、さらにその上を粘土でふさいでいる。天井の北東端には、木杵に囲まれた切石も粘土もない箇所があり、ここが入口であったと思われる。木杵は段状に加工されており、この部分に蓋が載る構造であったと推定される。蓋はすでに失われているが、木杵の西端には蓋を開閉するための軸がはめ込まれていたと考えられる円形の窪みがある。さらに、蓋の直上にあたる蔵天井部の梁には、持上げた蓋を固定するためとみられる金具も残存している。なお、木杵上面には3か所に○△□の墨書があり、加工した木杵を現地に嵌める際の目印とみられる。

壁面は高さ 24cmの延石を6段積み上げており、深さは 1.44 mである。床面は 1.9 m四方だが、北壁と南壁が一段あたり 1～2 cm程度ずつ内側にせり出していき、最上部では東西 1.83 m、南北約 1.9 mとなっている。延石を積み上げる際には、壁面同士が接する角は互い違いになるように積み上げると強度がでる。しかし、S X 03 では 1・2段目の北東隅と北西隅、2・3段目の南西隅、3・4段目の南西隅、4・5段目の北西隅は互い違いの積み方ではない。S X 03 に使用されている延石は、長さが揃っていないことから、壁面の大きさを揃えようと工夫した結果かもしれない。

S X 03 の中央には支柱があり、天井を支えている。ただし、地下蔵の床面と、支柱が載る礎石下面の間には、床につもった砂やほこりが挟まれており、この礎石は S X 03 が構築されてからか

りの時間が経った後に据えられたと判断できる。そのため、構築された当初は、内部に柱などがない、広い空間であったようである。S X 03 内には中央の支柱以外にも、床面や天井に添木の痕跡が6か所ずつ残っている。切石と粘土でできた天井は相当に重いことが想像されることから、崩落の懸念などがあったのかもしれない。

【庭トレンチ】(Fig.28)

庭トレンチは、庭の排水管理設に先立って発掘調査を実施した。設定した各トレンチでは、かつての庭に関連する遺構が重層的に検出された。全容は把握できなかったものの、最下部では漆喰が広範囲に敷かれているほか、18世紀代に比定できる鉢が埋設されている状況が確認された。漆喰は水が抜けないための造作と考えられ、庭には池があったことが想定される。池が廃棄されたものの堆積層からは、一部で雨水を排出するための石樋が検出された。また、一部だけではあるが石樋の上には瓦が置かれており、本来は暗渠としていたかもしれない。これらの遺構は前身建物に伴う可能性が高く、現在の建物の建築時に土が入れられ、新たに作庭されたと考えられる。

【裏門トレンチ】(Fig.29)

裏門トレンチは、浄化槽埋設に際して敷地の東端部に設定したトレンチである。本トレンチでは、かつて敷地を区画していた石垣の一部が検出された。検出された範囲では基底部の1段のみで、その上面は過去の開発によって破壊されていた。築石同士が接する部分はすき間もない程丁寧に加工されており、表面も鑿によって平滑に整えられている。築石の下には、いくつかの間詰石を配して

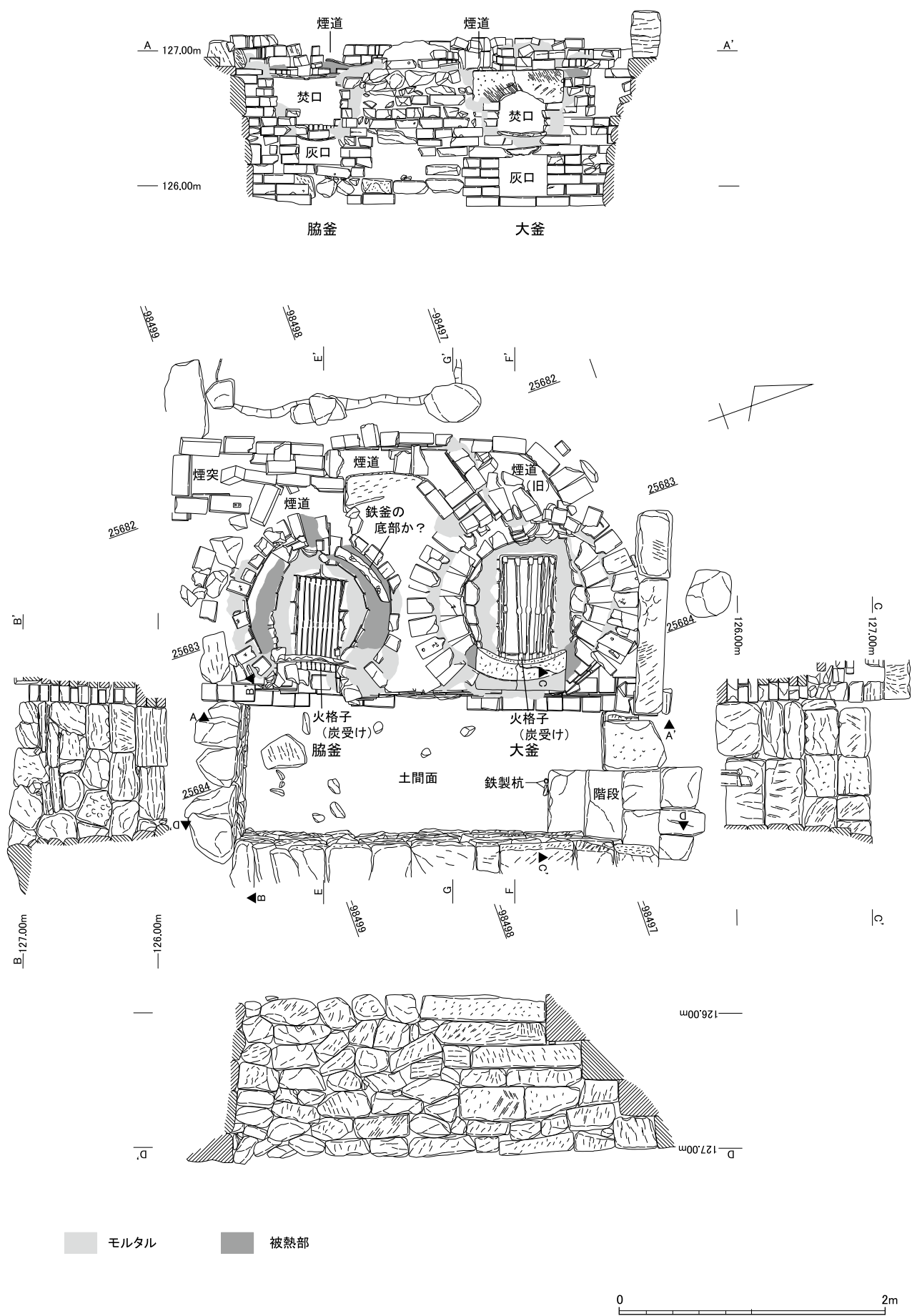
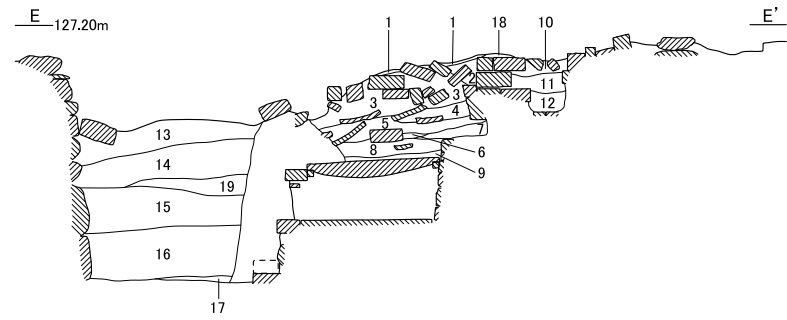
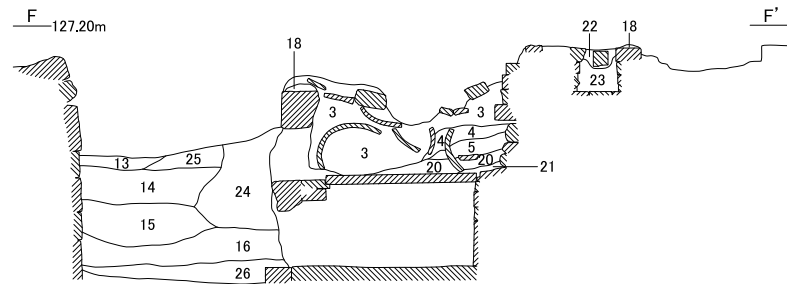


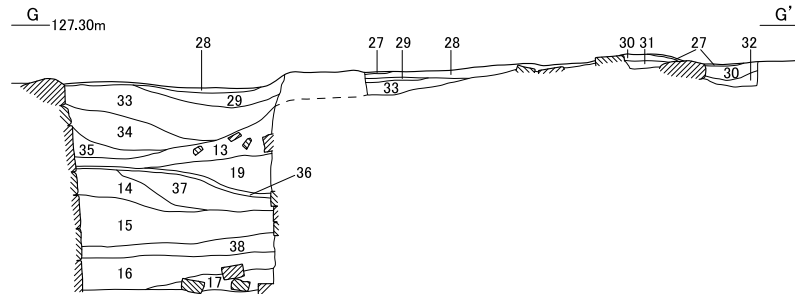
Fig.21 金森家地点 S X 01 平面図・立面図 (S = 1 / 40)



脇釜



大釜



- | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|-------------------------------|----|-----|----|-------|--------------------------|
| 1 | 5 | YR | 3/2 | 暗赤褐色土(緻密な土。しまりない) | 20 | 10 | YR | 3/2 | 黒褐色土(緻密な土。しまりない) |
| 2 | 2.5 | Y | 6/4 | にぶい黄色土(やや粘質。ややしまりあり) | 21 | 10 | YR | 7/1 | 灰白色土(やや粘質。緻密な土。灰含む) |
| 3 | 10 | YR | 4/2 | 灰黄褐色土(しまりなく、やわらかい土) | 22 | 10 | YR | 4/2 | 灰黄褐色土(緻密な土。ややしまりあり) |
| 4 | 2.5 | Y | 6/3 | にぶい黄色土(やや粘質。しまり弱) | 23 | 7.5 | Y | 6/6 | 橙色土(緻密な土。ややしまりあり。焼土) |
| 5 | 7.5 | YR | 4/3 | 褐色土(やや粘質。ややしまりあり) | 24 | 10 | YR | 4/2 | 灰黄褐色土(さらさらの土。しまりない) |
| 6 | 5 | YR | 7/6 | 橙色土(粘性強。ややしまりあり。焼土か?) | 25 | 10 | YR | 8/2 | 灰白色土(ふかふかの土。しまりない。石灰を含む) |
| 7 | 10 | YR | 7/2 | にぶい黄橙色土(緻密な粘質土。しまりあり。灰を多く含む) | 26 | 10 | YR | 1.7/1 | 黒色土(緻密な土。しまりない。炭化物層) |
| 8 | 7.5 | YR | 6/2 | 灰褐色土(緻密な粘質土。しまりあり。灰を多く含む) | 27 | 5 | Y | 6/2 | 灰オリーブ色土(しまり弱。やわらかい土) |
| 9 | 2.5 | Y | 2/1 | 黒色土(やや粘質で緻密な層。炭化物を多く含む灰混じる) | 28 | 2.5 | Y | 3/2 | 黒褐色土(よくしまり、きめ細かい。石灰の層有り) |
| 10 | 2.5 | Y | 5/1 | 黄灰色土(さらさらの土。しまりない) | 29 | 2.5 | Y | 6/2 | 灰黄色土(よくしまり、きめ細かい砂質土) |
| 11 | 7.5 | YR | 4/2 | 灰褐色土(緻密な土。ややしまりあり) | 30 | 2.5 | Y | 7/4 | 浅黄色土(よくしまり、きめ細かい粘質土。土間土) |
| 12 | 5 | YR | 4/4 | にぶい赤褐色土(緻密な土。ややしまりあり。焼土を多く含む) | 31 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(しまり弱。5ミリ大の粒子を含む) |
| 13 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(ふかふかの土。しまりない) | 32 | 5 | Y | 3/1 | オリーブ黒色土(しまり弱。やわらかい土) |
| 14 | 2.5 | Y | 6/4 | にぶい黄色土(やや粘質。ふかふかの土。しまりない) | 33 | 2.5 | Y | 6/4 | にぶい黄色土(やわらかい。ビニール等を含む) |
| 15 | 2.5 | Y | 5/2 | 暗灰黄色土(ふかふかの土。しまりない。石灰を僅かに含む) | 34 | 2.5 | Y | 5/3 | 黄褐色土(しまり弱。やわらかい土。やや粘質) |
| 16 | 10 | YR | 5/1 | 褐灰色土(緻密で、ふかふかの土。しまりない) | 35 | 2.5 | Y | 3/1 | 黒褐色土(しまり弱。やわらかい土。やや砂質) |
| 17 | 2.5 | Y | 7/1 | 灰白色土(緻密な粘質土。しまりない。灰を含む) | 36 | 10 | YR | 8/1 | 灰白色土(しまり弱。やわらかい土。石灰を含む) |
| 18 | 5 | YR | 6/8 | 橙色土(緻密で、しまりあり。焼土) | 37 | 7.5 | YR | 5/2 | 灰褐色土(しまり弱。やわらかい土。礫を含まない) |
| 19 | 2.5 | Y | 5/3 | 黄褐色土(ふかふかの土。しまりない) | 38 | 7.5 | Y | 5/6 | 明褐色土(ややしまり、やわらかい土。粘質) |

0 2m

Fig.22 金森家地点 S X 01 土層断面図 (S = 1 / 40)

いるものの、大規模な造作はされておらず、基本的には地面の上に積石を直接置いている。

第2項 出土遺物

(Fig.18～20・23～27・32・33、Tab. 5～10)

78は石見焼の鉢である。見込みに胎土目があるほか、高台の中には「大一」の墨書がある。79・80は石見焼で、蓋付の小壺である。81は主屋南側の延石沿いで出土した、石見焼の蓋である。

82はS K 02の西側に埋納されていた石見焼の甕である。底面には墨書があり、「四拾文」と読める部分がある。内容物として、かわらけ27点と、輪宝とみられる銅板1枚が納められていたほか、黒色に変質した有機物や籾殻が入っていた。83～109は、82に納められていたかわらけである。大きさはいずれも口径6.4～7.0cm、器高1.0～1.6cm、底形4.1～5.0cmで、多少のバラツキはあるものの概ね揃っており、色調も灰白色～浅黄橙色と一様である。一部に有機物の付着等による汚れがある資料もある。これらのかかわりと輪宝の埋納は一定の方法に則って行われており、まず底部に五穀を敷き詰めて109を上向きに置き、その上に輪宝を載せる。輪宝の上に、口縁を下にして108を重ねる。銅製の輪宝を口縁で挟んでいたため、108・109の口縁部は緑錆によって変色している。その後、108・109以外の25点を有機物とともに埋納する。82とそれに埋納されていた一連の資料は、現在の建物が建てられた際の地鎮祭で使用されたもので、当時の地鎮祭における法具・器具の埋納状況が詳細に確認できる事例として非常に貴重である。なお、地鎮に関連する資料としてはこれら以外にも甕が2点と、一字一石経が1,432点出土している。甕と一石経の一部は概要26で報告しているが、一石経については引き続き整理・検討を行っている。

110は東土蔵の南側で出土した鉄製品である。片側を欠損しているが、現存する範囲では細長い短冊状で、片側に穴が開いている。建築部材の一部、もしくは機械の一部の可能性がある。111・112は付属屋の主屋側で出土した鉄製品である。111は110と同じく細長い短冊状である。112

はくの字に折れており、片側の先端が釘状になっている。また、釘状部の反対側はマチ状になっており、一定以上刺さらないような加工がされている。もう一つの端部はやや外側に反っている。差し込んで使用する、取っ手のような用途が想定される。

113は金森家の敷地内で採集された薄い銅製の円盤で、肉眼観察のみではあるが表裏とも模様は確認できない。114はS K 01とS K 02の間から出土した、銅製キセルの雁首である。脂返しが大きく湾曲しているほか、火皿の付け根には補強体の痕跡も認められるなど、古相を呈している。

115から124は、S K 01から出土した。115は小型でボタン状の銅製品で、片面にへそ上の突起がある。用途は不明だが、S K 01に埋納されていた木箱の装飾の一部かもしれない。116～124は鉄釘である。いずれも小型でサイズが揃っており、木箱を留めていた釘の可能性はある。

126～133は銭貨で、126は古寛永、127～132は新寛永、133は明治16年発行の竜一銭銅貨である。134～136は碁石、137は石製の風鎖である。

138～143は酒造用の釜の中から出土した資料である。138は肥前磁器の端反碗である。139は瀬戸焼(新製焼)で、色絵で植物が描かれている。140は肥前磁器の皿で、底部は蛇の目凹型高台になっている。内面には机と花瓶が描かれている。141は肥前磁器のそば猪口で、外面底部に「風祥」の文字がある。143はサナである。144～147は釜の火格子である、それぞれの釜から複数点が出土しているが、いずれも同一規画の資料であるため、各釜から2点ずつを掲載した。144・145は大釜、146・147は脇釜から出土した。大釜からは掲載したものを含めて9点出土したが、火格子がはまる枠の大きさから、本来は10点で一揃いであったと想定される。脇釜は8点で一揃いで、その全てが残存していた。それぞれが隙間なく密着していたため、検出当初は鉄製の板がはまっているとみていたのだが、取り上げの段階で、大釜と同じく棒状の鉄製品を並べて

いることが判明した。148は脇釜の焚口にはまっていたとみられる鉄製の枠である。149・150は銭貨で、いずれも新寛永である。

151～158は釜場を構成する煉瓦で、大量に出土したため、被熱痕が認められたり、表面に数字がスタンプされたものや、形態が特異なものなど、特徴的な資料のみを掲載した。サイズはいずれも揃っておらず、断面形もまちまちである。特に155はいびつな断面形をしている。それぞれの大きさが不揃いであることや、表面には筋状の痕跡が認められることから、型起こしではなく、切り離しによって成形されていると判断できる。

159～162は陶製の煙突である。いずれも長さ約90cm、直径約34cmとほぼ同一規格の円筒形で、内面はススで真っ黒になっている。積み上げた際にぴったりと重なるように、内面下側の一部を削って整形している。いずれの資料にも上下に「一」～「九」までの数字を墨書しており、積み上げる順序を示しているとみられる。159は上半部を欠損しているため、墨書の有無は確認できないが、「一」から始まって、「九」で終わっていることを鑑みると、159の上部には墨書はなかったか、数字以外の情報が墨書されていたかのいずれかと考えられる。この煙突は、本来は釜場の南部にある煙出しから建物外へと上がっていたと考えられるが、釜場の廃棄に伴って破壊され、破片のほとんどは釜の中に埋められていた。

164・165はS X 02のゴウ下層から出土した資料で、164が須佐焼のすり鉢、165が石見焼

の甕である。

166～171は金森家の敷地内東部の浄化槽埋設に伴う調査によって出土した資料である。166は肥前磁器で、ぼてっとした形状の碗である。見込みに荒い蛇の目釉剥ぎがある。167は肥前磁器で、外青磁の碗である。169は石見焼の甕である。170は須佐焼のすり鉢で、見込みと底部に胎土目の痕跡が認められる。171は銭貨で、新寛永である。166や167など、18世紀後半ころに比定できる古い資料も出土している。ただし、調査によって、主屋東側に所在する平成以降の建物を建てるまでに、かつての石垣の上半を破壊していることが判明している。そのため、これらの出土遺物は著しくかく乱を受けており、堆積層の年代を反映するものではない。

172・173は東土蔵のS X 03から出土した資料で、いずれもガラス製の薬瓶である。表面に「金森醫院」、裏面に「井原製」の陽刻がそれぞれ認められる。左右の側面には目盛と「100」の陽刻があることから、100ml入りの容器とみられる。目盛は左側が9個で、右側が6個と、100mlを分けるにはいずれも中途半端になっている。推測ではあるが、左側が子ども向けの一回分の服薬量で、右側が成人向けの一回分の服薬量を示しており、一日3回服用するならばそれぞれ3日分と2日分として処方されていたかもしれない。裏面の「井原製」は、このガラス瓶を製造した企業名を示している可能性が高いと思われるが、特定することはできなかった。

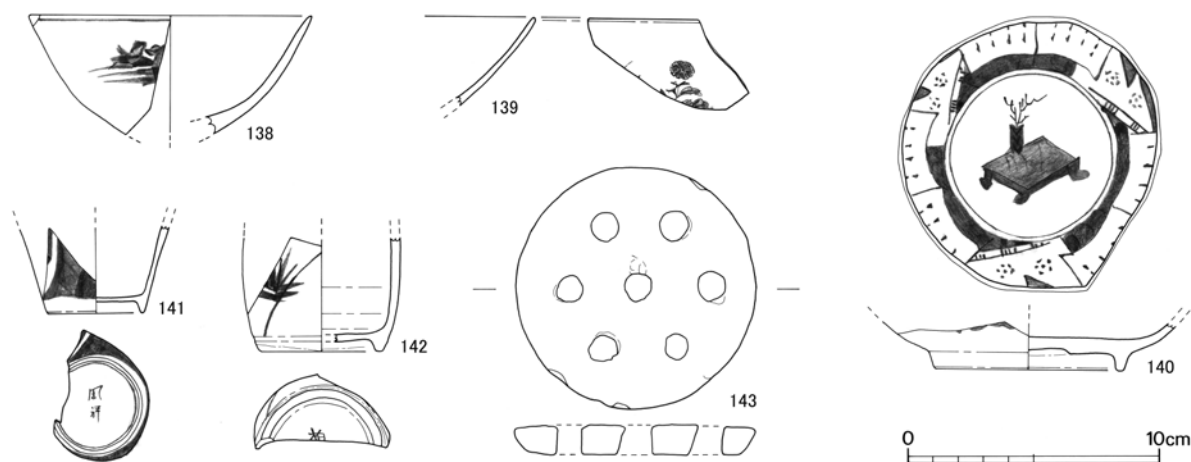


Fig.23 金森家地点S X 01 出土遺物実測図I (S=1/3)

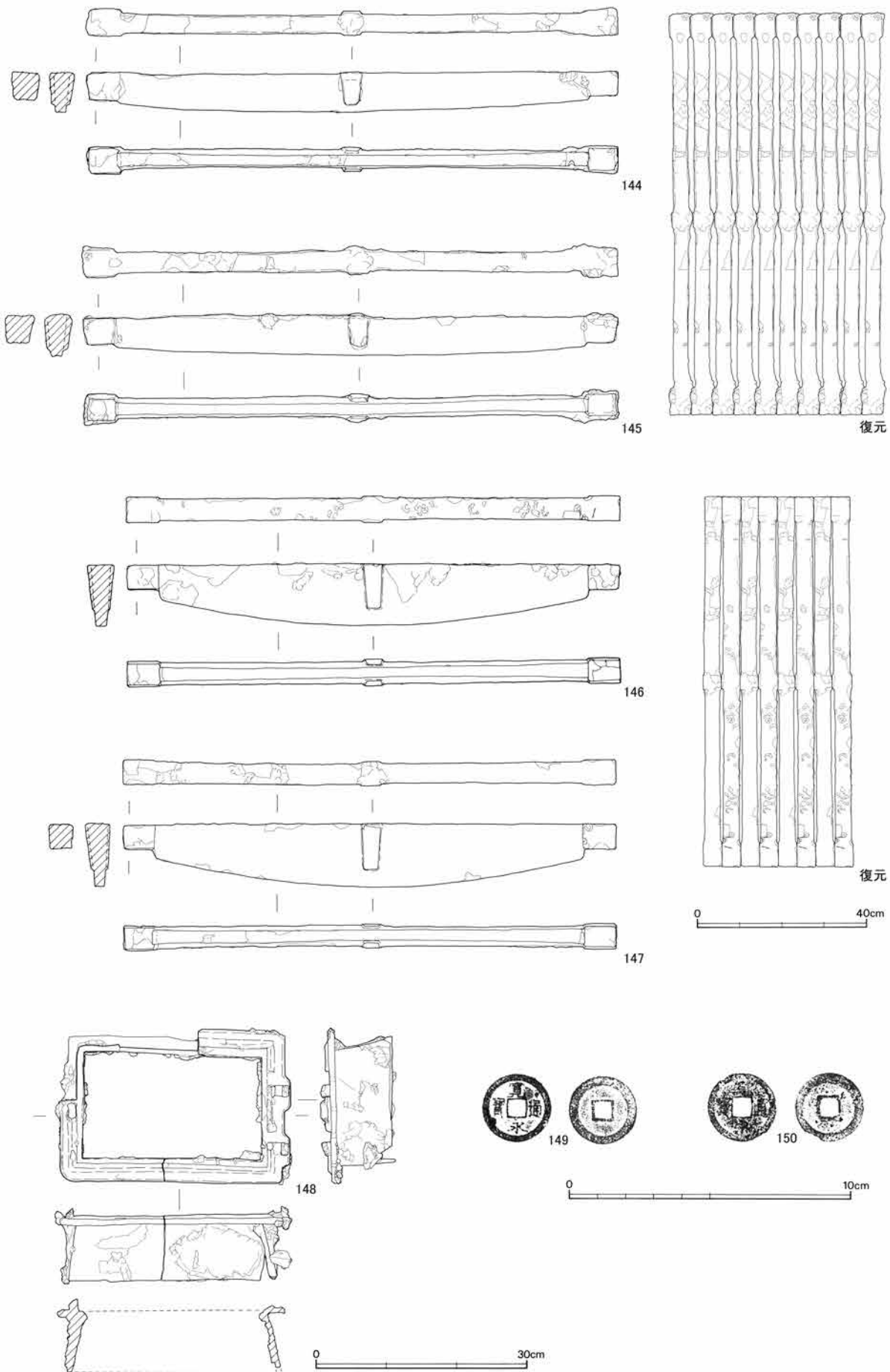


Fig.24 金森家地点S X 01 出土遺物実測図Ⅱ (S = 1 / 2、1 / 8、1 / 13)

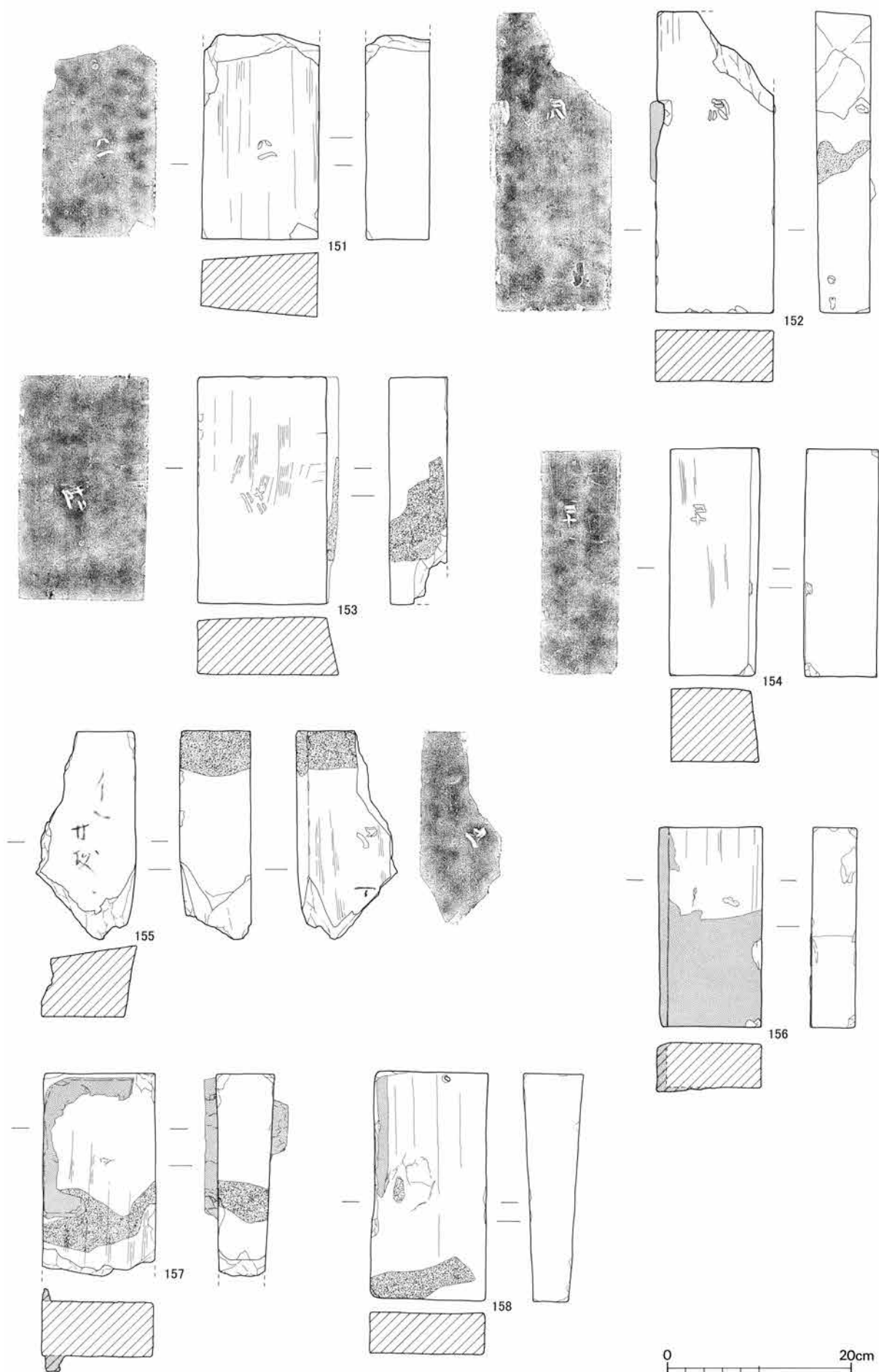


Fig.25 金森家地点 S X 01 出土遺物実測図Ⅲ (S = 1 / 6)

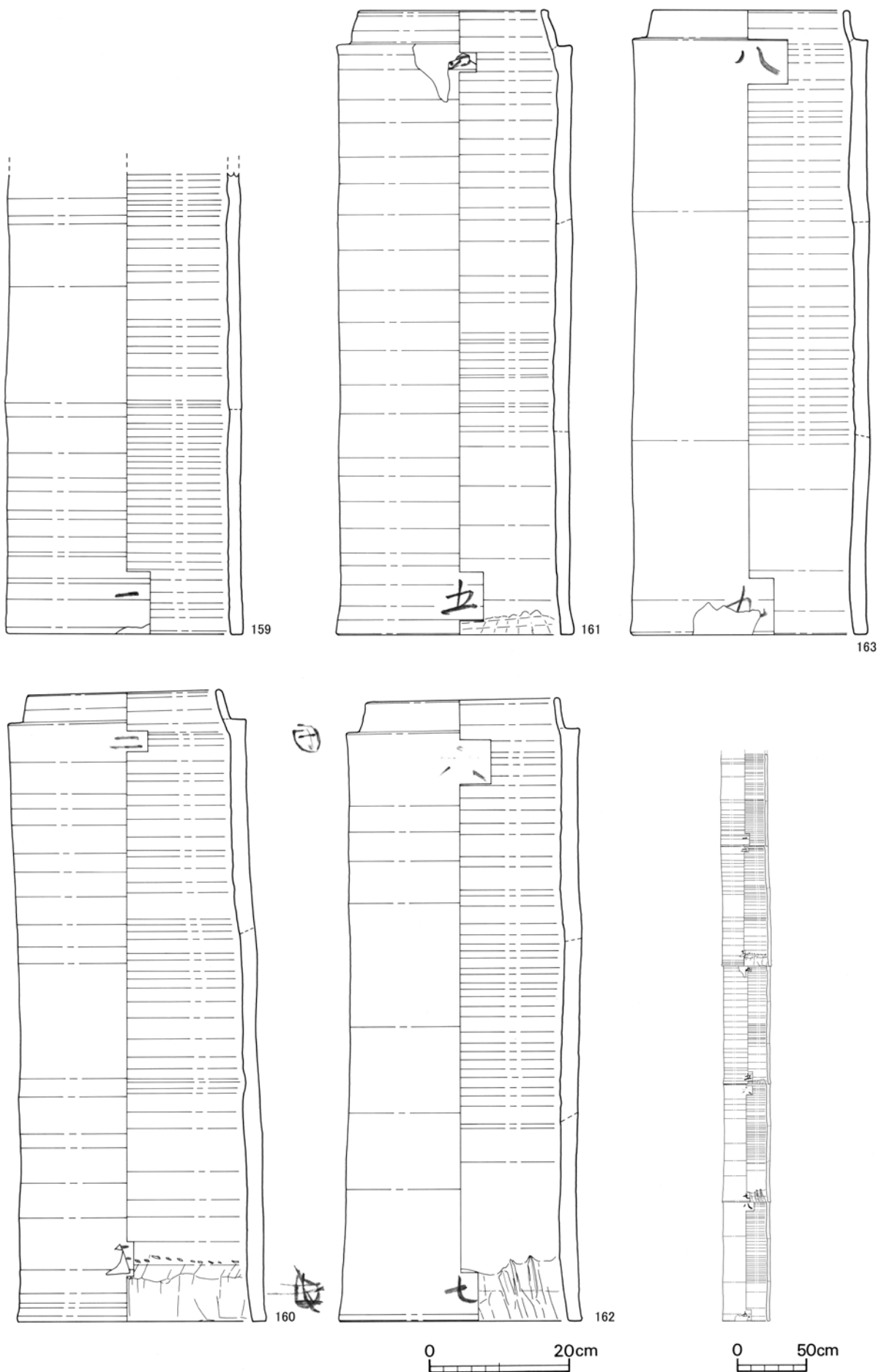


Fig.26 金森家地点 S X 01 出土遺物実測図Ⅳ (S = 1 / 8、1 / 40)

Tab. 7 金森家地点S X 01 出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
138	S X 01	肥前磁器	碗	(10.2)	(4.7)		透明釉		
139	S X 01	瀬戸	碗		(3.6)		透明釉	色絵	
140	S X 01	肥前磁器	皿		(1.9)	7.4	透明釉		
141	S X 01	肥前磁器	そば猪口		(3.4)	3.8	透明釉		
142	S X 01	瀬戸	瓶		(4.5)	(4.8)	透明釉		
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
143	S X 01	土製品	サナ	9.6	9.6	1.2	灰色	107.0	
144	S X 01	鉄製品	火格子	75.4	5.7	4.0		5380	
145	S X 01	鉄製品	火格子	76.3	6.1	4.8		5360	
146	S X 01	鉄製品	火格子	70.1	8.8	3.6		7840	
147	S X 01	鉄製品	火格子	70.0	9.0	3.5		7630	
148	S X 01	鉄製品	焚口の鉄枠	22.0	33.5	10.7		3520	
149	S X 01	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			3.0	
150	S X 01	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.7	
151	S X 01	土製品	煉瓦	22.3	12.6	7.0	浅黄橙色	3100	スス付着
152	S X 01	土製品	煉瓦	32.8	13.6	6.6	浅黄橙色	4090	スス付着 モルタル付着
153	S X 01	土製品	煉瓦	24.8	15.3	6.3	橙色	3960	スス付着
154	S X 01	土製品	煉瓦	24.8	9.6	8.0	淡黄色	3350	
155	S X 01	土製品	煉瓦	22.7	10.9	7.7	橙色	2150	スス付着 墨書
156	S X 01	土製品	煉瓦	21.8	11.3	5.3	にぶい赤褐色 灰赤色	2010	モルタル付着
157	S X 01	土製品	煉瓦	22.0	12.2	9.2	にぶい橙色	2700	スス付着 モルタル付着
158	S X 01	土製品	煉瓦	24.9	12.5	6.5	浅黄橙色	2540	スス付着 モルタル付着
159	S X 01	土製品	煙突		(66.1)	33.3	淡黄色		「一」墨書 スス付着
160	S X 01	土製品	煙突	27.3	90.9	35.3	淡黄色		「一」「二」を「二」「三」に修正墨書 スス付着
161	S X 01	土製品	煙突	27.3	89.9	35.0	淡黄色		「四」「五」墨書 スス付着
162	S X 01	土製品	煙突	27.5	89.5	34.7	淡黄色		「六」「七」墨書 スス付着
163	S X 01	土製品	煙突	(27.7)	90.1	33.6	淡黄色		「八」「九」墨書 スス付着

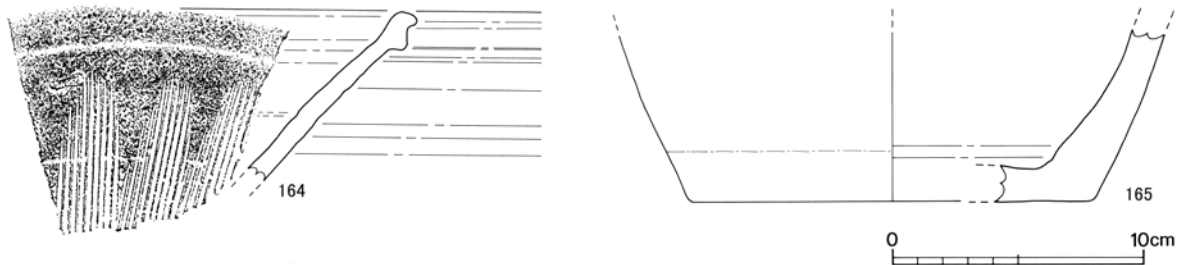


Fig.27 金森家地点S X 02 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

Tab. 8 金森家地点S X 02 出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
164	S X 02 ゴウ下層	須佐	すり鉢		(6.8)		褐釉		
165	S X 02 ゴウ下層	石見	甕		(6.8)	(16.0)	来待釉		

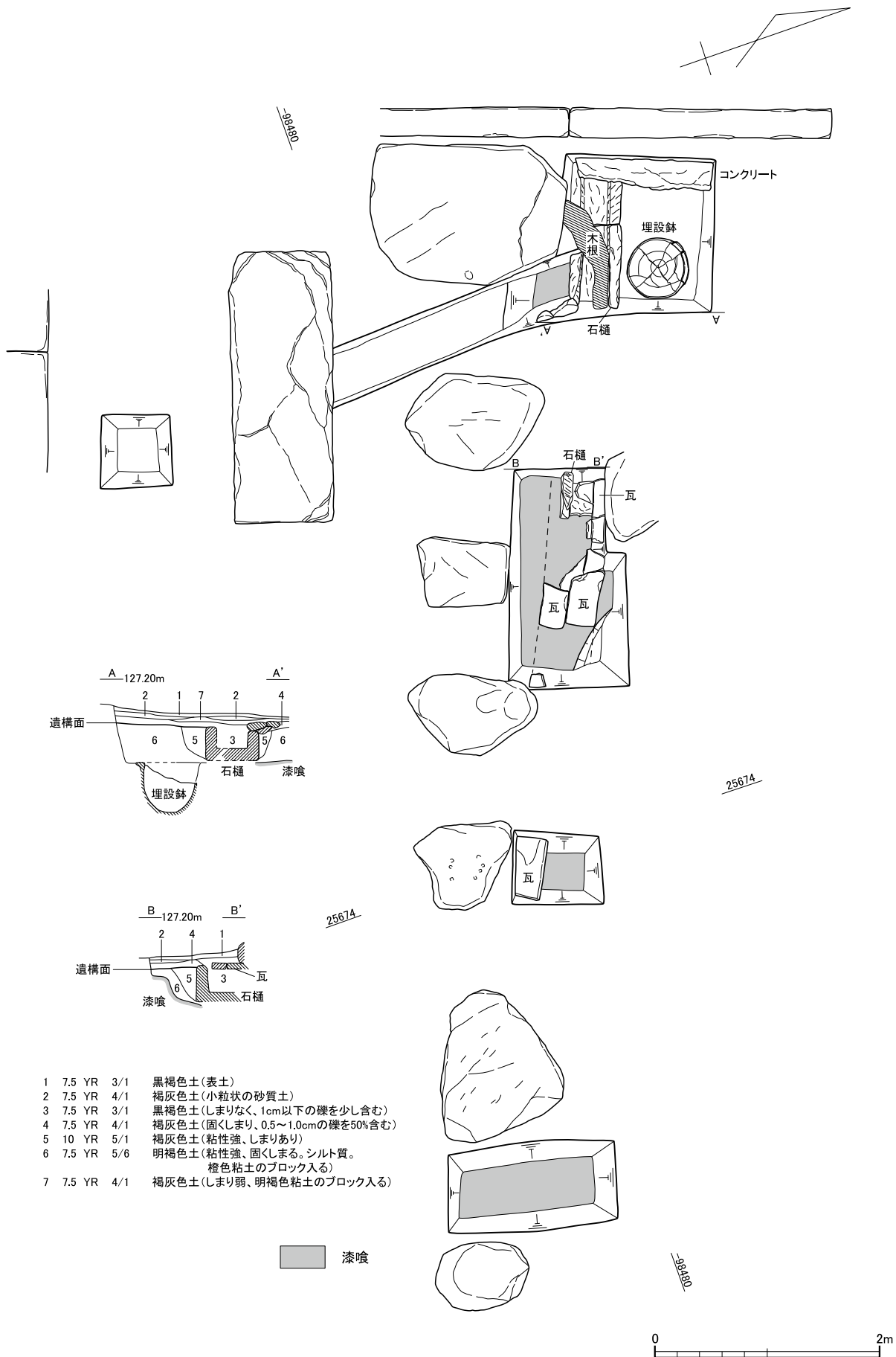
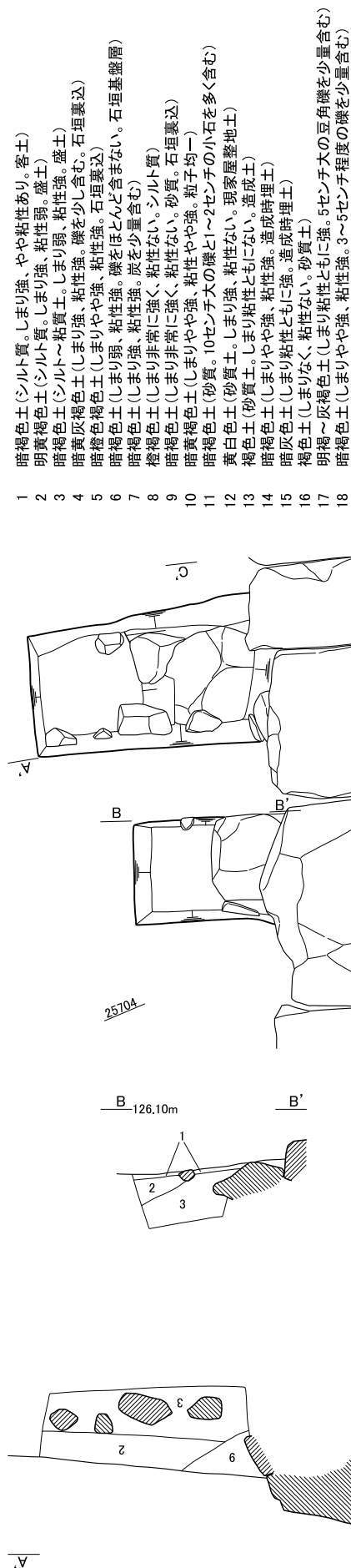


Fig.28 金森家地点庭トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 50)



ハラス
12
C—127.00m
C'—

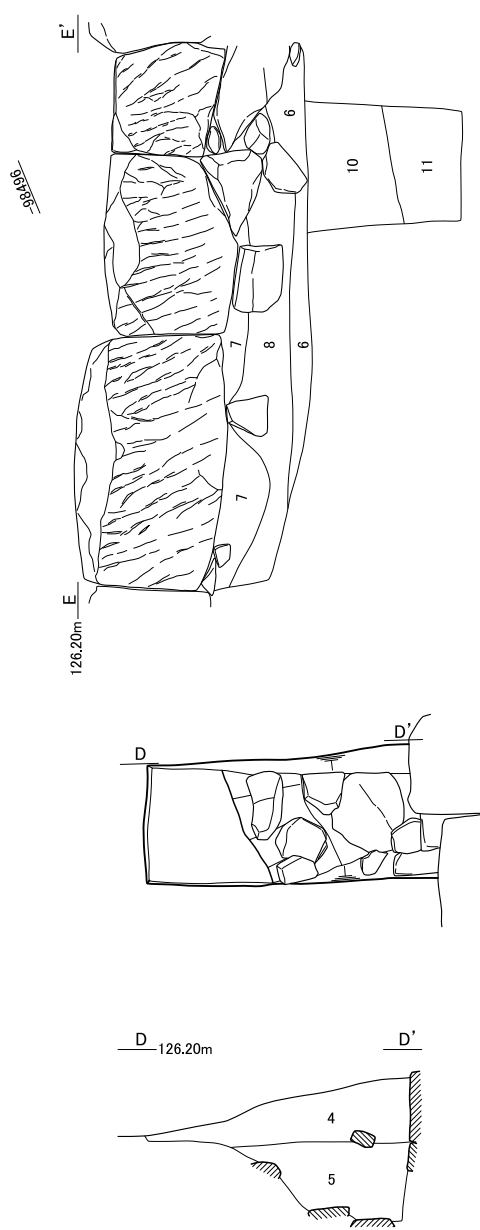


Fig.29 金森家地点裏門立会トレンチ平面図・土層断面図(S=1/40)

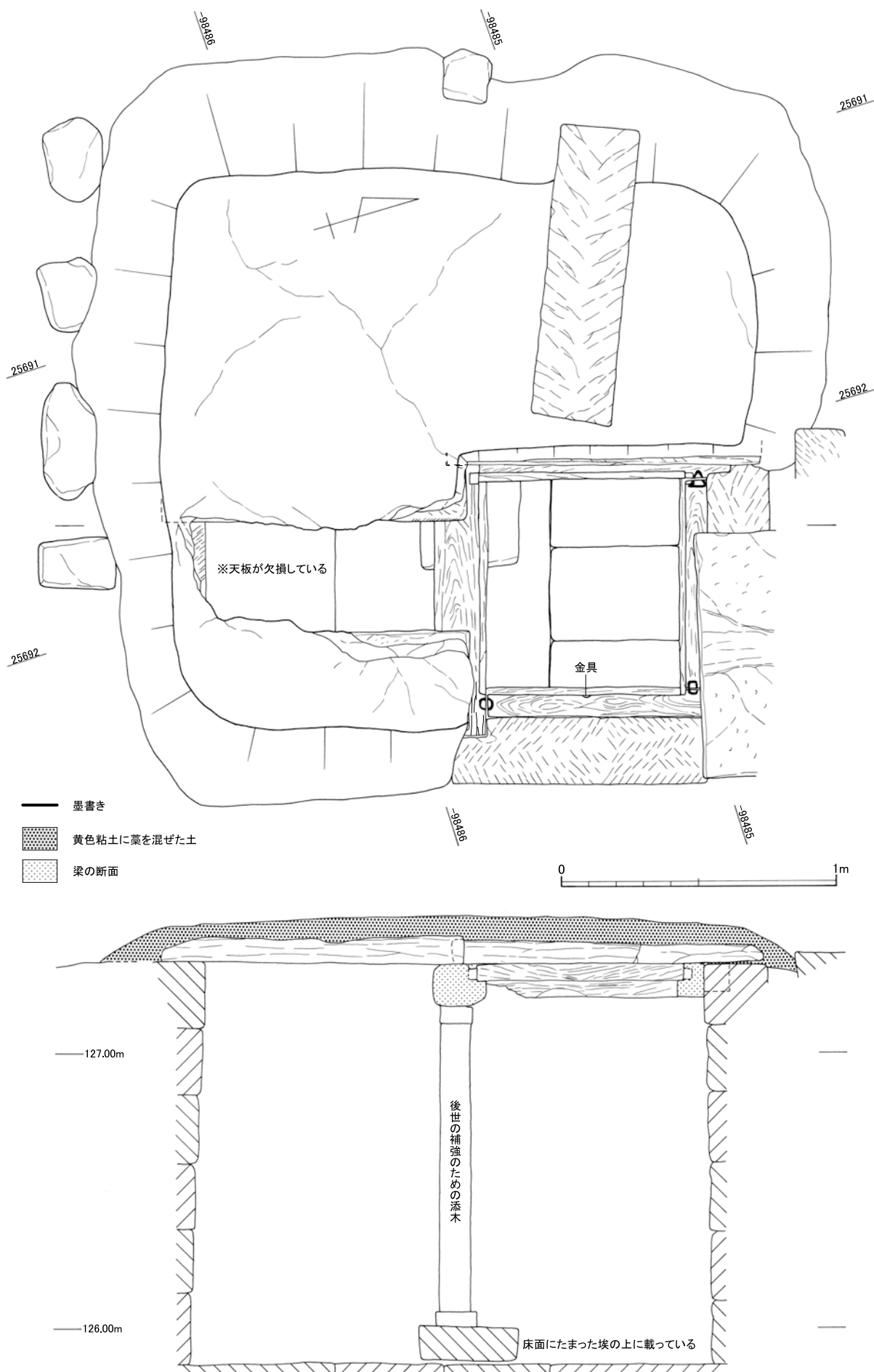


Fig.30 金森家地点 S X 03 平面図・断面図 (S = 1 / 20)

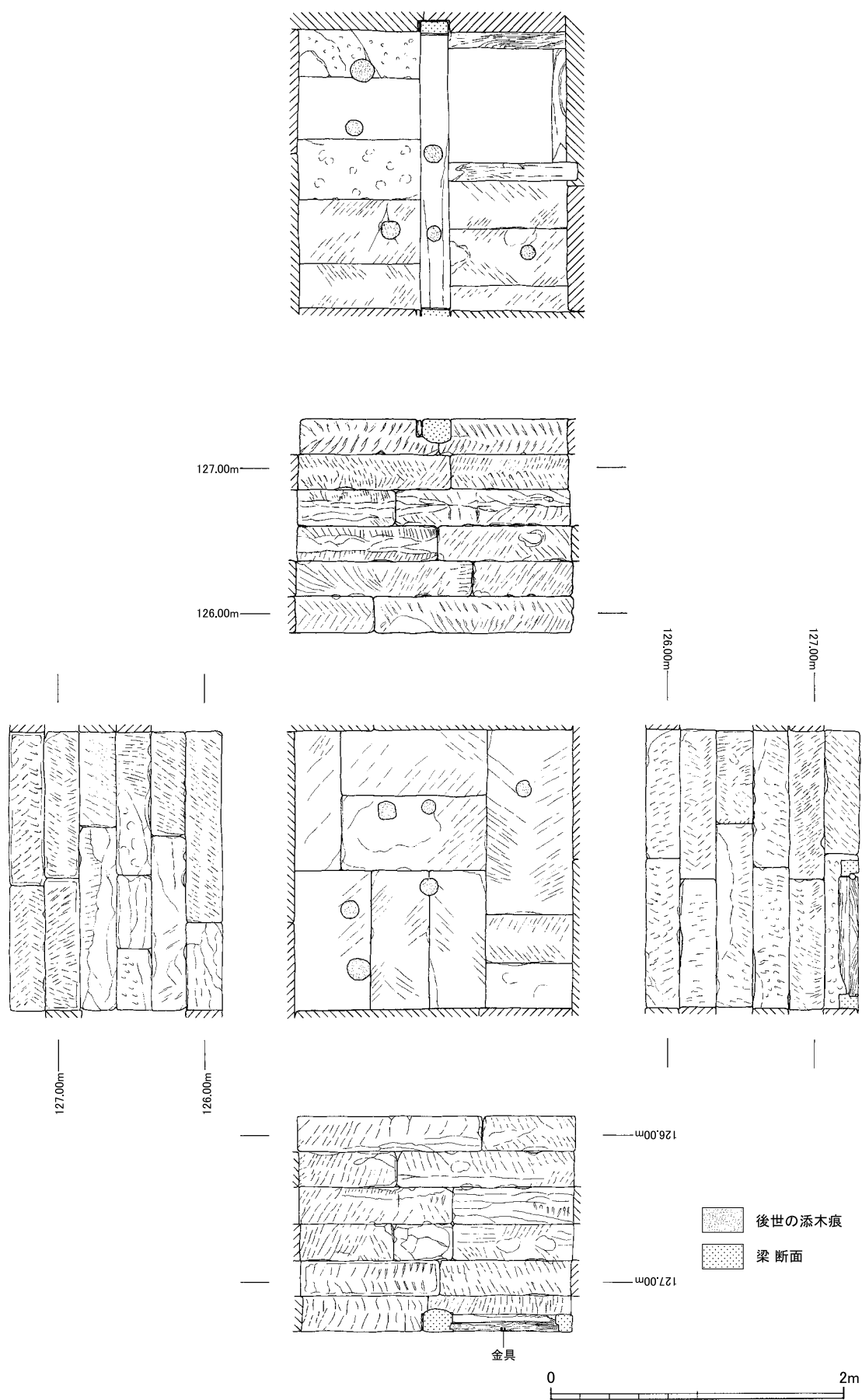


Fig.31 金森家地点S X 03 内部平面図・立面図 (S = 1 / 40)

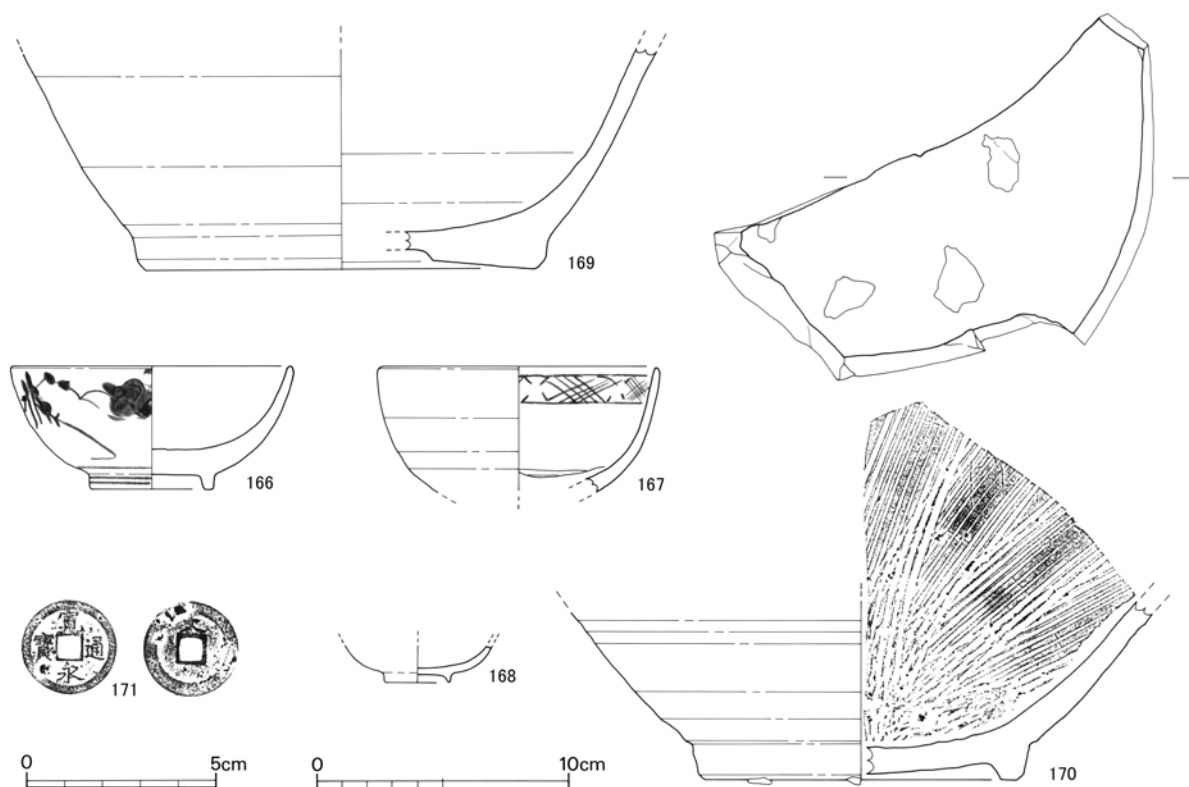


Fig.32 金森家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab. 9 金森家地点出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
166	裏門立会トレンチ	肥前磁器	碗	(11.0)	4.9	4.8	透明釉	蛇の目釉剥ぎ	
167	裏門立会トレンチ	肥前磁器	碗	(11.0)	(5.0)		(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方襷文	外青磁
168	裏門立会トレンチ	肥前磁器	小碗		(1.5)	2.6	透明釉		
169	裏門立会トレンチ	石見	甕		(8.6)	(15.4)	来待釉		
170	裏門立会トレンチ	須佐	すり鉢		(7.1)	(12.4)	サビ釉	胎土目	
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
171	裏門立会トレンチ	銭貨	寛永通寶	2.5	2.5			3.1	

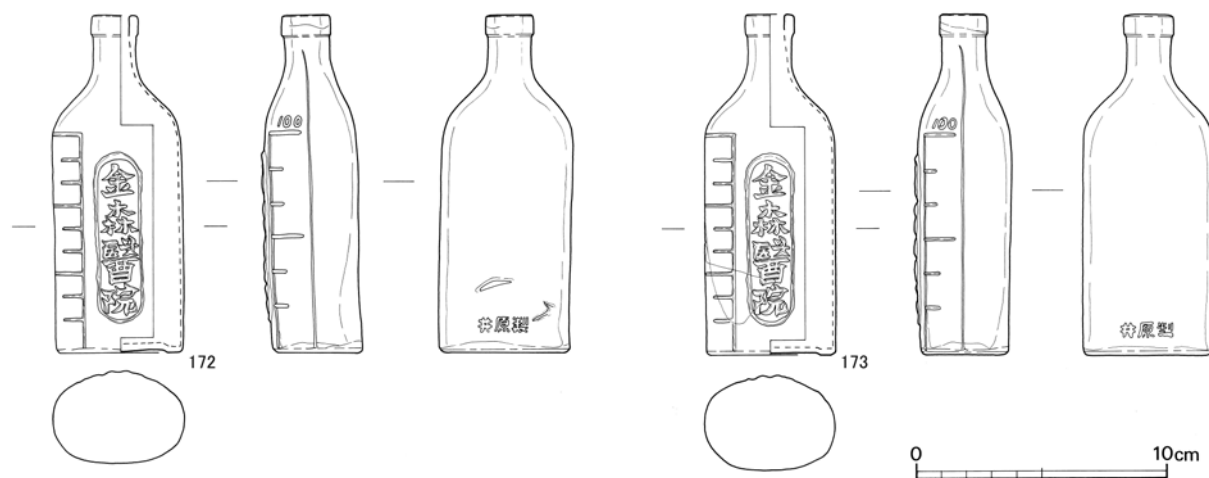


Fig.33 金森家地点 S X 03 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

Tab.10 金森家地点 S X 03 出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
172	S X 03	ガラス製品	瓶	1.9	13.5	4.8			表)「金森醫院」裏)「井原製」
173	S X 03	ガラス製品	瓶	1.8	13.4	4.7			表)「金森醫院」裏)「井原製」

第4章 佐毘売山神社地点の調査

第1節 佐毘売山神社の位置と概要 (Fig.34)

佐毘売山神社は、銀山六谷の一つである栃畑谷に位置する。鉾山の守り神である金山彦命を祭神とし、銀山町の信仰を集める神社である。現在の建物の建立年代は、棟札より文政2(1819)年であることが知られる。由緒書によると、文化12(1815)年に造営した本殿・拝殿が3年後の文化15(1818)年に焼失したため、現在の本殿・拝殿が再建されたとされる。

今回の試掘調査は、佐毘売山神社の整備事業に伴い、地下遺構の有無や土層の堆積状態、土地履歴の確認などの情報収集を目的として実施した。調査対象箇所は、佐毘売山神社境内地内における、拝殿と本殿挟まれた範囲(幣殿、神供所、物置)の地下及び本殿西側に所在する参道で、それぞれの箇所についてトレンチを設定して調査を実施した。なお、調査対象箇所は、本殿西側に所在する参道をA区、拝殿と本殿に挟まれた範囲(幣殿、神供所、物置)と本殿南西の土蔵跡をB区とする。

第2節 調査の成果

第1項 A区 (Fig.35・36)

A区の調査範囲は東西約2.7m、南北約28.8mで、本殿西側に所在する参道に相当する箇所である。標高は最高部では229.22m、最低部で225.52mである。参道は切り立った岩盤の一部を盛土し、西側に石垣を構築して土留めとしている。崩れてはいるものの、3か所に延石を配し、緩やかな階段状にしている。路面の東側には、割石を並べた側溝(SD 01)があり、雨水や東側の石垣から流れてくる水が路盤上に流れ込まないための目的とみられる。調査範囲の南端部から約7.2m北側には一部ではあるが1cm程度の円礫が敷かれた範囲があり、路面は本来玉砂利敷であったとみられる。ただし、玉砂利を敷いた面はSD 01よりも低く、第2面もしくは3面に伴う。道幅は基本的に2.2m程度で一定だが、南端から約

4.5mの範囲は約2m弱と狭くなっている。この範囲は西側の石垣も新しく積み直しており、水害などによって破損したために修復しているとみられる。

また、調査範囲においては東西方向の土層堆積状況の確認を目的として、調査範囲北半の3か所にトレンチを設定し断割を行った。調査によって、第1トレンチと第3トレンチでは現地表面以外に硬化面が2面確認できており、路面整備が何度か行われたことが窺われる。ただし、いずれのトレンチにおいても西端部では石垣の裏込めが地表面まで確認できていることから、参道西側の石垣は、現在参道として機能している面が整備された際に構築されたと判断できる。

【SD 01】 (Fig.35・36)

割石を積んで構築された溝で、A区の東側から検出された。底面と西壁には石が積まれ、東壁は岩盤を利用した三面水路である。一部途切れてはいるものの、A区の北端部からはじまり、玉砂利敷となっている箇所まで続いている。積石は、岩盤付近は低く、A区中央付近は割合高くなっている。北端部には、西壁でも岩盤を削って溝に加工している部分もある。

第2項 B区 (Fig.37・38)

B区は、拝殿と本殿に挟まれた部分(第1トレンチ)と、本殿の南東に位置する土蔵跡(第2トレンチ)である。

拝殿と本殿の間の床下には岩盤があり、その左右に石垣を構築している。石垣の規模は、正面から向かって左側が約3.5m、右側が約4.2mと、右側が70cm程広がっている。石垣の天端は標高約235.3mで、石垣の高さは天端の標高に合わせて1.2～1.4mとなっている。第1トレンチは、この岩盤と、その左右に位置する石垣の前面に設定した。トレンチの長軸は岩盤と石垣の範囲と同程度で11.7m、短軸は80cmとした。第1トレンチにはほとんど土が堆積しておらず、表面

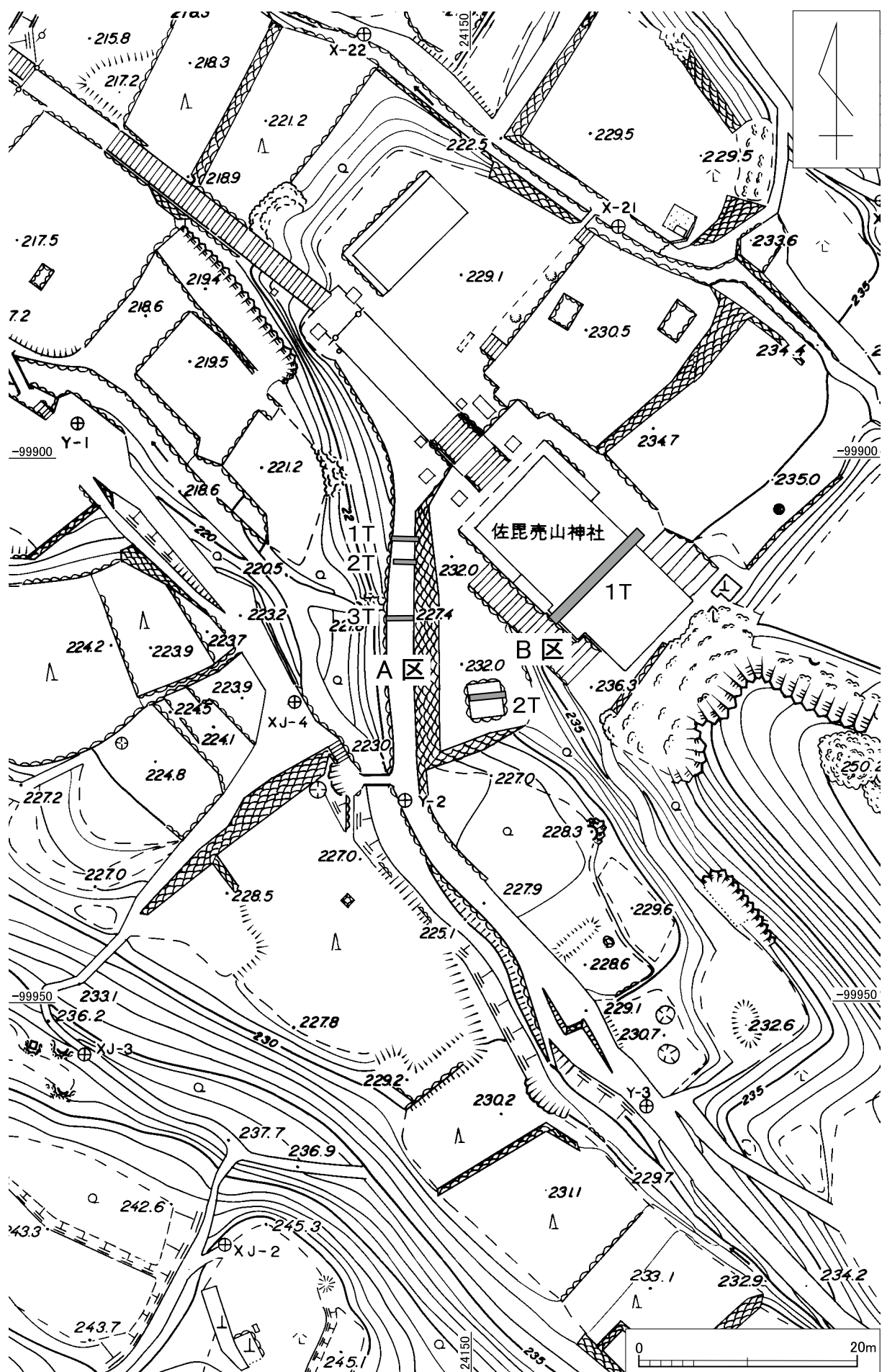


Fig.34 佐毘売山神社地点調査区配置図 (S = 1 / 500)

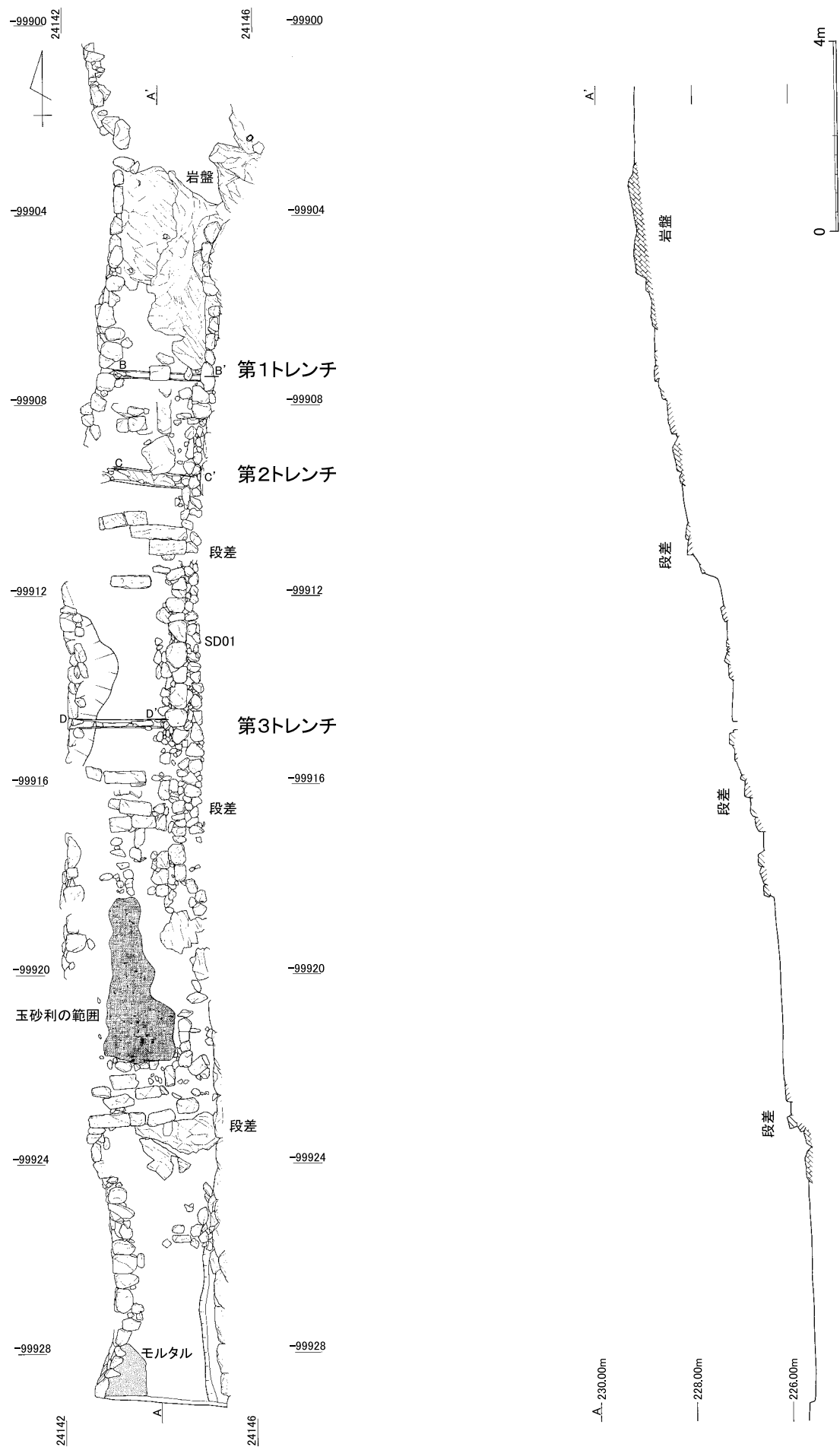
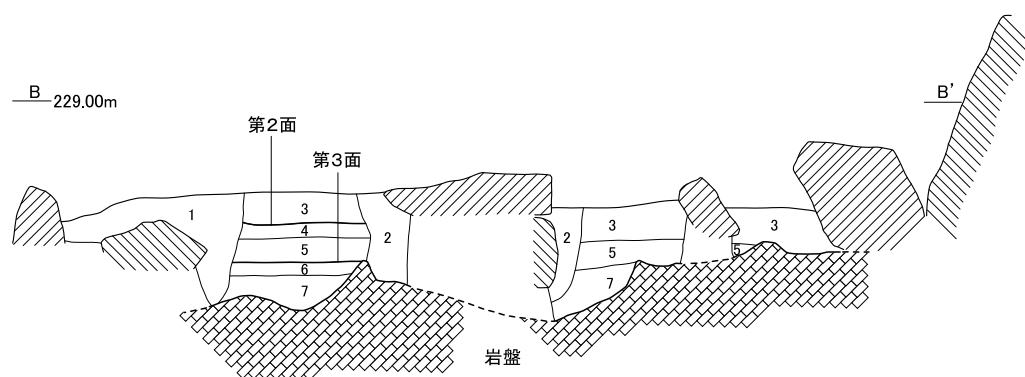
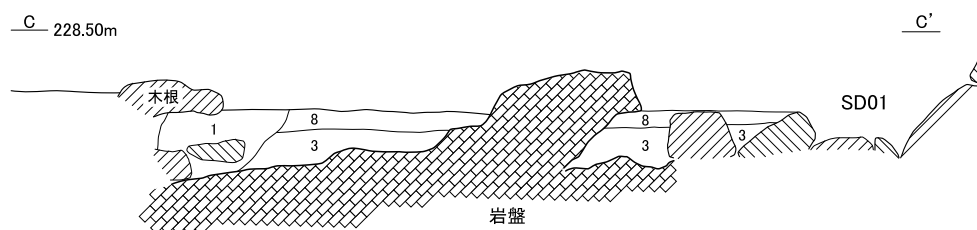


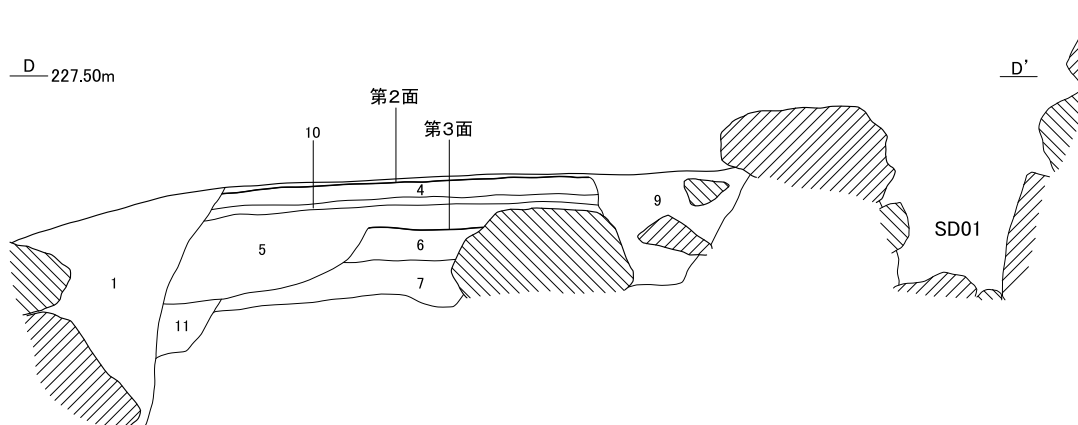
Fig.35 佐毘売山神社地点A区平面図・断面図 (S = 1 / 120)



第1トレンチ 土層断面図(S=1:20)



第2トレンチ 土層断面図(S=1:20)



第3トレンチ 土層断面図(S=1:20)

- | | | | | |
|----|-----|----|-----|--|
| 1 | 10 | YR | 2/2 | 黒褐色土(しまりない、粘性弱。石垣裏込) |
| 2 | 10 | YR | 3/3 | 暗褐色土(よくしまり、粘性強) |
| 3 | 2.5 | Y | 5/3 | 黄褐色土(よくしまり、硬化。5ミリ大の小礫を10%含む) |
| 4 | 2.5 | Y | 7/1 | 灰白色土(よくしまり、粘性弱。やや砂質。第2面) |
| 5 | 2.5 | Y | 7/3 | 浅黄色土(よくしまり、粘性弱。5センチ大の礫を5%含む) |
| 6 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(よくしまり、粘性弱。2.5Y 7/1灰白色砂質土をブロック状に含む。第3面) |
| 7 | 2.5 | Y | 3/3 | 暗オリーブ褐色土(よくしまり、粘性弱。砂質) |
| 8 | 2.5 | Y | 4/1 | 黄灰色土(しまりなく、やわらかい土) |
| 9 | 7.5 | YR | 4/1 | 褐灰色土(固くしまり、粘性強。5～10ミリ大の小礫を50%以上含む) |
| 10 | 2.5 | Y | 6/3 | にぶい黄色土(ややしまり、粘性弱。2ミリ大の粒子を含む) |
| 11 | 10 | YR | 4/2 | 灰黄褐色土(ややしまり、粘性強) |

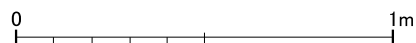


Fig.36 佐毘売山神社地点A区第1・2・3トレンチ土層断面図 (S = 1 / 20)

を軽く削る程度で硬化面が検出された。この硬化面では一部に煤が残っており、文化 15(1818) 年に発生した大火の痕跡の可能性はある。また、一部にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、地表面から 5 cm に満たない深さで岩盤が検出された。また、拝殿の礎石は岩盤に直接据えられていることが確認された。トレンチ南端から約 1.1 m の箇所には、石垣に垂直方向の割石が 2 つ並んでいるほか、その南側の堆積土には小礫が含まれているなど、トレンチ内の他の場所とは様相が異なっていた。後述するが、同じ箇所では石垣の積み直しと南への拡張も確認できており、文化 15(1818) 年に発生した火災ののちに境内地を拡張している可能性がある。

石垣は、丁寧に加工した切石を積み上げている。積石は隙間がない程丁寧に加工され、表面には鑿痕も残っている。石垣には被熱痕や、煤の付着が認められる箇所があり、火災の痕跡と判断できる。特に、南半では被熱痕が顕著に観察できる。前段でもふれたが、この石垣の西端から約 1.1 ～ 3.1 m の範囲では、他の箇所とは積石や積方の様子が異なるほか、下面も岩盤の上に盛土をして底面としている。また、被熱痕や煤の付着もほとんど見られない。トレンチでの調査状況などを踏まえると、この範囲については先述のように火災後に拡張されたと判断できる。

【S B 01】(Fig.38)

S B 01 は、本殿・拝殿の南西に位置する礎石建物跡である。本殿の脇には土蔵が所在していたとの記録があり、それに該当する可能性がある。規模は一辺が約 3 m の正方形で、北壁は一部を除いて礎石が隙間なく並んでいるが、南壁と西壁には隙間がある。調査着手時には礎石が地表面上に露出しており、規模と礎石配置は確認できていた。

そのため、まずは周辺の清掃を実施して残存状況を確認し、中央部に幅 30cm のトレンチを東西方向に設定して調査を実施した。調査により、地表面から深さ 9 cm 程度で礎石を据えた面が検出された。建物の内部からは遺構は検出されなかった。記録では文化 15(1818) 年の大火によって土蔵も焼失したとされているが、周囲に比熱痕や煤などは認められなかった。

第 3 項 出土遺物 (Fig.39、Tab.11)

出土遺物としては、陶磁器類や漆碗、銅製品がある。174 ～ 176 は土師質土器の皿で、いずれも底面に糸切の痕跡がある。175 は口縁の一部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたとみられる。177 ～ 179・181・182 は肥前磁器で、幕末頃の資料がまとまって出土している。177 は碗で、見込みには手描きによる植物のような文様がある。178 は型打による八角鉢で、有田焼の可能性はある。一部に焼継の痕跡が認められる。179 は瓶で、外面には植物が描かれている。181 は端反碗の蓋で、内面には「寿」の文字がある。182 は蓋で、断面には被熱痕があり、火災時の痕跡かもしれない。183 は石見焼の皿である。184 は色絵の瓶で、体部には牡丹や桜のような花が描かれている。

185 は漆碗で、内外とも朱が塗られている。186 は銅製の板で、4 か所に孔が開いている。いずれの孔も片面から釘や鑿のようなものを打ち当てて開けている。用途は不明であるが、何かに打ち付けて補強するための部材かもしれない。187 は薄い銅製板である。幅 2 cm 程度の板の片側を 5 mm 程度折り曲げて幅 1.5 ～ 1.7 cm の板としている。現状は、「く」の字形に曲がっている。板の上下二か所に小さい孔を開けており、細い釘などで何かに止めていた可能性が考えられる。

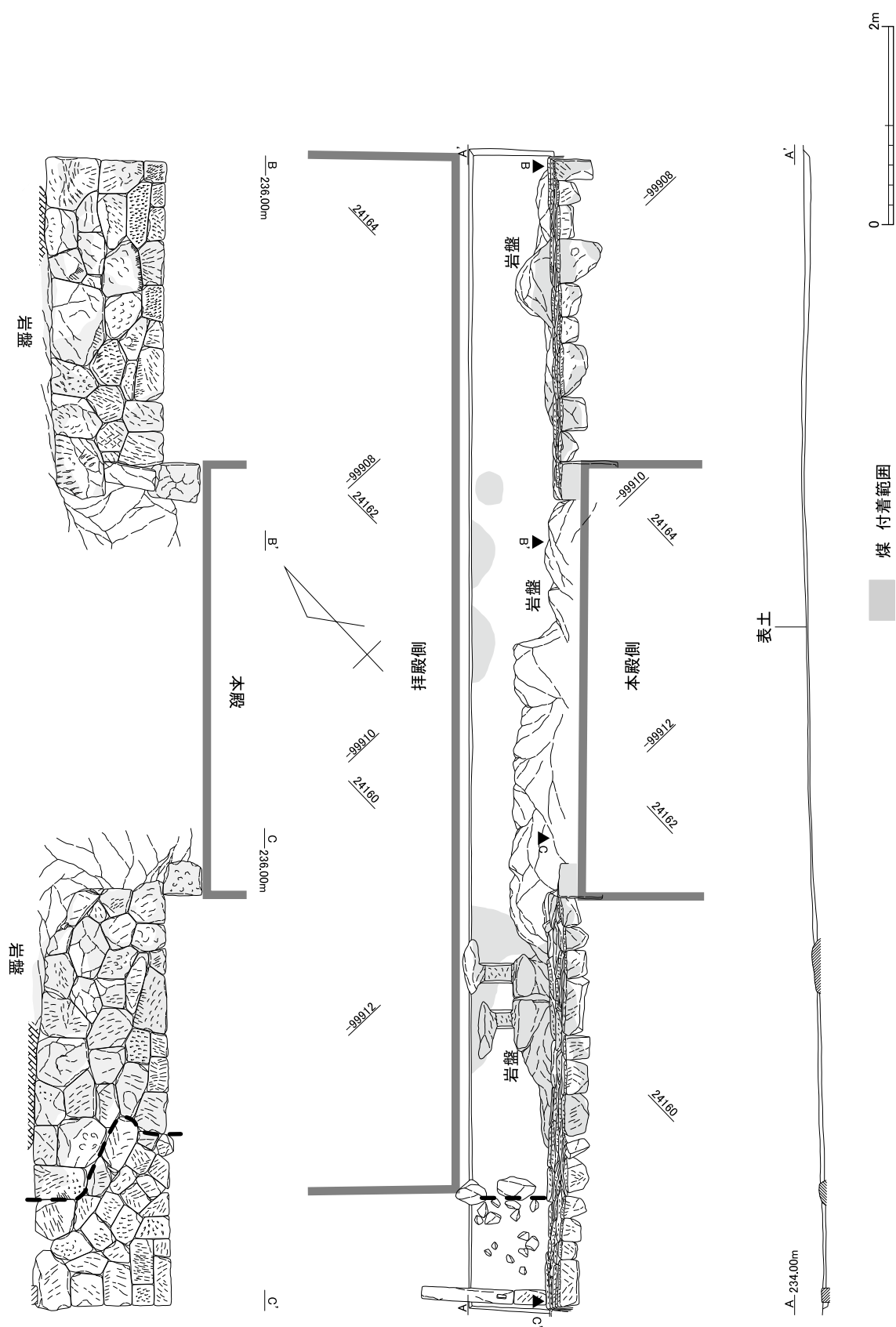


Fig.37 佐毘売山神社地点B区第1トレンチ平面図・断面図・立面図 (S = 1 / 60)

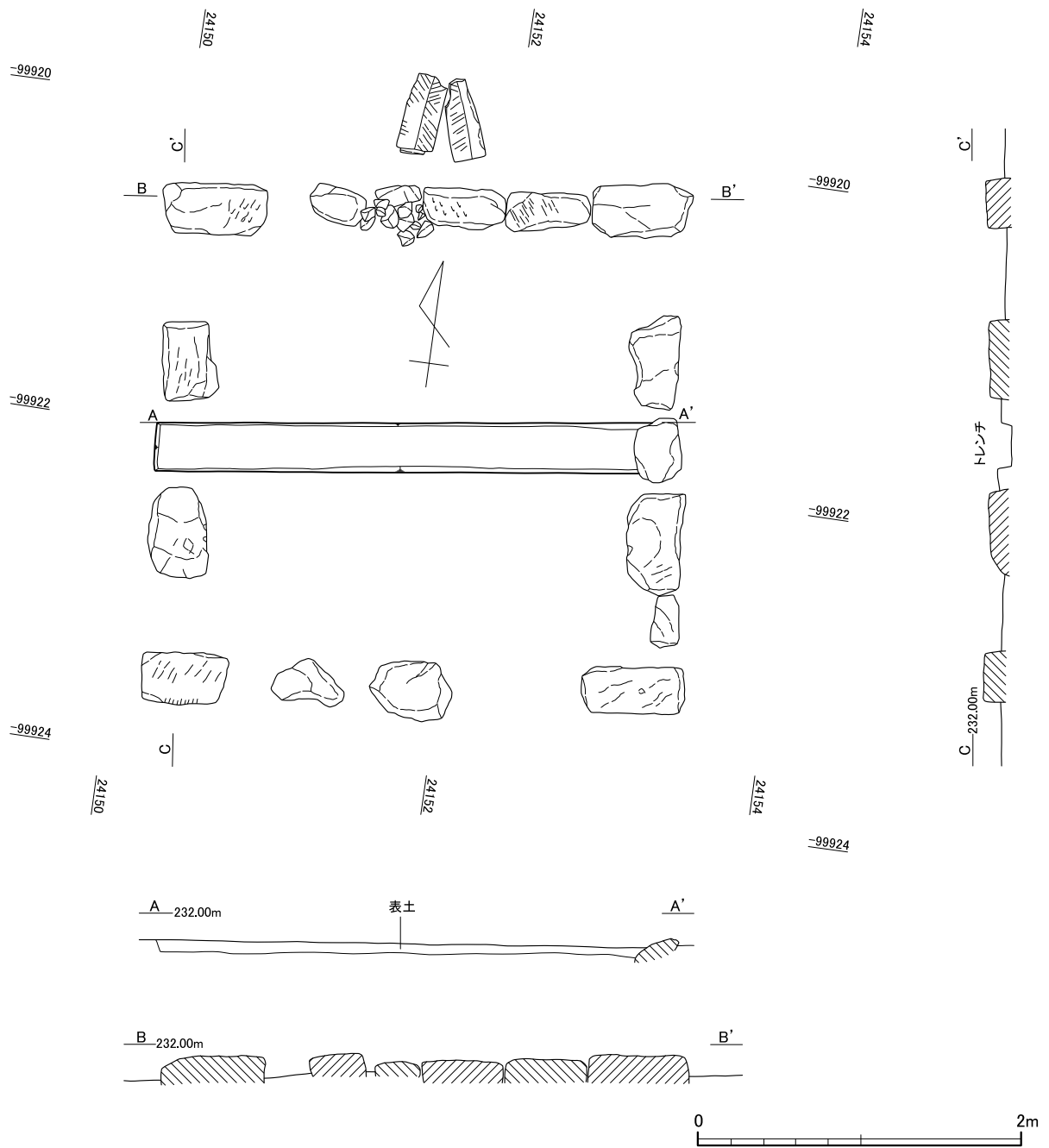


Fig.38 佐毘売山神社地点B区第2トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 40)

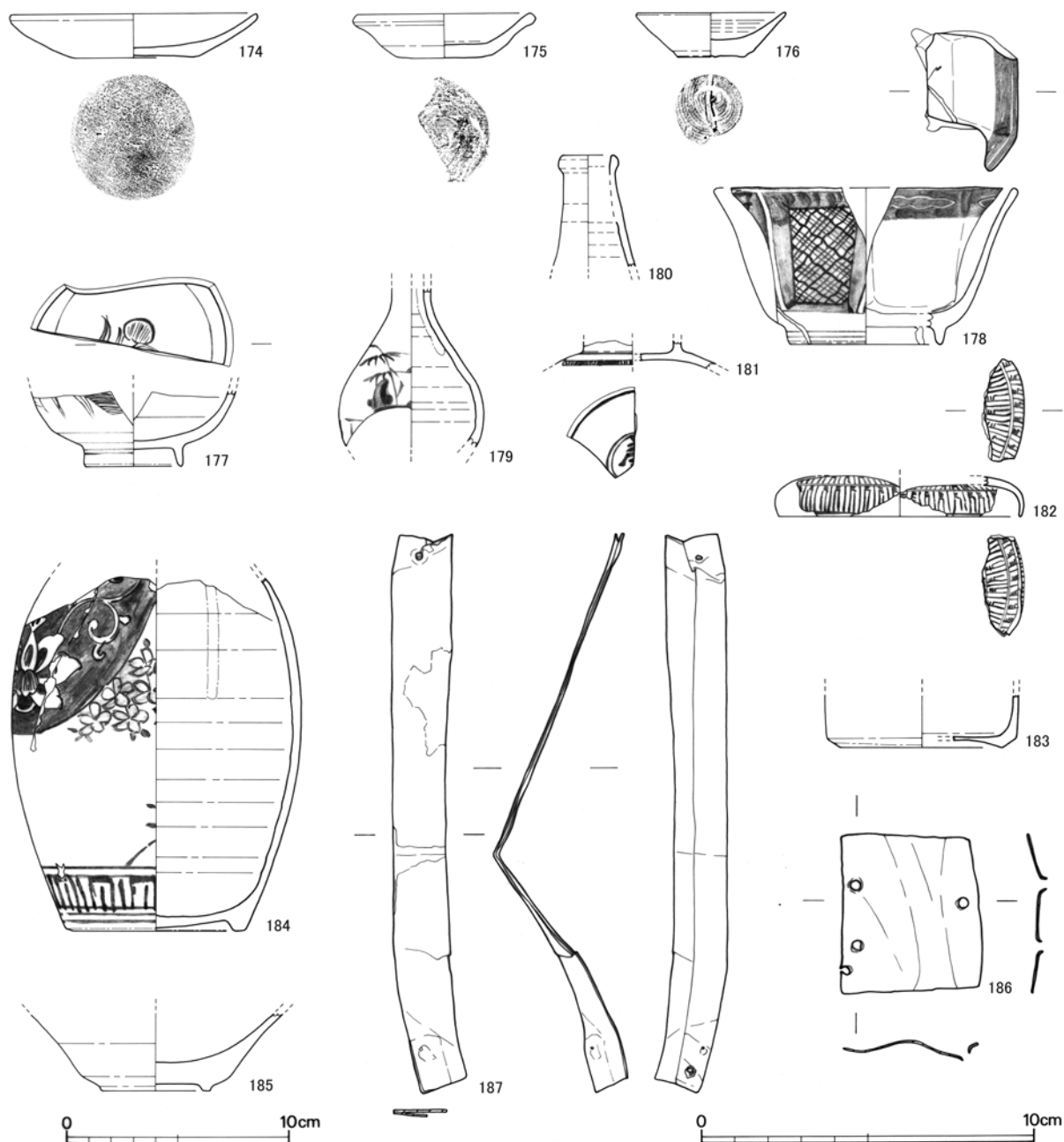


Fig.39 佐毘売山神社地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab.11 佐毘売山神社地点出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
174	A区 表採	土師質土器	皿	(11.1)	2.0	5.5	淡黄色		
175	A区 表採	土師質土器	皿	(8.0)	2.0	(4.3)	橙色		
176	A区 表採	土師質土器	皿	6.6	2.0	3.0	灰白色		
177	A区 表採	肥前磁器	碗		(3.4)	(4.2)	透明釉		火を受ける
178	A区 表採	肥前磁器	鉢	(13.4)	7.1	(6.8)	透明釉		焼継
179	A区 表採	肥前磁器	瓶		(7.2)		透明釉		火を受ける
180	A区 表採	不明陶器	瓶	2.4	(5.0)		長石釉		
181	A区 表土	肥前磁器	蓋		(1.3)		透明釉		
182	A区 溝下層	肥前磁器	蓋	(10.8)	(1.8)		透明釉		
183	A区 溝下層	石見	瓶		(2.4)	(7.3)	長石釉		
184	B区第1トレンチ遺構面直上	肥前磁器	瓶		(15.9)	(7.5)	透明釉	色絵	
185	B区第1トレンチ表土	木製品	椀		(3.5)	5.0	朱漆		
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
186	A区 表土	金属製品	銅板	4.8	4.3	0.6		6.5	屋根材か
187	B区第2トレンチ整地土直上	銅製品	不明	16.7	2.2	4.0		15.2	

第5章 本年度の試掘・立会調査

第1節 平成30年度・令和元年度の調査地点 (Fig.15)

史跡範囲内及び伝建地区内においては、地面の掘削を伴う現状変更行為に対して、小規模な場合には試掘調査もしくは工事立会を実施している。平成30年度には8か所、令和元年度には7か所で実施した。試掘調査もしくは工事立会によって遺構等が検出された際には記録作業を行うとともに、工事対象箇所の変更などの対応をしている。本章では、平成30年度と令和元年度に実施した試掘調査・工事立会の中で、遺構が検出された吉岡家地点と荒田家地点について報告する。なお、金森家地点で実施した浄化槽埋設に伴う試掘調査の成果については、第3章にて報告した。

第2節 吉岡家地点の調査 (Fig.40)

吉岡家地点は、銀山川の東を通る市道大森線の東側で、大森銀山伝建地区内でも県道地区に所在する。浄化槽の埋設工事に伴って工事立会を行ったところ、遺構が検出された。掘削箇所の移動も提案したが、敷地内に浄化槽を埋設可能な場所がなかったため、検出遺構は記録保存とした。

掘削範囲は南北約1.8m、東西約1.6mで、地表面から約50cmで石敷遺構が検出された。検出された石敷遺構は、矩形に加工された石を並べた

もので、上面も平らに加工されている。工事対象範囲では11枚が検出されたが、範囲外にも続いている。埋土からは赤瓦の破片が数点出土したのみで、遺物はほとんど出土しなかった。また、埋土にはビニール片なども含まれていたことから、検出された石敷遺構は近年まで機能していたとみられる。

第3節 荒田家地点の調査 (Fig.41・42)

第1項 検出遺構 (Fig.41)

荒田家地点は大森銀山伝建地区内の昭和区で、表通りである大森市街線の西側に所在する。吉岡家地点と同じく、浄化槽の埋設工事に伴って工事立会を行った際に、遺構が検出された。

掘削範囲は長辺が約2.5m、短辺が約1.5mで、地表面から約50cmで石列が検出された。石列は現在の建物に平行しており、検出された長さは約1.9mである。石材はいずれも上面を平らに薄く加工しているものの、平面形は整っていない。建物の基礎とするには脆弱であるため、敷地の境界と考えられる。

第2項 出土遺物 (Fig.42、Tab12)

掘削範囲からは陶磁器を中心に、多くの遺物が出土した。ただし、全ての遺物が、表土と石列の

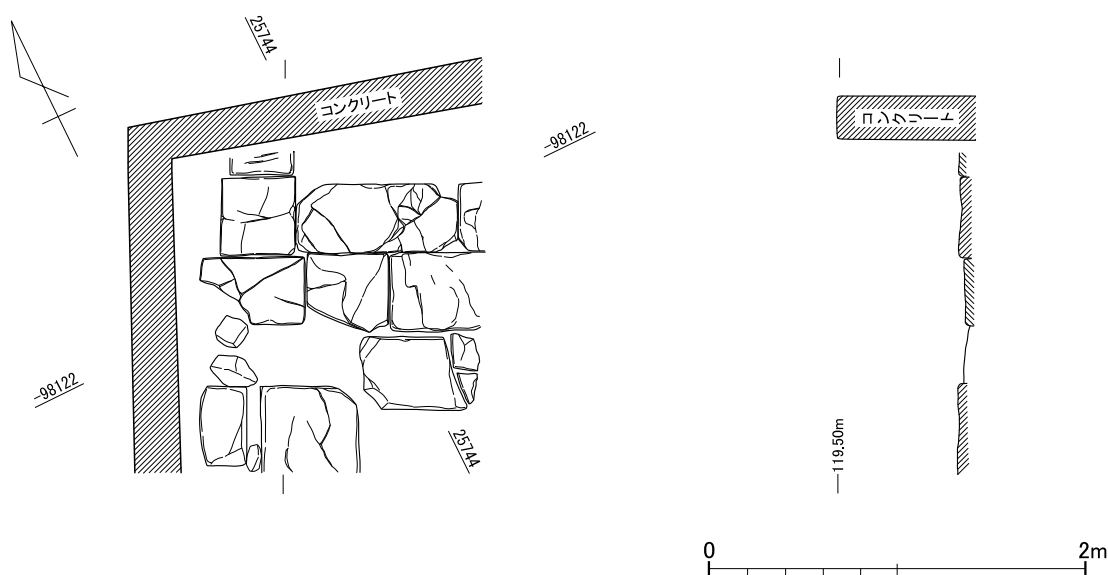


Fig.40 吉岡家地点遺構平面図・断面図 (S = 1 / 40)

埋土に相当する第1・2層から出土したもので、それよりも下層からは遺物が出土しなかった。

188～202は肥前磁器である。191～194・200の外青磁や、201・202の広東碗の蓋など、江戸時代後期～幕末ころのものがまとまって出土している。特に、202の内面には松竹梅を環状に配した文様が描かれており、19世紀初頭の資料と判断できる。また、萩焼の可能性のある

212や、須佐焼のすり鉢(214)など、地方の焼物も出土している。

出土した土師質土器の内、205と206には口縁部周辺にススが付着しており、灯明皿として使用されていたとみられる。

215は銅製キセルの雁首で、脂返しがほとんど屈曲しない新しい型式の資料である。

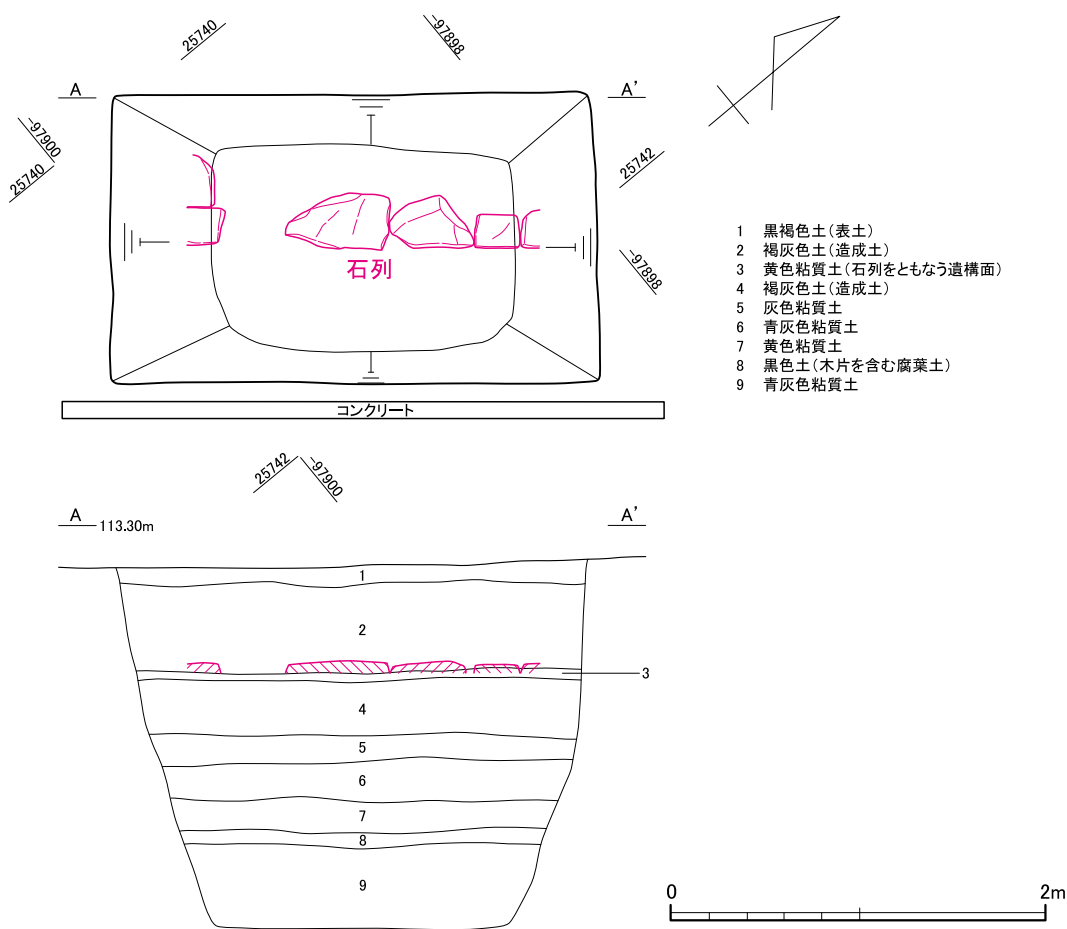


Fig.41 荒田家地点トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

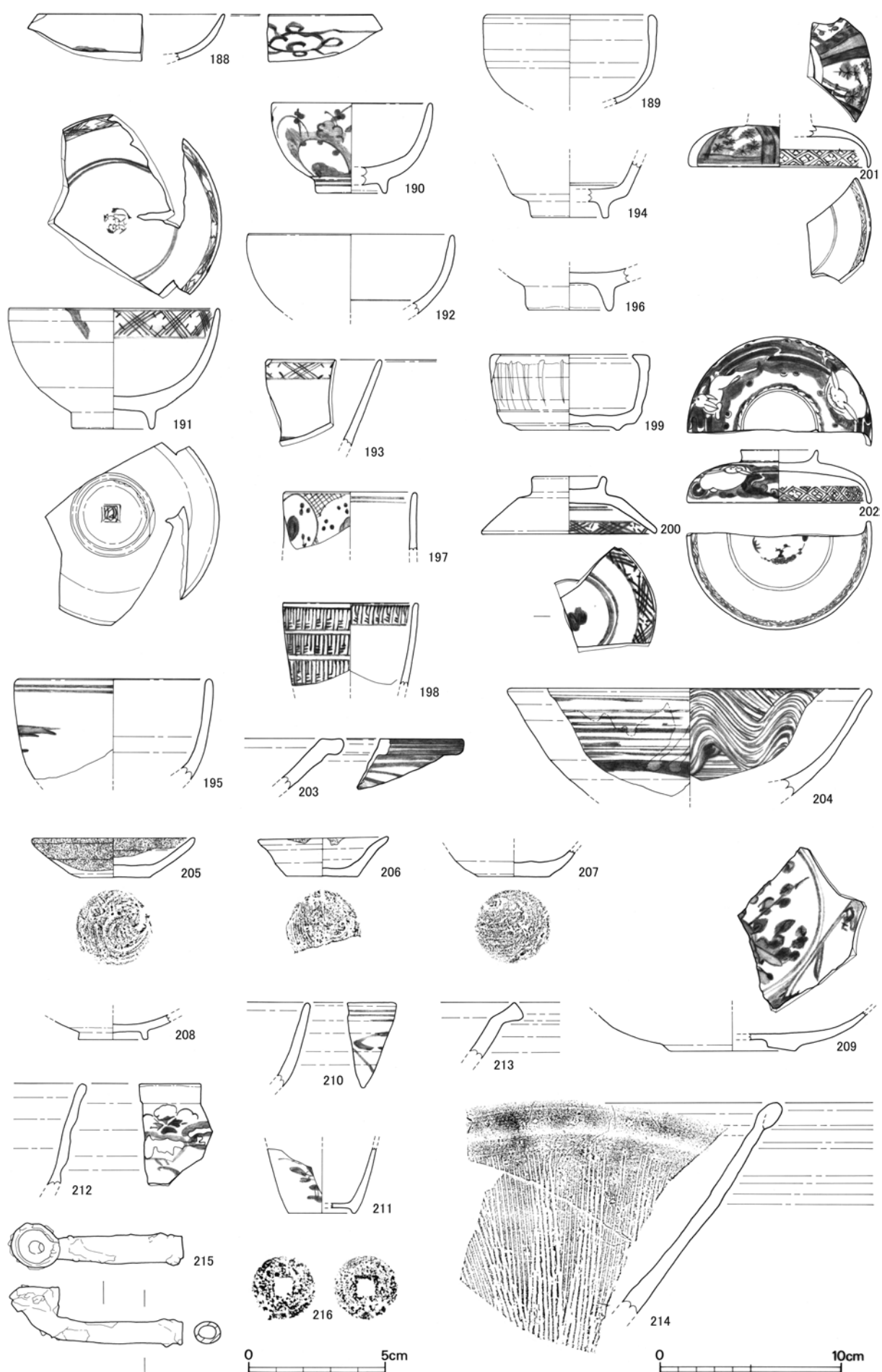


Fig.42 荒田家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab.12 荒田家地点出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色調・釉葉	成形・調 整・文様	備 考
				口 径	器 高	底 径			
188	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	皿		(2.6)		透明釉		
189	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗	(9.2)	(4.9)		透明釉		
190	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗	(8.7)	5.0	(3.7)	透明釉		
191	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗	(11.5)	6.7	4.4	(内)透明釉 (外)青磁釉	四方禪文 外青磁	
192	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗	(11.2)	(4.4)		(内)透明釉 (外)青磁釉	外青磁	
193	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗		(4.8)		(内)透明釉 (外)青磁釉	四方禪文 外青磁	
194	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗		(3.1)	(4.1)	(内)透明釉 (外)青磁釉	外青磁	
195	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗	(10.4)	(5.6)		透明釉		
196	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗		(2.4)	4.6	青磁釉	陶胎染付	
197	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	猪口	(7.3)	(3.2)		透明釉		
198	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	猪口	(7.3)	(4.6)		透明釉		
199	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	香炉	(8.4)	4.2	(5.6)	青磁釉	蛇の目高台	
200	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	蓋	(9.4)	3.2		(内)透明釉 (外)青磁釉	四方禪文 外青磁	
201	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	蓋	(9.7)	(2.3)		透明釉	四方禪文	
202	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	蓋	10.0	3.0	つまみ径 (3.8)	透明釉		
203	1～2層(表土・盛土)	肥前陶器	鉢		(2.8)		白濁釉 透明釉	白土化粧	
204	1～2層(表土・盛土)	肥前陶器	皿	(19.6)	(6.0)		白濁釉 長石釉	白土化粧	
205	1～2層(表土・盛土)	土師質土器	皿	9.0	2.2	4.0	にぶい橙色		スス付着
206	1～2層(表土・盛土)	土師質土器	皿	7.2	2.2	4.0	橙色		スス付着
207	1～2層(表土・盛土)	土師質土器	皿		(1.5)	4.0	浅黄橙色		
208	1～2層(表土・盛土)	肥前陶器	碗		(1.4)	3.8	長石釉		
209	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	皿		(2.2)	(7.0)	透明釉	蛇の目高台	
210	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	碗		(4.7)		透明釉	陶胎染付	
211	1～2層(表土・盛土)	肥前磁器	猪口		(3.6)	(3.7)	透明釉		
212	1～2層(表土・盛土)	萩か	碗		(5.6)		長石釉	赤絵	
213	1～2層(表土・盛土)	肥前陶器?	鉢		(3.1)		褐釉		
214	1～2層(表土・盛土)	須佐	すり鉢		(11.6)		サビ釉		
挿図 番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)			色 調	重量 (g)	備 考
				現存長	現存幅	現存厚			
215	1～2層(表土・盛土)	銅製品	キセル (吸口)	6.4	1.7	2.3		13.1	
216	1～2層(表土・盛土)	銭貨	寛永通寶?	2.3	2.3			2.8	

第6章 総括

第1節 仙ノ山地区

平成30年度・令和元年度には、仙ノ山地区の発掘調査を実施した。発掘調査によって、仙ノ山山頂付近から北側の平坦面における地形改変の様子や、かつての景観、利用された時期などに関する情報が得られた。

A区では、土坑や溝状遺構、岩盤加工遺構、基壇状遺構などが検出され、当地における土地利用の状況が明らかとなった。ただし、いずれのトレンチでも、礎石や柱穴などの建物に関連する遺構や、石列などの地割に関連する遺構は検出されなかった。そのため、A区一帯は、建物が並ぶような都市的な空間ではなかったと判断できる。また、基壇状遺構が検出されたことにより、付近に墓所があったことも想定される。各トレンチでは、貿易陶磁器や、九州陶磁編年におけるⅠ・Ⅱ期に相当する肥前陶磁など、16世紀末から17世紀初頭の遺物がまとまって出土した。ただし、第4・第5トレンチでは複数の遺構面が確認できており、第1面からは17世紀後半の資料も出土していることから、一部は江戸時代前半くらいまでは存続していたようである。江戸時代後半に比定できる資料は少なく、当地が銀山開発の早い段階に整備・利用され、その後はほとんど利用されていなかったとする従来の見解が裏付けられた。

仙ノ山北の尾根上に設定したB・C区では、地山の上に盛土をして平坦面としている様相が確認された。仙ノ山の東側に点在する他の平坦面も、同様に形成されている可能性が高く、大規模な地形改変が行われていたことが想像される。ただし、B・C区に設定したいずれのトレンチからも、遺構は検出されなかったため、具体的な利用状況を明らかとすることはできなかった。

仙ノ山山頂部には、割合広い平坦地が広がっており、現地踏査の際には段のような地形も確認されていた。そのため、D区として調査に着手した当初は、山頂を平坦に加工した痕跡や、櫓などの

施設の検出が期待されていた。しかし、調査によって、山頂部は自然地形に改変が加えられてはおらず、城郭に関連する施設は検出されなかった。また、岩盤への掘り込みが検出されたものの、明治期に三等三角点を設置した際の櫓の痕跡であったことも判明した。江戸時代以前に比定できる出土遺物もなく、山頂部においては積極的な土地利用がなされていなかったことが明らかとなった。

第2節 金森家地点

金森家地点では、平成30年度には主屋東部の土間を、令和元年度には東土蔵地下で発見された地下蔵の調査を実施した。調査によって、主屋東部の土間からは、酒造に関連する遺構SX01・02が検出された。SX01は、煉瓦を積み上げて構築した近代酒造に関連する遺構で、釜場と考えられる。釜場は半地下式で、西面に大釜と脇釜があり、それ以外の3面には石垣が構築されている。これらの石垣の天端は、主屋の土台である延石よりも下位に位置している。また、作業場へ下りるための階段は東面の石垣に完全に嵌っている。そのため、主屋が建てられたのちに作業場を構築することは困難であり、釜場は主屋と同時期に構築されたと考えられる。脇釜の南には一段階古い釜の一部とみられる石列が残っており、構築当初は石組みの釜であった可能性がある。釜が老朽化した際に、近代に新しく導入された煉瓦を用いて積みなおしたとも考えられる。

第3章でも報告したように、SX01に使用されている煉瓦は、いずれも形や大きさが揃っていない。SX01は、そのような不揃いな煉瓦を使用しているため、積んだ際に生じたすき間をモルタルの厚みで調整して組み上げている。日本では大正13(1924)年に、「JES(日本標準規格)第8号類別A普通レンガ」として、煉瓦の工業品規格が統一されるが、SX01に使用されている煉瓦は少なくともそれ以前の製品とみられる。

酒造に関連する遺構の類例としては、兵庫県神戸市の御影郷古酒造群や、西郷古酒造群における発掘調査によって、資料が蓄積されている。

御影郷古酒造群では、白鶴酒造(株)の石屋蔵で、18世紀後半から現代にいたるまでの酒造遺構が確認されており、3時期に分けられている。釜場は、明治時代後半に構築された煉瓦造りで2基のかまどが連結し、煙道と煙突を持つもの(Ⅰ期)、江戸時代末から明治時代中頃に操業され、石造りのかまど1基のみで、近代以降に煉瓦を並べた煙道が付けられているもの(Ⅱ期)、18世紀後半から19世紀初頭に操業された石積みによるもの(Ⅲ期)が、それぞれ検出されている。さらに、同地域内においては、江戸時代後期から近代にかけての酒造跡が検出され、3期の変遷が復元されている。江戸時代後期の釜場は、石組みと粘土で構築され、煙道がない。明治期には、かまどを煉瓦で、作業場は石組みで構築している。かまどには煙道が付けられており、煙突から建物外へ排出される構造となっている。いずれの例においても、明治時代以降に煙道が付設される要因として、燃料が薪から石炭に変わり、酒に石炭臭がつくことが嫌われたことが指摘されている。

西郷古酒造群では、明治期に構築された、2つのかまどと半地下式の作業場・煙道を持つ、煉瓦造りの釜場が検出されている。

近隣では、広島県東広島市の四日市遺跡で、明治時代後半から戦前に操業されていたとみられる釜場が検出されている。四日市遺跡では、2基のかまどと、半地下式の焚場(作業場)、焚場へ降りる階段、燃料室、煙道、煙突がまとまって検出されている。基本的な構造は金森家と同様だが、四日市遺跡で検出された酒造関連遺構は全ての設備が煉瓦で構築されている。

以上のように、酒造関連遺構については、酒造業が盛んな地域を中心に資料が蓄積されているが、島根県内においては金森家地点が初の発掘調査事例である。また、金森家地点は他地域の検出例とは異なり、作り酒屋ではなく家業の一つとして酒造を営んでいた。そのため本件は、地域に

おける酒造の実態解明において、重要な事例といえる。

令和元年度には、東土蔵の床下から発見された石造りの地下蔵(SX03)の記録調査を実施した。令和元年8月25日に開催した現場公開の際、見学に訪れた大森町内の住民に聞き取りを行ったところ、「戦後くらいの頃にはここに入って遊んでいた」とする情報が得られており、近い時期まではその所在が知られていたようである。なお、「中に何も入っていなかった」とする情報も併せて得られており、戦後にはすでに物置としては使用されていなかったようである。

第3節 佐毘売山神社地点

佐毘売山神社地点においては、整備事業に伴う調査を実施した。発掘調査は、佐毘売山神社本殿西側に所在する参道(A区)と、境内地内における拝殿と本殿に挟まれた範囲及び本殿南西の礎石建物跡(B区)である。

A区の調査では、本殿西側に所在する参道に関連する遺構として、側溝跡(SD01)が検出された。SD01は、割石積や岩盤の削り出しによって構成される三面水路である。路面に関する情報としては、現在機能している路面の下位に2面の硬化面が確認でき、路面の整備が何度か行われていたことが判明した。また、参道の3か所に延石を配して緩やかな階段状にしていることや、上面には玉砂利が敷かれていた時期もあったことが確認できた。

B区では、拝殿と本殿に挟まれた部分(第1トレンチ)と、本殿の南東に位置する礎石建物跡(第2トレンチ)の調査を実施した。第1トレンチでは、硬化面に文化15(1818)年に発生した火災の痕跡とみられる煤が残っていることが確認された。また、火災ののちに境内地を西側に拡張しているとみられる様相も確認できた。第1トレンチの南側に構築されている石垣には、やはり火災の痕跡とみられる被熱痕や、煤の付着が広範囲に認められた。また、石垣の西端から約1mの範囲は、ほかの部分とは壁面の様相や積み方が異なってお

り、前述した境内地の拡張に伴って石垣も拡張されていることが確認された。

本殿・拝殿の南西に位置する礎石建物跡に設定した第2トレンチでは、礎石を据えた面が確認された。この礎石建物は、文化15(1818)年の火災によって焼失し、その後再建されたと記録されているが、現在では建物が失われている。発掘調査では、礎石及び周囲に被熱痕や煤などは認められなかったため、火災後に周辺の整理が行われ、礎石ごと建て替えられた可能性も考慮される。

第4節 まとめ

平成30年度・令和元年度に実施した仙ノ山地区の発掘調査は、石見銀山遺跡における調査課題の一つである「支配」の実態解明を主たる目的として着手した。発掘調査によって、人為的な地形改変や、土地利用を示す遺構が、仙ノ山山頂付近から北部の平坦面にかけて点在している様相が確認された。しかし、昭和60年度の分布調査以降に度々指摘され、パンフレットや地図などにも掲載されてきた「仙ノ山城郭群」については、その

所在を裏付ける資料は検出されなかった。

金森家地点では、煉瓦を積み上げた釜場(SX01)や、石敷きの洗い場(SX02)などの近代の酒造に関連する遺構や、東土蔵で見つかった地下蔵(SX03)の調査を実施した。SX01・02は、金森家地点における酒造業の様相を具体的に示す資料として重要であるとともに、近代の酒造遺構として全国的にも貴重な例の一つである。さらに、釜場の一部には、近世にさかのぼる可能性がある前身遺構の一部が残存していたことや、半地下の作業場の構築状況からは、主屋と同時期に釜場が形成されていたと考えられることなど、当地点における建物の利用や、家業の実態に関する情報が得られたことも大きな成果といえる。

佐毘売山神社地点においては、参道の設備や構築状況に関する情報など、整備に先立つ調査としては十分な成果が得られた。また、文化15(1818)年に発生した火災の痕跡とみられる煤・被熱痕が確認されたことや、火災後の境内地の整備に関する情報が得られたことも重要な成果である。

引用・参考文献

島根県教育委員会 1986『石見銀山遺跡総合整備計画策定関連 石見銀山関係資料関連遺跡分布調査調査報告』

島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会 1987『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』

第1冊【遺跡の概要】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』

第2冊【発掘調査・科学調査編】

島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川 隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000～2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10～14

大田市教育委員会 2006～2018『石見銀山遺跡発掘調査概要』15～26

島根県大田市教育委員会 1975『石見銀山御料 大森の町並調査報告書』

新川 隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会

島根県教育委員会 1997『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第1集〉 石見の城館跡』

江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

井尻 格 2004『御影郷波がえし蔵 ―御影郷古酒造群第2次発掘調査の記録―』神戸市教育委員会

大橋康二 1984『肥前陶磁の変遷と出土分布』『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社

小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982

関西近世考古学研究会 2013『関西近世考古学研究 21 中世末から近世の地鎮め遺構の諸様相』

熊野栄助 1973「石見銀山御料 大森 ―大田市大森町並調査速報―」『季刊文化財』第22号 島根県文化財愛護協会

石島三和他 2007『西郷古酒造群／大石東遺跡 第4次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

西尾克己 2013「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について(1)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』3

島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について(2)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4

島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ 63 平凡社

橋詰清孝・黒田恭正 2007『御影郷古酒造群第4次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

平田正典 1979『石見粗陶器史考 ―原点の模索と丸物師の生活史―』黒潮社

守岡正司・新川 隆 2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』I 島根県教育委員会・

大田市教育委員会

圖 版



仙ノ山地区 第1トレンチSX 02 検出状況 (西より)



同 溝状遺構 (西より)



同 北壁土層断面 (南東より)



同 北壁西端土層断面 (南より)



同 完掘状況 (東より)



同 完掘状況 (西より)



仙ノ山地区 第2トレンチ完掘状況(南西より)



同 完掘状況(南東より)



同 第3トレンチ完掘状況(南東より)



同 完掘状況(南西より)



同 第4トレンチ完掘状況(南西より)



同 完掘状況(西より)



同 完掘状況(北より)



同 西壁土層断面(北東より)



仙ノ山地区 第5トレンチ調査区設定状況(南東より)



同 SD 01 完掘状況(南東より)



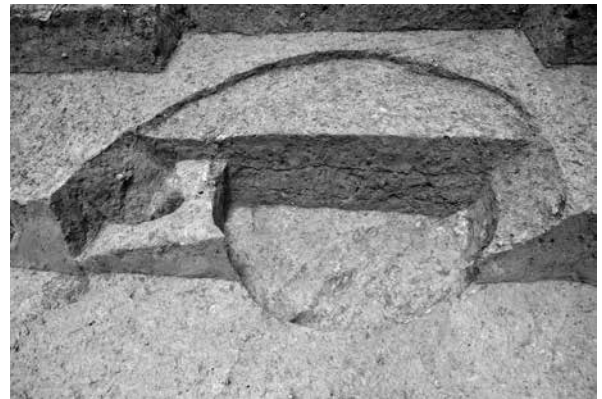
同 SD 01 完掘状況(北西より)



同 SD 02 完掘状況(西より)



同 SD 03 完掘状況(北東より)



同 SK 01 半截状況(南より)



同 北壁土層断面(南西より)



同 西側完掘状況(南東より)



仙ノ山地区 第7トレンチ完掘状況(南東より)



同 北壁土層断面(南西より)



同 第8トレンチ調査区設定状況(南西より)



同 完掘状況(西より)



同 第9トレンチ完掘状況(西より)



同 調査区設定状況(北東より)



同 第10トレンチ完掘状況(南西より)



仙ノ山地区 第10～12トレンチ調査区設定状況(南西より)



同 完掘状況(西より)



同 第11トレンチ完掘状況(北西より)



同 完掘状況(南より)



同 第12トレンチ槽柱穴完掘状況(南西より)



同 完掘状況(南東より)



同 第10～12トレンチ完掘状況(北東より)



同 完掘状況(北西より)



金森家地点 SX 01 脇釜完掘状況 (東より)



同 SX 01 大釜完掘状況 (東より)



同 SX 01 作業場完掘状況 (北西より)



同 SX 01 作業場階段 (南西より)



同 SX 01 土層断面 (北より)



同 SX 01 土層断面 (西より)



金森家地点 S X 02 検出状況 (南西より)



同 庭トレンチ調査区全景 (南西より)



同 庭トレンチ完掘状況 (西より)



同 裏門立会トレンチ完掘状況 (南より)



同 石列前面検出状況 (南西より)



金森家地点 SX 03 完掘状況 (東より)



同 SX 03 内部完掘状況 (北東より)



同 SX 03 扉軸受け部 (北東より)



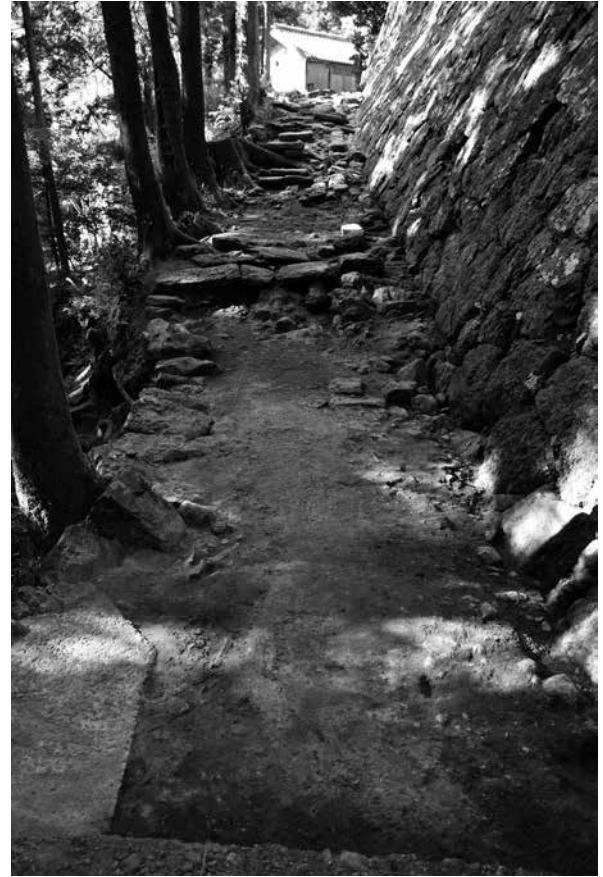
同 SX 03 北壁 (南より)



同 SX 03 東壁 (西より)



佐毘売山神社地点 A区完掘状況(北より)



同 完掘状況(南より)



同 完掘状況(東より)



同 玉砂利敷検出状況(南より)



同 側溝検出状況(北西より)



同 土層断面(南より)



佐毘売山神社地点 B区第1トレンチ完掘状況(南西より)



同 完掘状況(北東より)



同 遺物出土・焼土検出状況(南西より)



同 本殿西側石垣(北西より)



同 本殿下岩盤検出状況(西より)



同 B区第2トレンチ全景(北東より)



吉岡家地点 石敷検出状況(北東より)



荒田家地点 石列検出状況(北より)



金森家地点 SX 01 完掘状況 (西より)



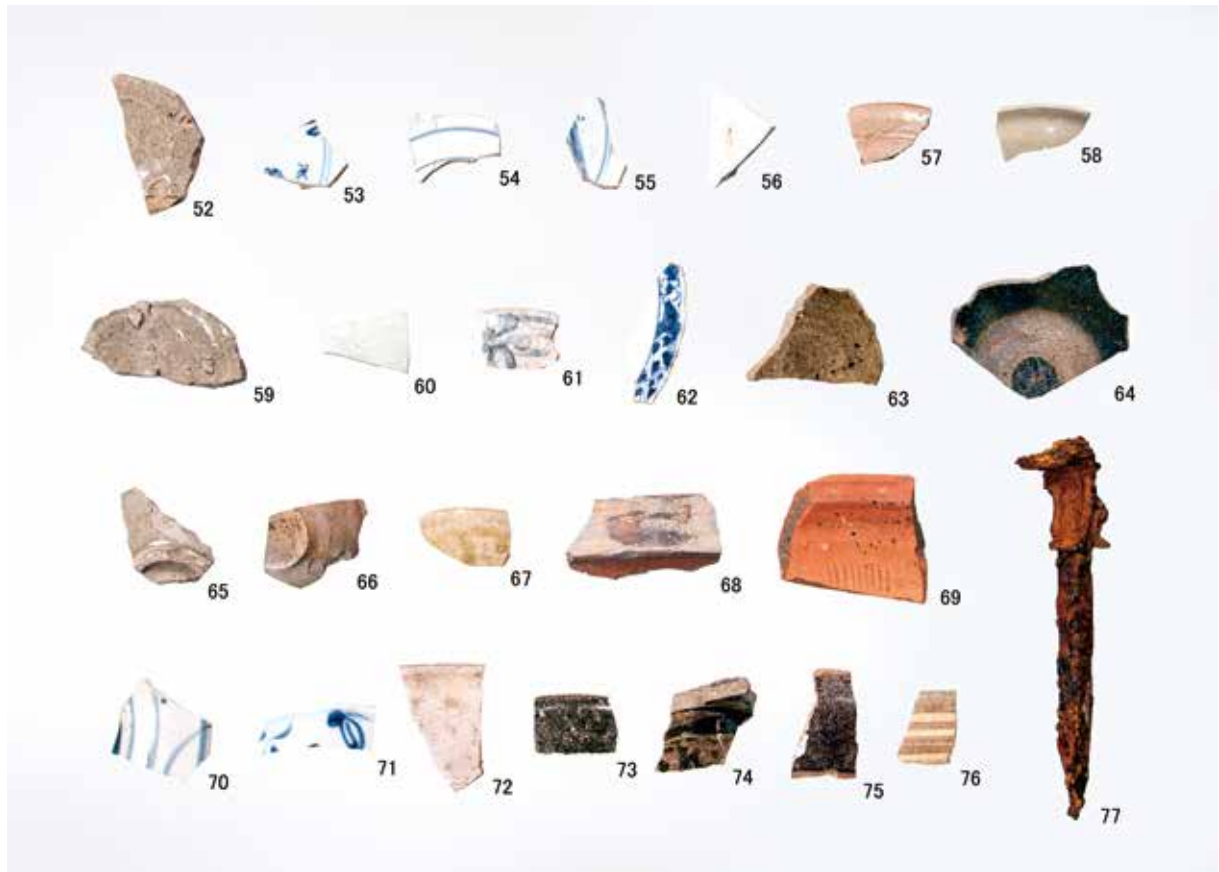
同 SX 01 完掘状況 (東より)



仙ノ山地区 第1・第3トレンチ出土遺物



同 第4トレンチ出土遺物



仙ノ山地区 第5・第9・第11トレンチ出土遺物



金森家地点 出土遺物 I



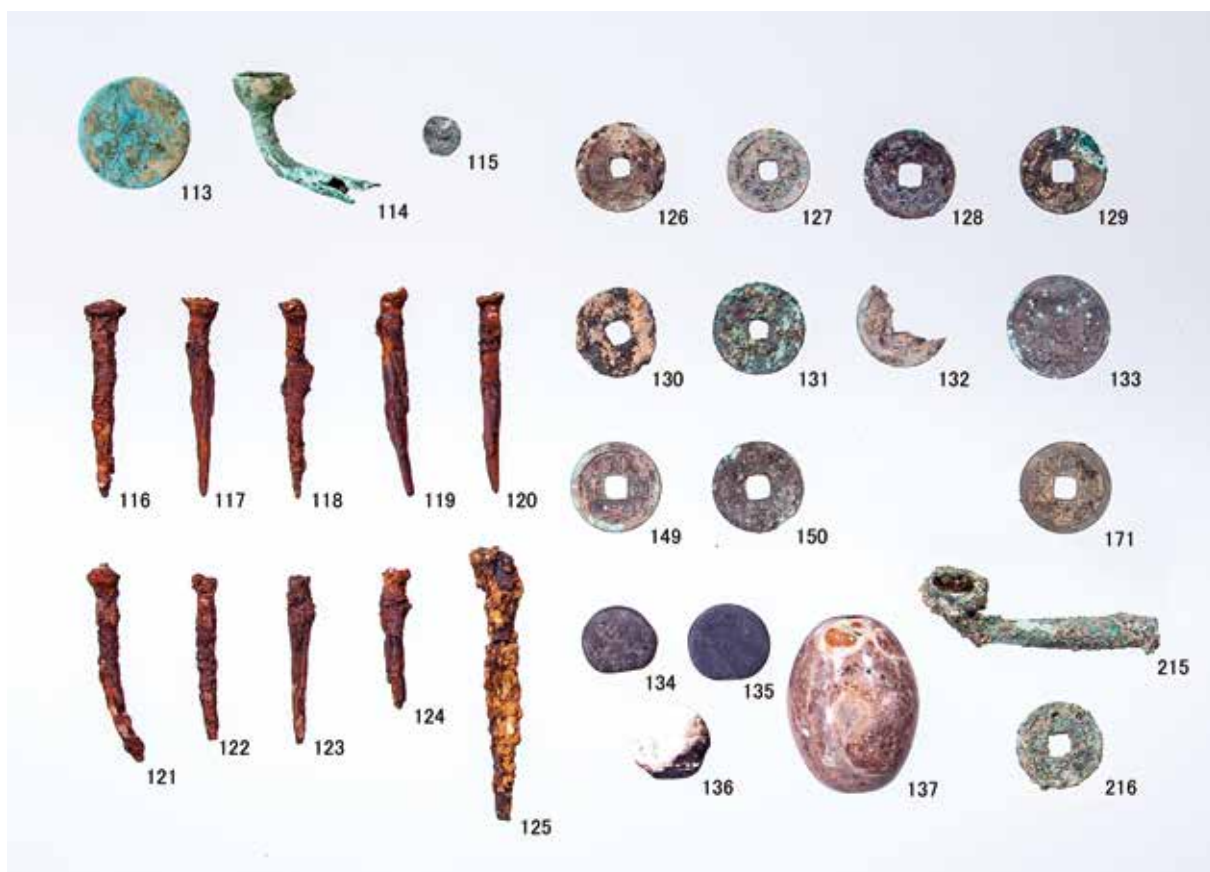
金森家地点 出土遺物 II



同 出土遺物 III



金森家地点 出土金属製品



金森家地点・荒田家地点 出土金属製品

PL. 16



金森家地点 出土遺物Ⅳ



金森家地点 出土遺物 V



佐毘売山神社地点 出土遺物



荒田家地点 出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	いわみぎんざん					
書 名	石見銀山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site					
ふ り が な	いわみぎんざんいせきはくつちようさがいよう					
副 書 名	石見銀山遺跡発掘調査概要 27					
シリーズ名・巻次	仙ノ山地区・金森家地点・佐毘売山神社地点					
編 著 者 名	山手貴生・新川 隆・尾村 勝					
編 集 機 関	島根県大田市教育委員会					
所 在 地	〒 694-0064 島根県大田市大田町大田口 1, 111 番地					
発 行 年 月 日	2020 年 3 月 30 日					
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
いわみぎんざん 石見銀山	しまねけんおおだしおおもりちょう 島根県大田市大森町	32205	A232 ～ 319	35° 5' 30"	132° 26' 30"	2018 年 4 月 ～ 2019 年 11 月
調 査 面 積	349 m ²					
調 査 原 因	国庫補助事業による学術調査					
所 収 遺 跡 名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項	
石 見 銀 山	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	土 坑 石 列 溝 跡 酒 造 関 連	陶 磁 器 金 属 製 品 石 製 品 木 製 品	国 指 定 史 跡 銀 生 産 遺 跡 (1969 年 4 月 14 日) (2002 年 3 月 19 日、 2005 年 3 月 2 日、 2005 年 3 月 14 日、 2008 年 3 月 28 日 追加指定)	
	町屋跡					

石 見 銀 山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要 27



—仙ノ山地区・金森家地点・佐毘売山神社地点—

2 0 2 0 年 3 月

島根県大田市教育委員会

島根県大田市大田町大田口 1,111 番地

印刷・製本 株式会社 急行印刷